

94

98

秋浦生著

# 大阪名勝

附鐵道名勝案内

嵩山堂發行





讀者諸君よて一筆申上ひ



本紙を口で申せしめたる一口に於て、また字で書きしめても僅か二字  
 まで十里半四方で、周圍が十二里に御座しへば、なかな  
 かな見物の出来るものに御座なく、よつてこゝに三日間の  
 御案内申上ひる事を致し。

此處は博覽會の見物の目的に於ては、其處を起點にいたし、三日  
 目の末には、矢張り博覽會に歸るやうにいたしむがわかりよからう  
 かと存じ、左様いたし置ひ

一 さて初めの日は「南區と上町」たりし上町は桃山から以南の事とい  
 たし、まづ第一に博覽會前の合邦社から東方に上り、天王寺、合



利寺、生玉、高津から道頓堀、千日前、今宮、木津、難波を見物いたし湊町で打どめをいたし。

一 次日は「西區と北區」、たゞし北區は曾根崎から西部に御座いへどなかく遠路にい、堀江から新町、松島、それより舟で築港にまゐり、安治川を溯りて、福島、堂島、中之島など一覽、この夜は梅田にて一泊。

一 さへば、終の日に御座い、當日は「天満と上町」、それに「船場と島の内」といふ割當にて、その夕方には博覽會前に出られい算段に御座い、勿論、上町は初めの日の見残しにて、桃山から以北だけにい。

一 初日も次の日も、わざわざ停車場近くで泊るやういたしは、何かにつけて物の便利が宜しからむとの老婆心に御座い、これだけ申置

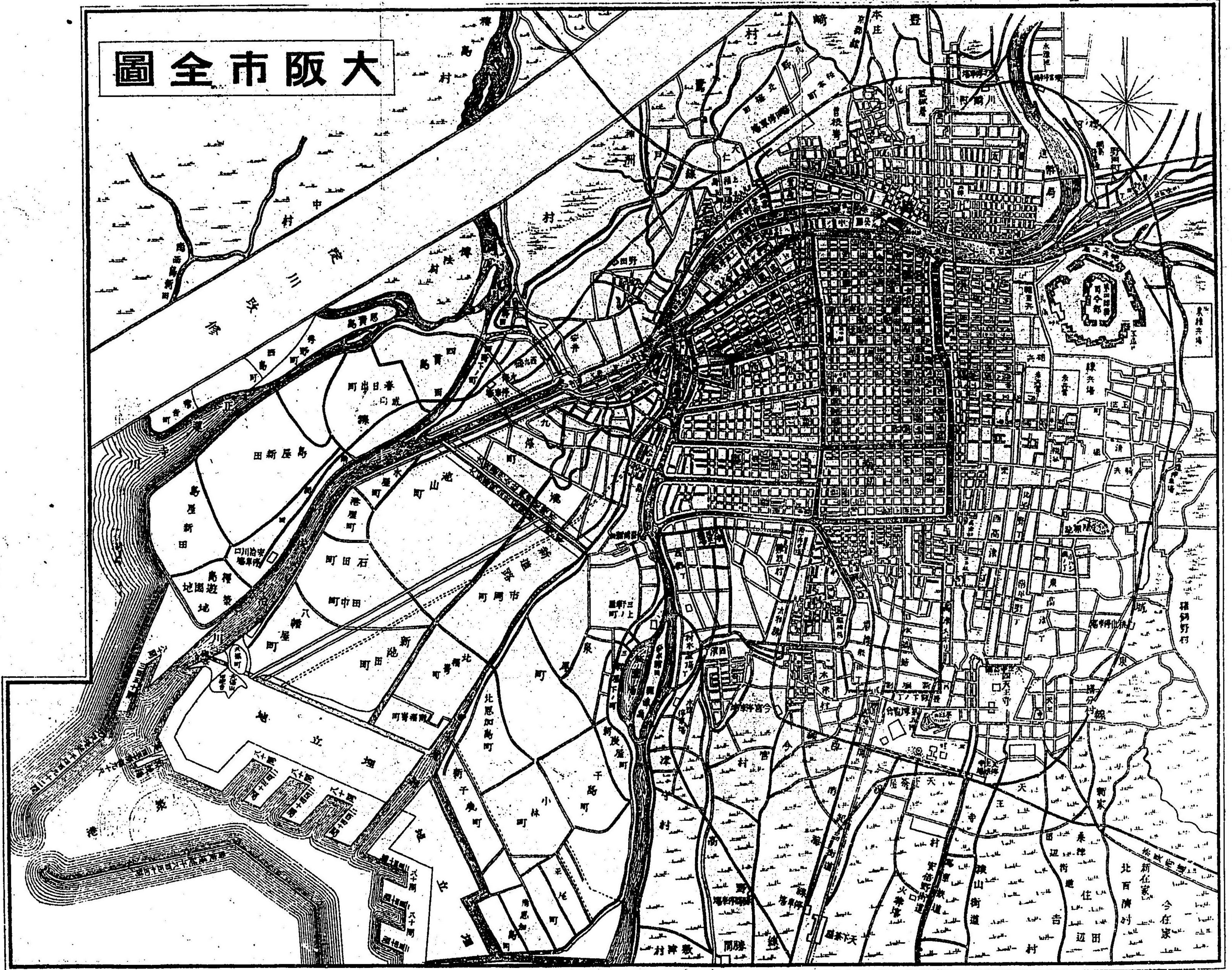
いへば、萬事は書中にて御合點下されい事を存し、草々。

明治三十六年一月 秋 浦 生

尙々、各鐵道附近の名所古蹟は、別に附録にいたし置い、篤と御覽の上、然るべく御見物なさるべくい。

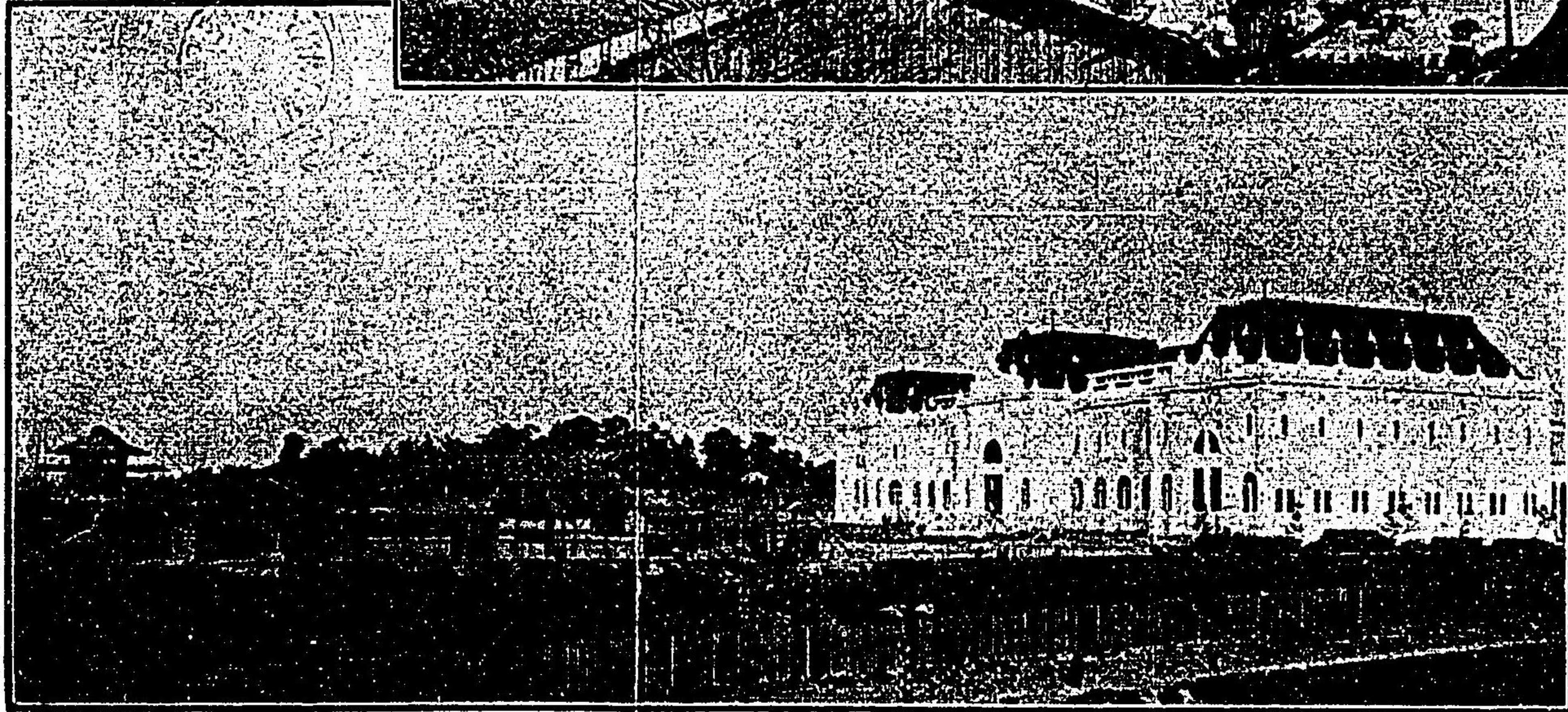
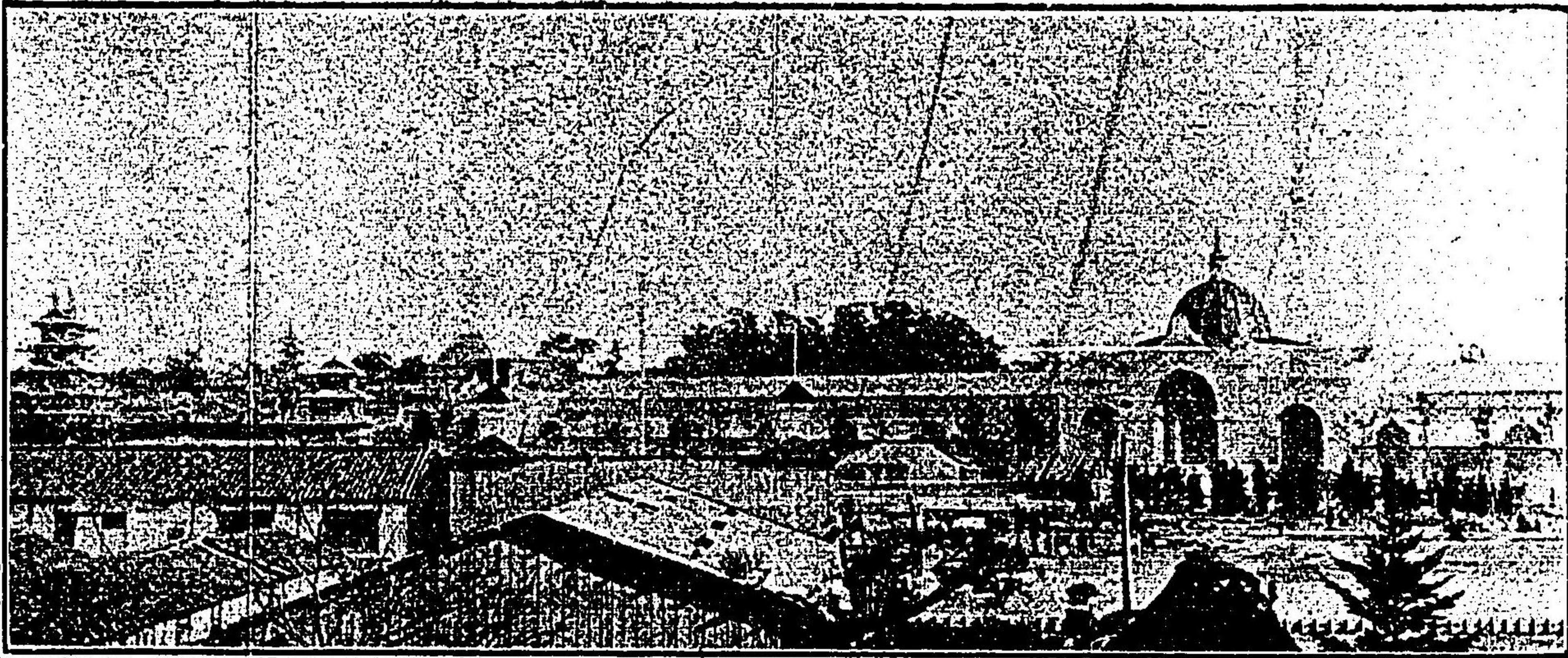


# 大阪全市圖



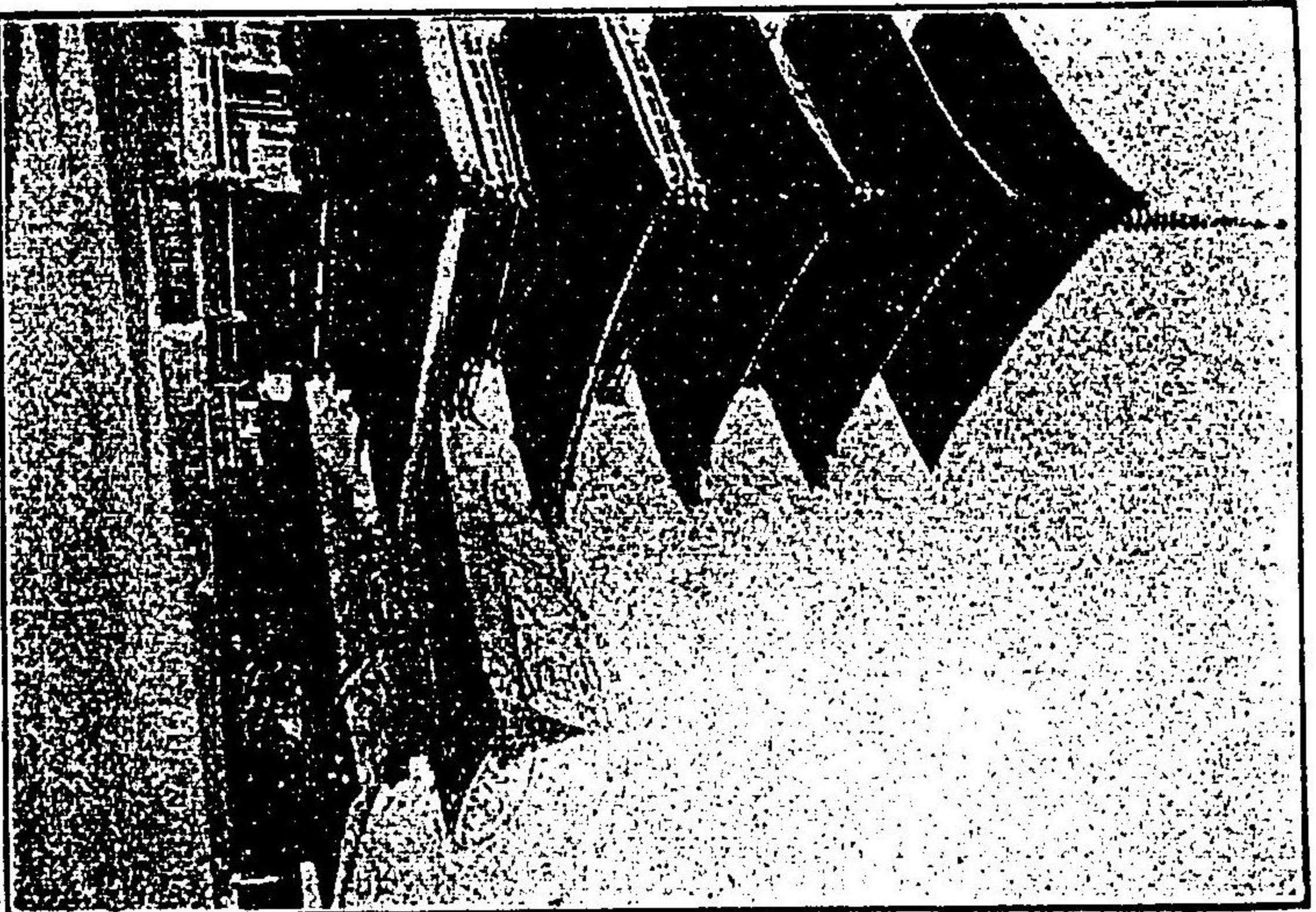


第五回內國勸業博覽會之景

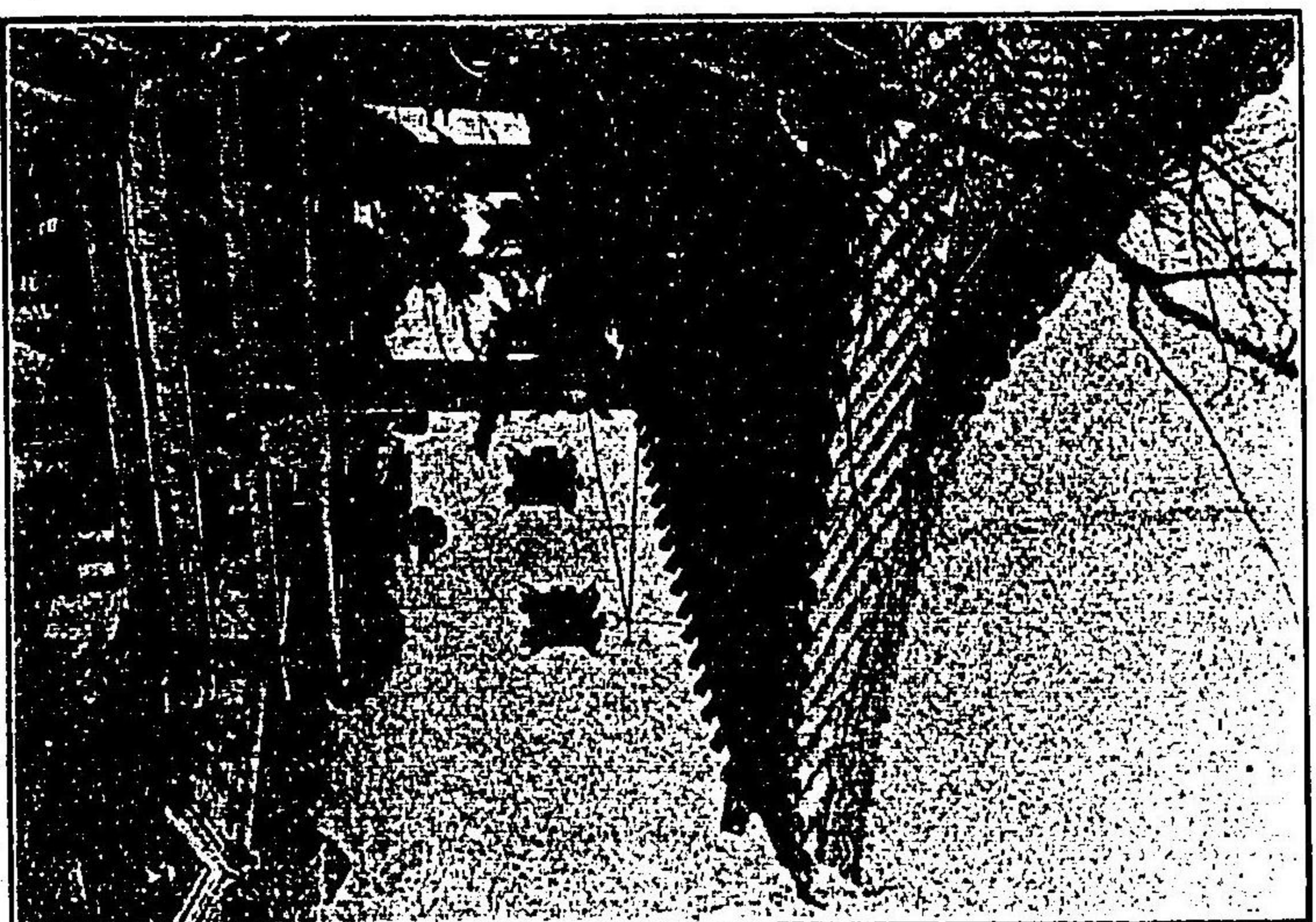


同美術館





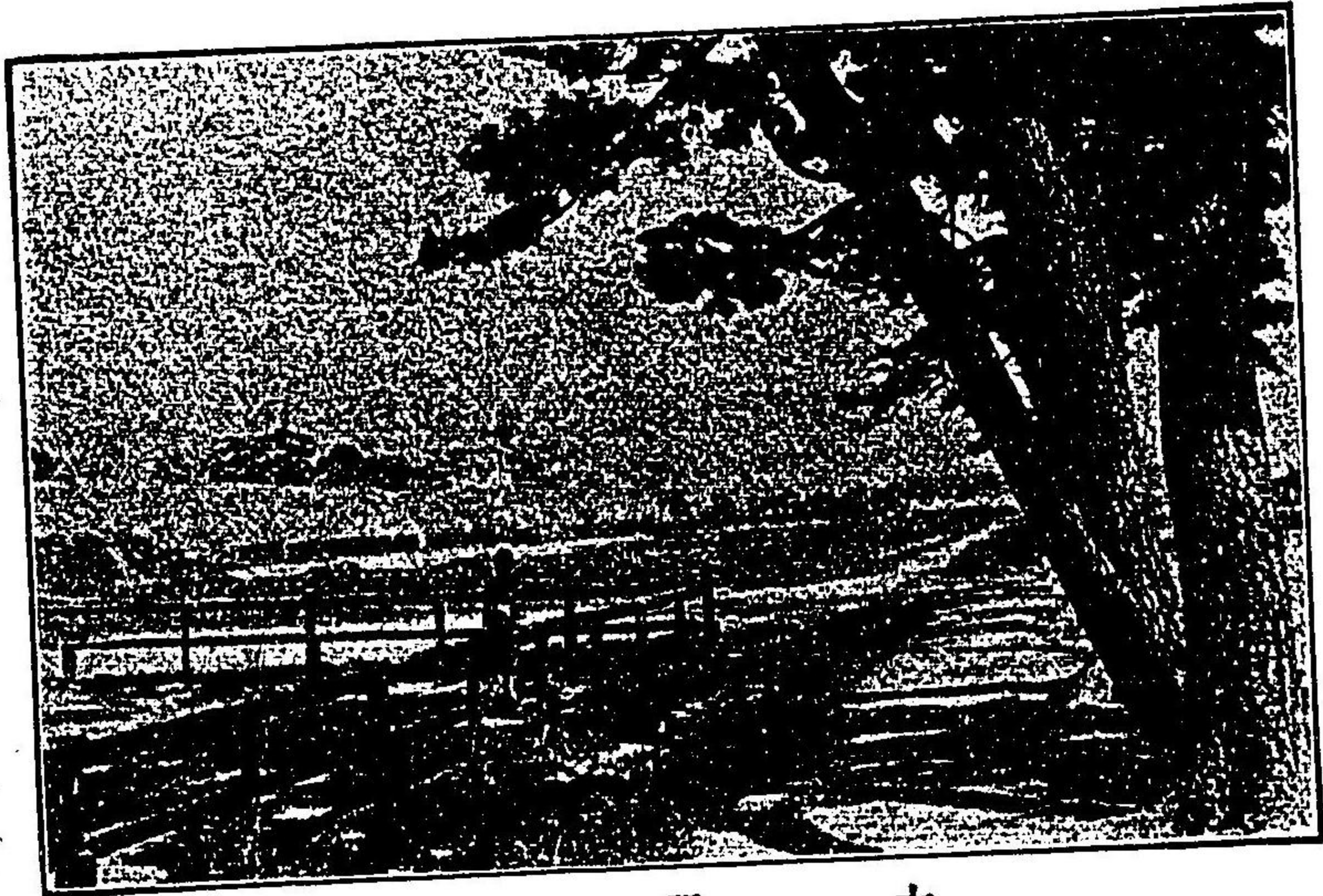
寺 主 天 四



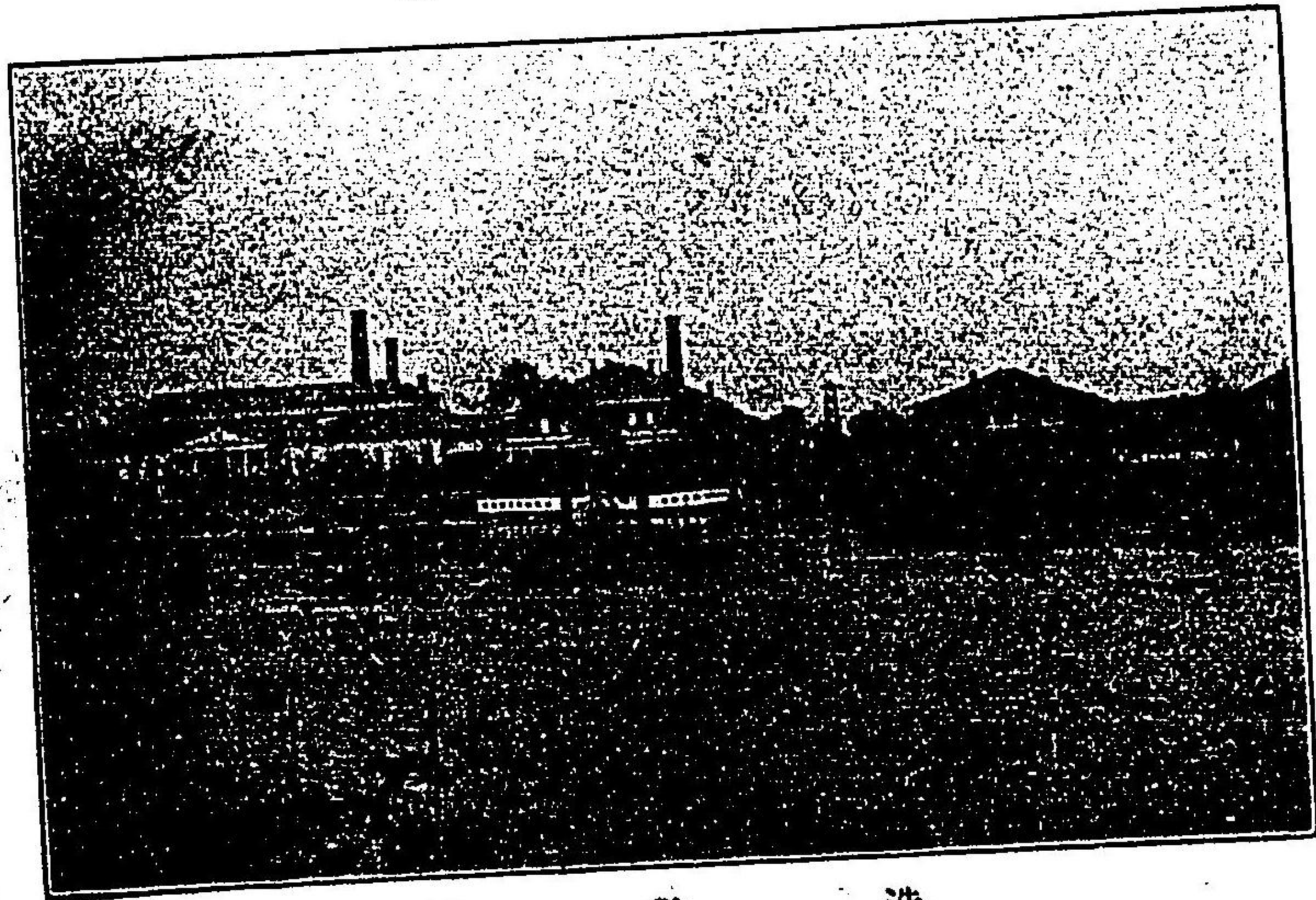
臺 舞 社 神 津 高

東京繪興舎寫眞版





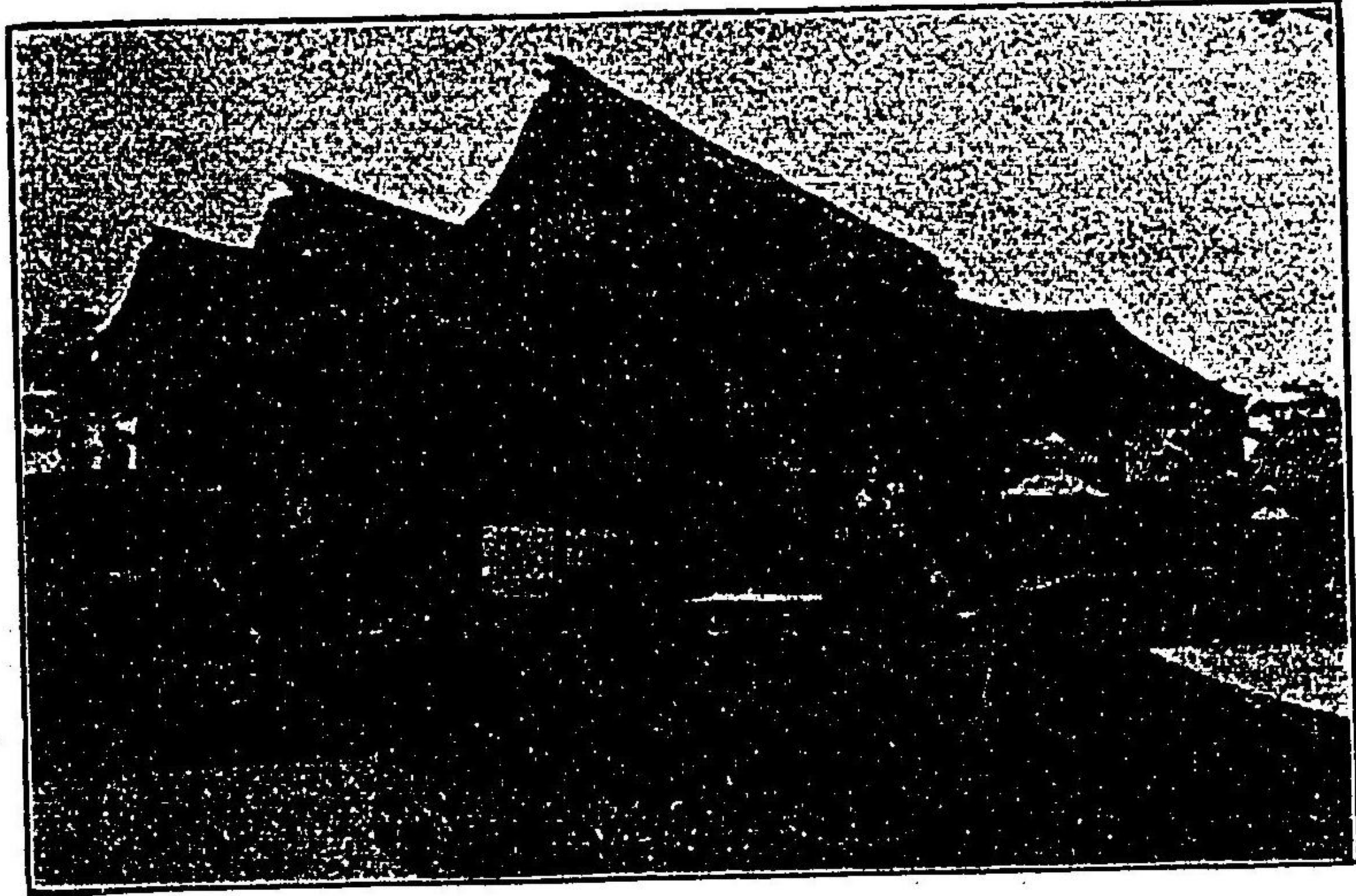
大 阪 城



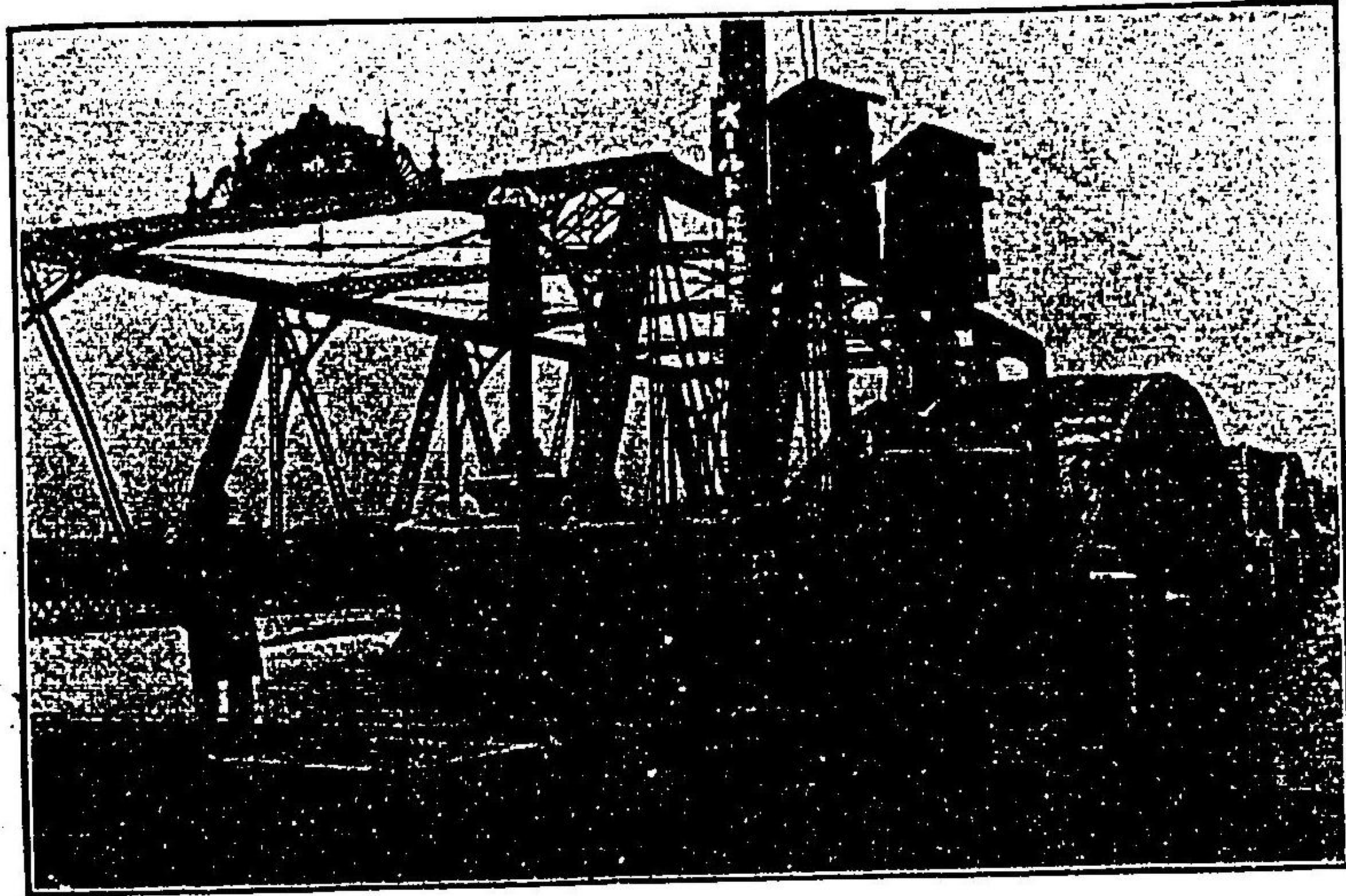
造 幣 局



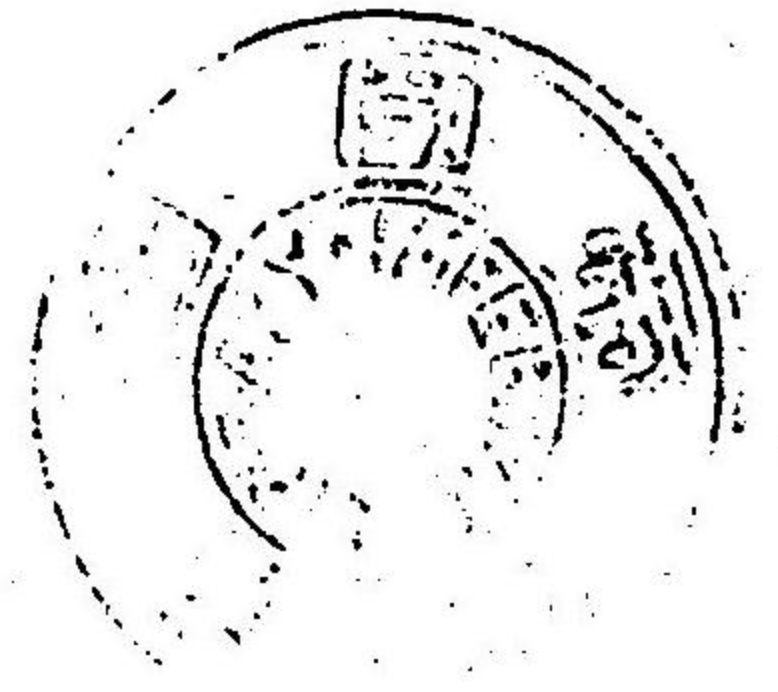




社 神 天 滿 天



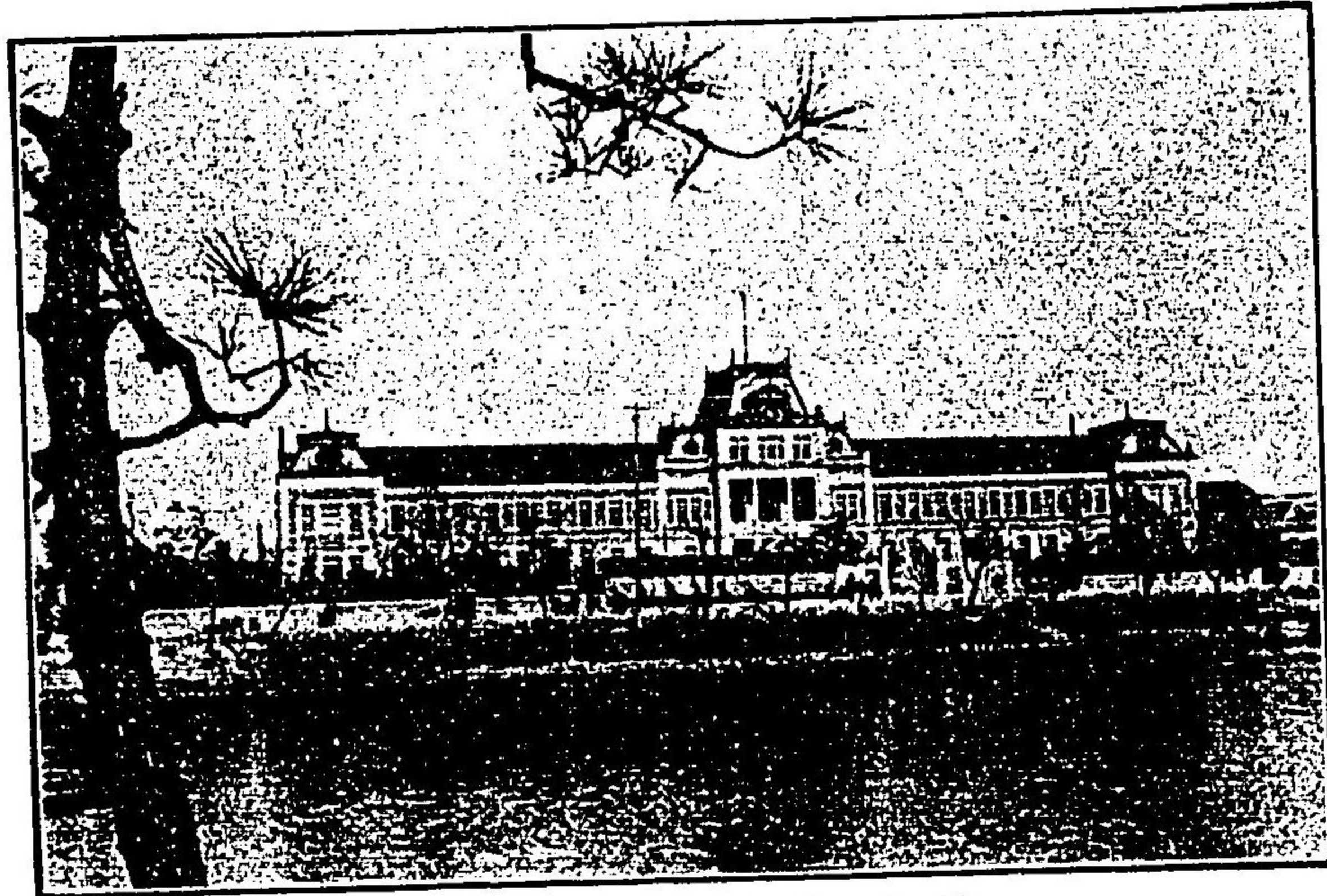
橋 神 天





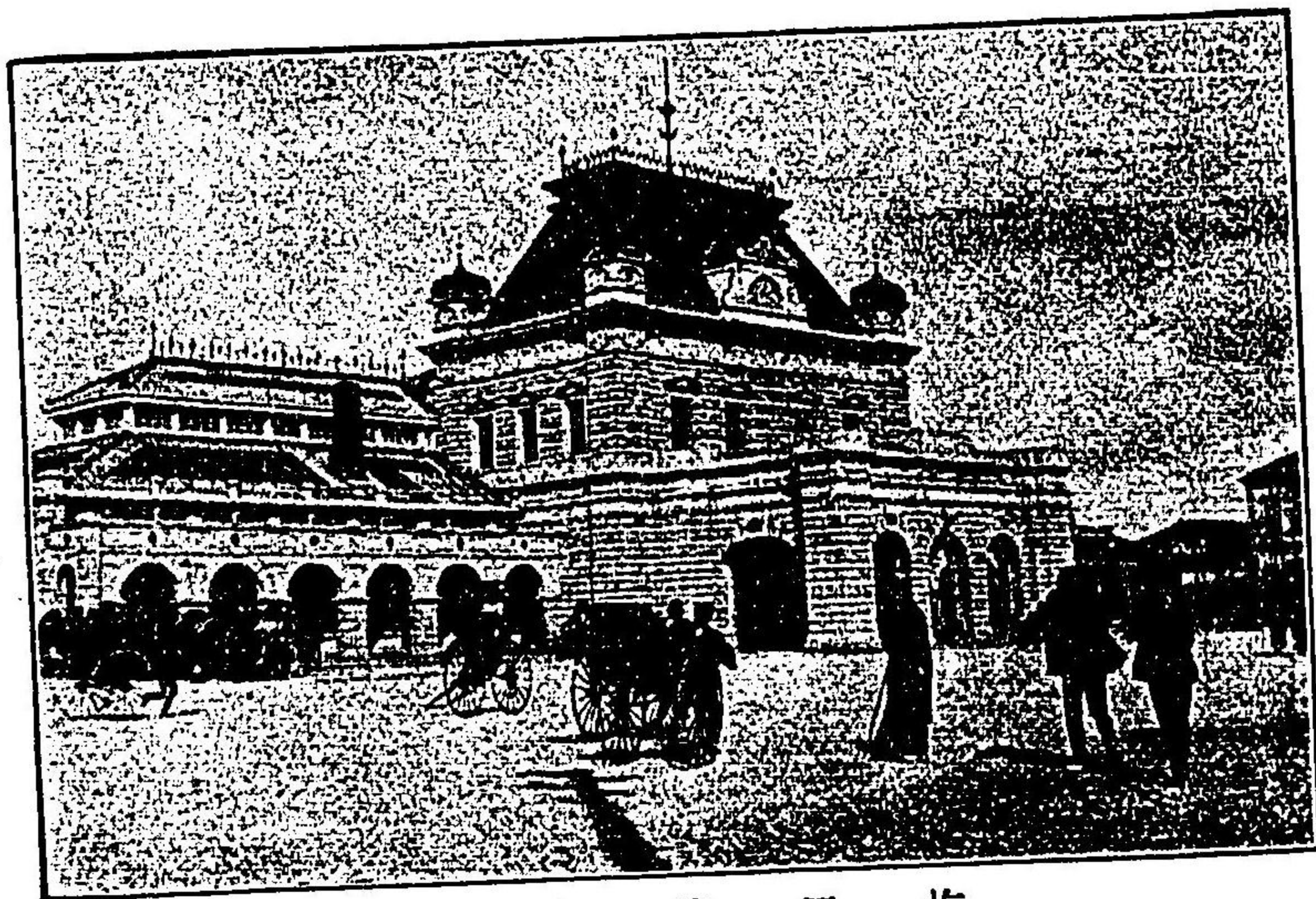


園 公 島 之 中



所 判 裁 方 地 院 訴 控



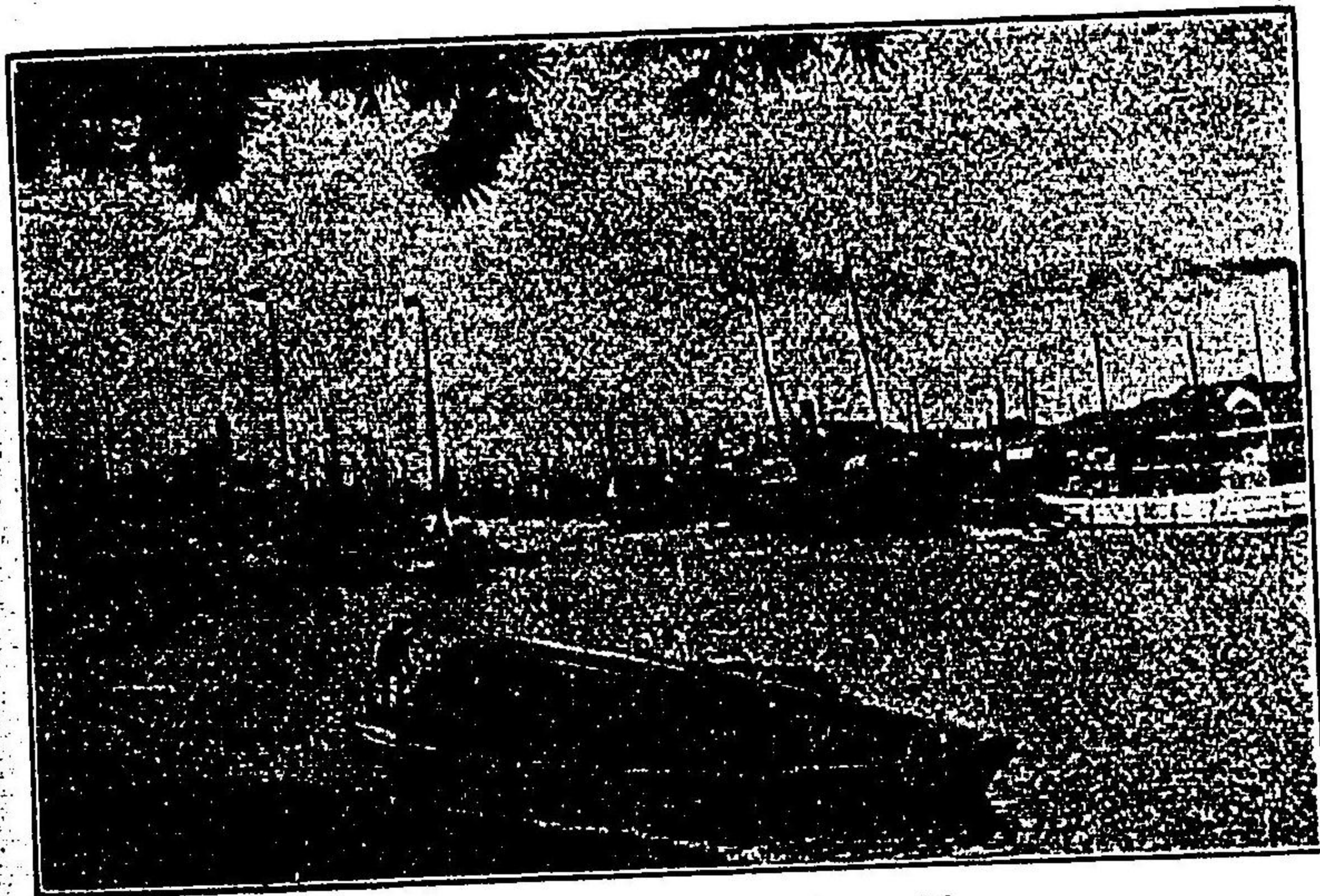


梅田停車場

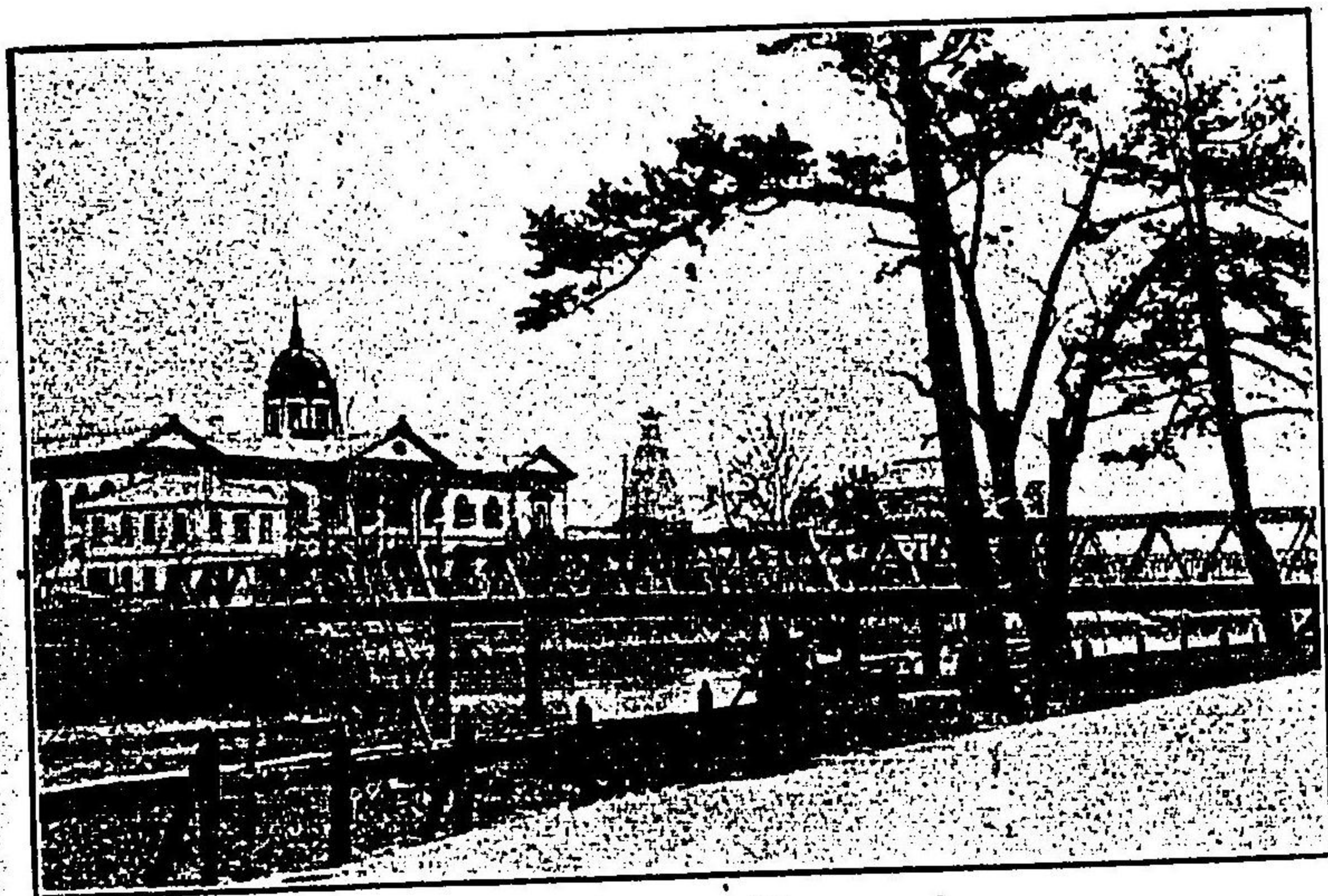


商陳品列所



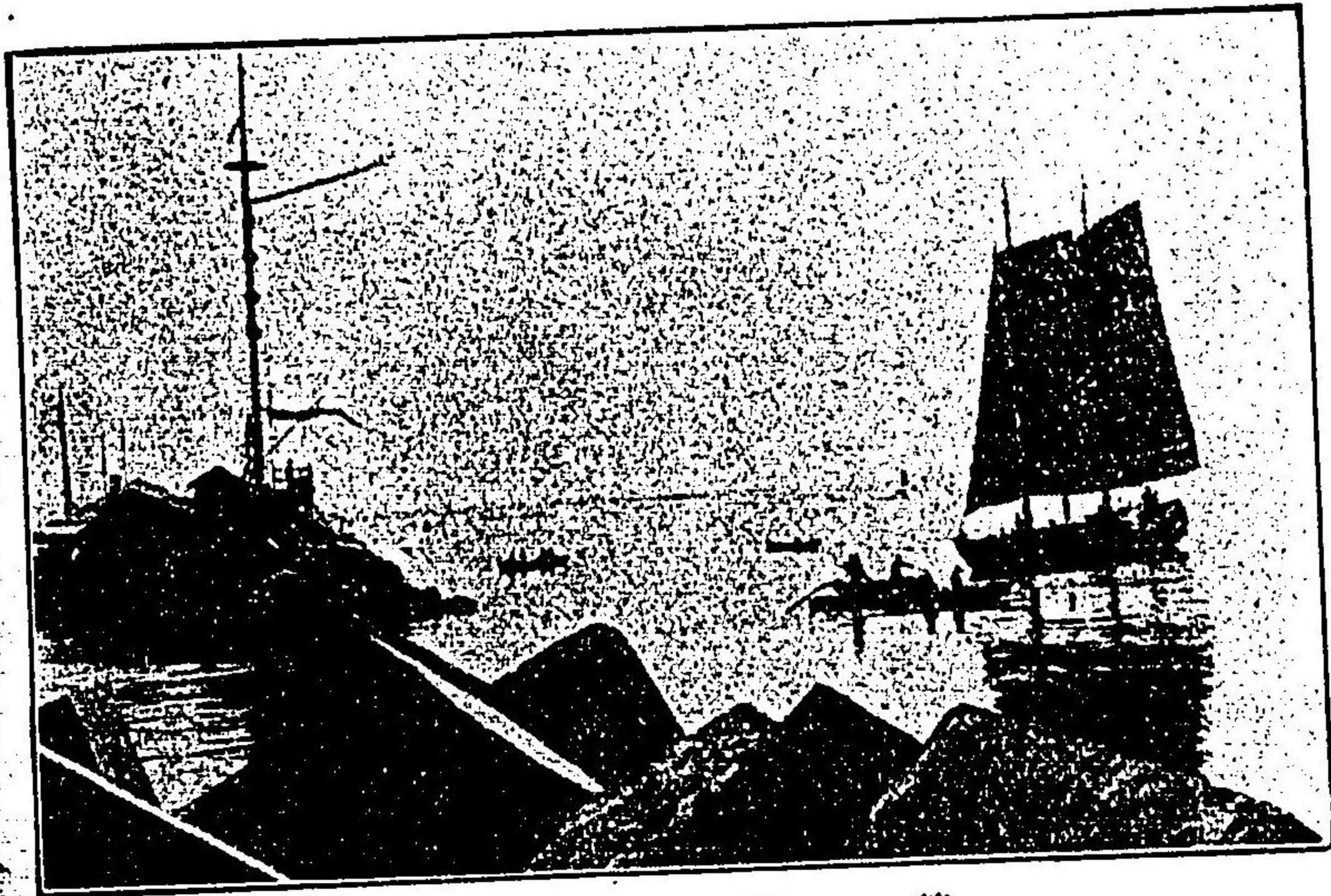


川口波止場



大阪府廳



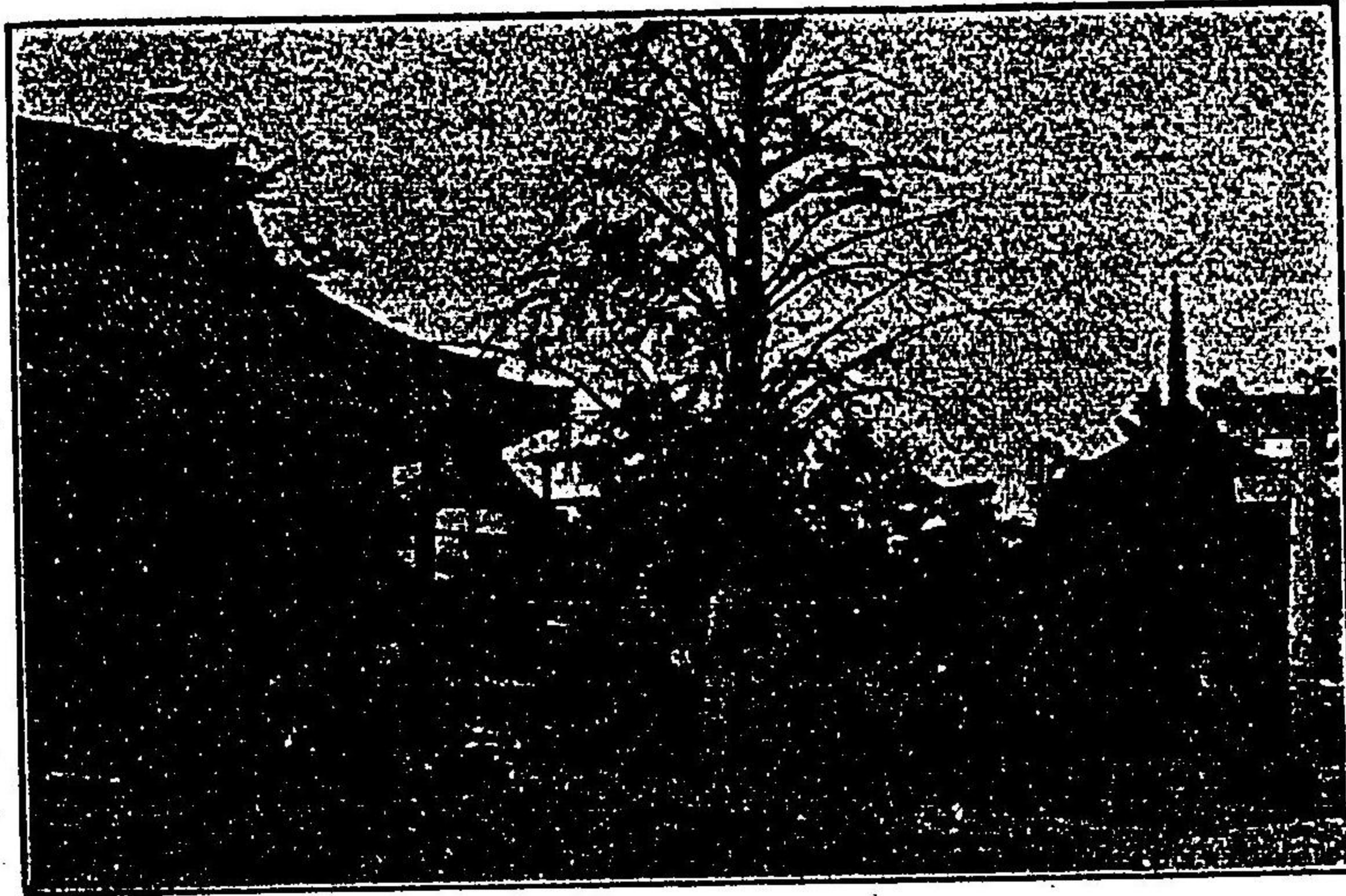


築港工事

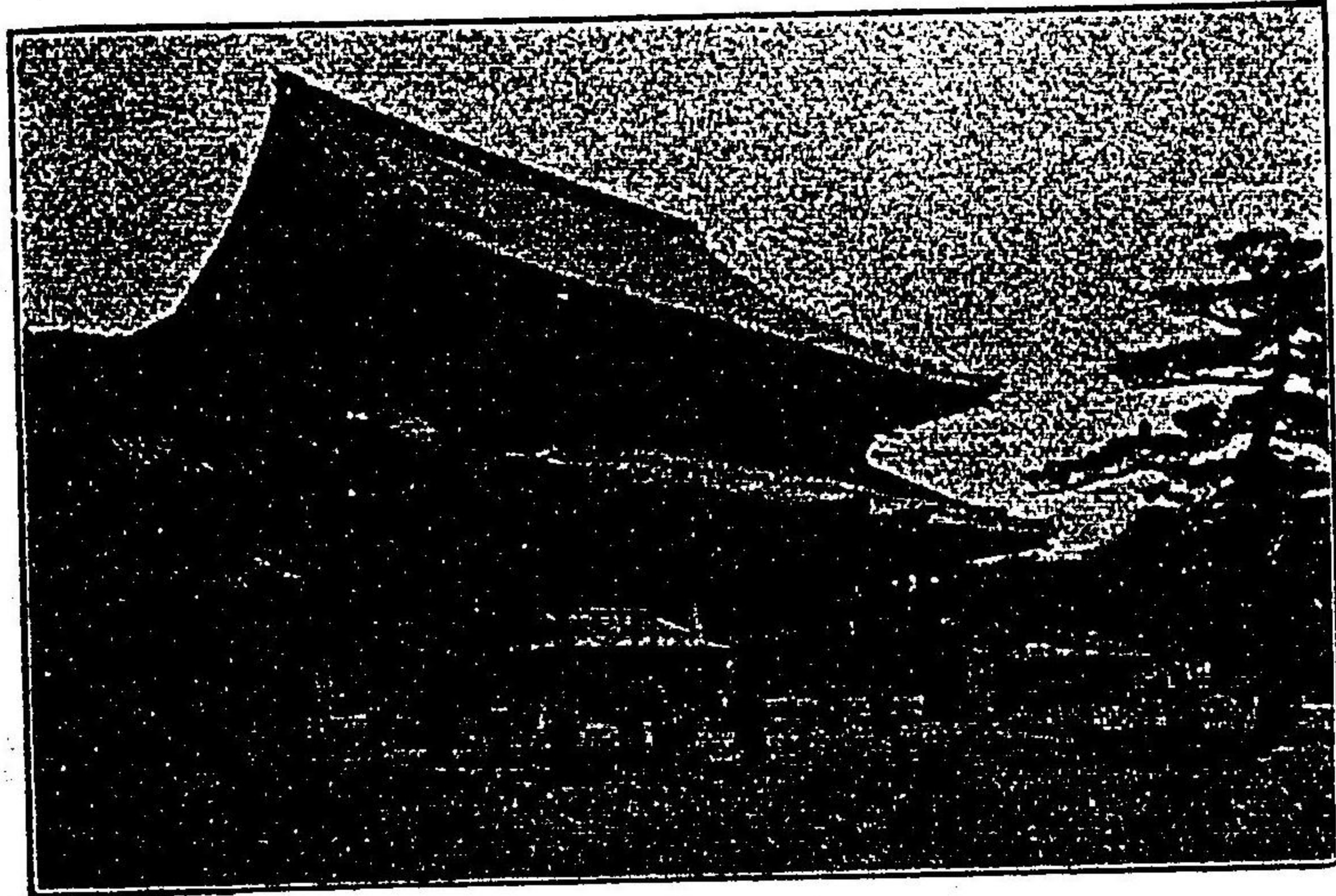


木津川千本松



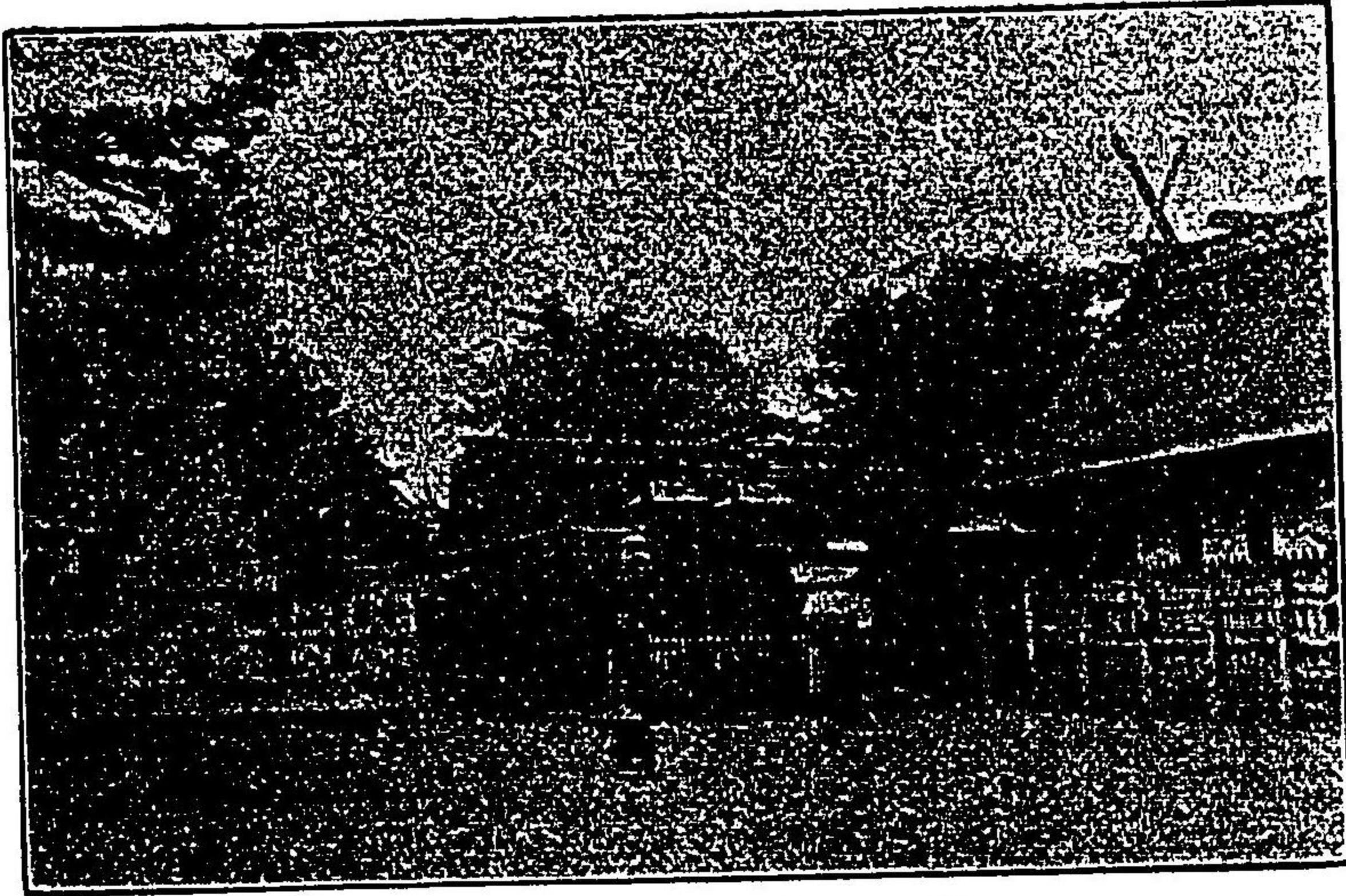


阿彌陀池和光寺

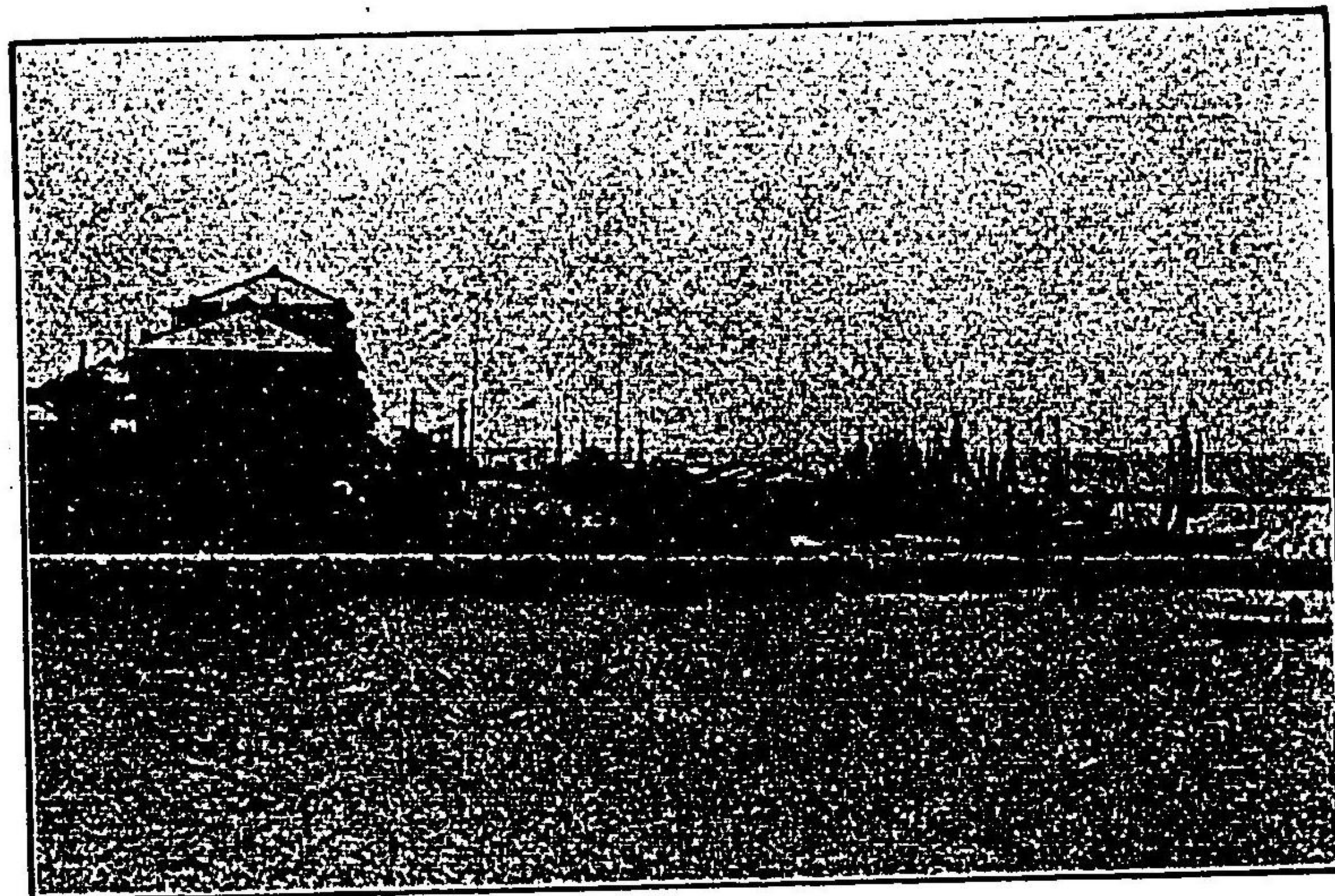


大坂南御堂



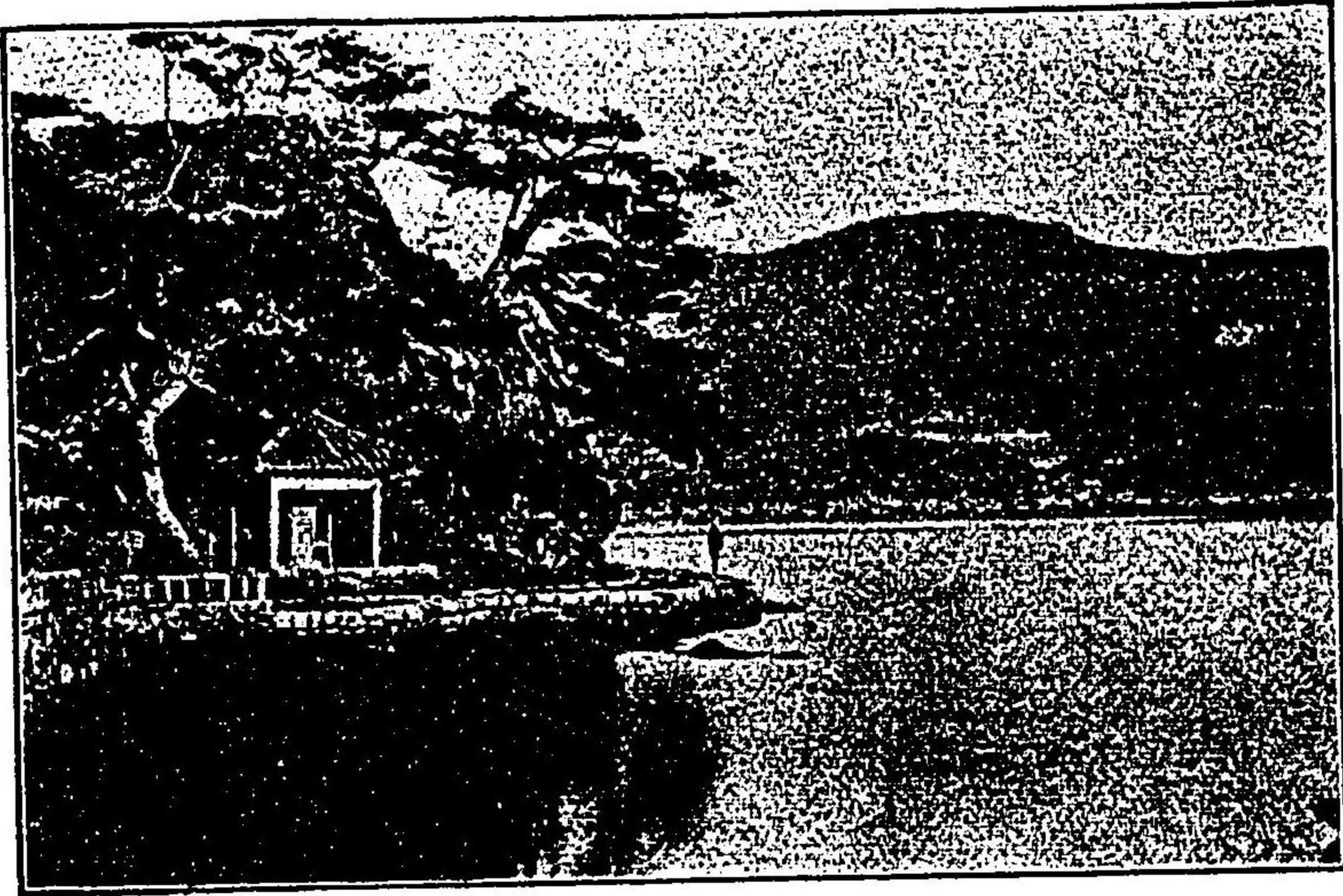


住吉神社

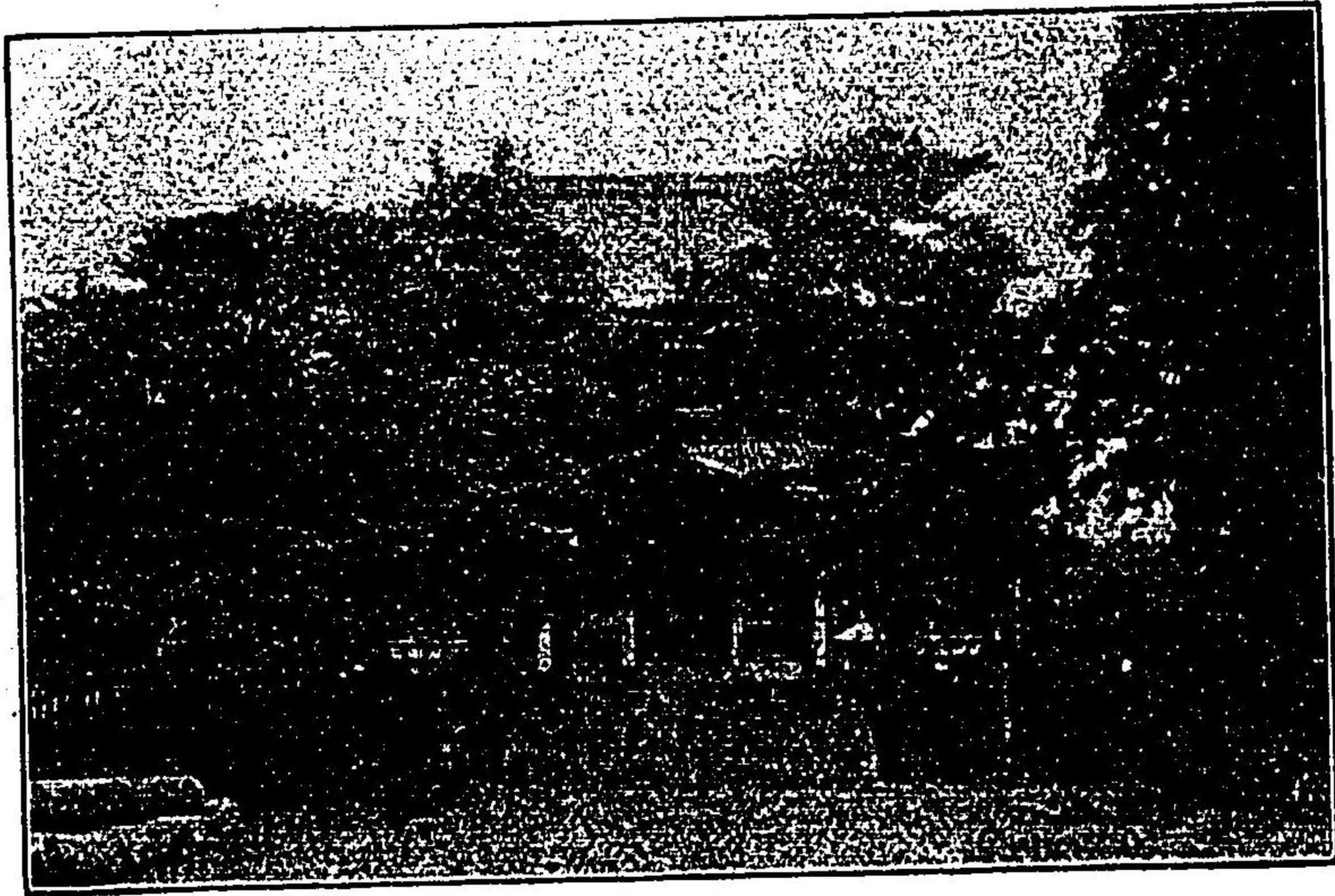


堺港



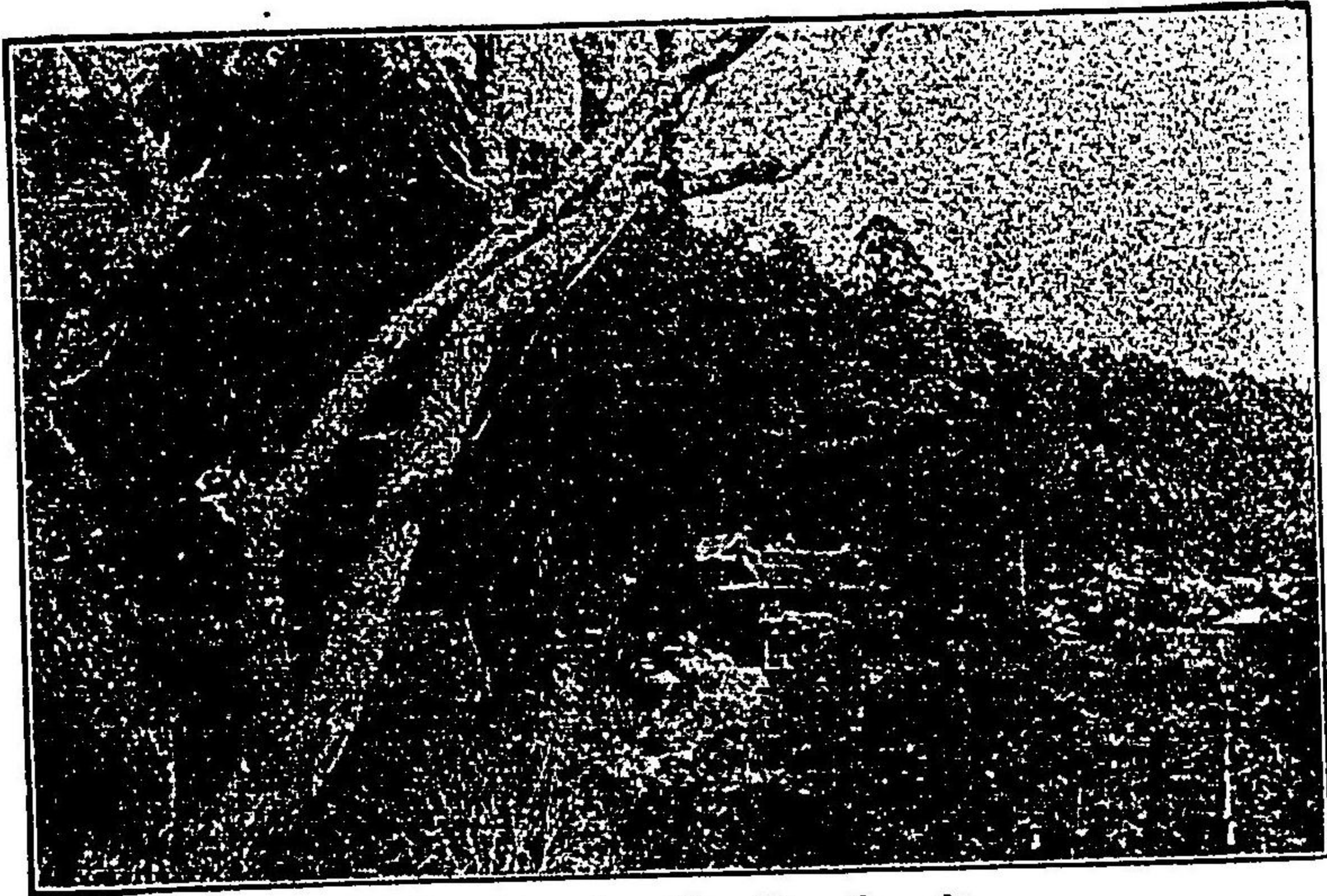


望遠寺井三紀リヨ浦歌和



堂金山野高





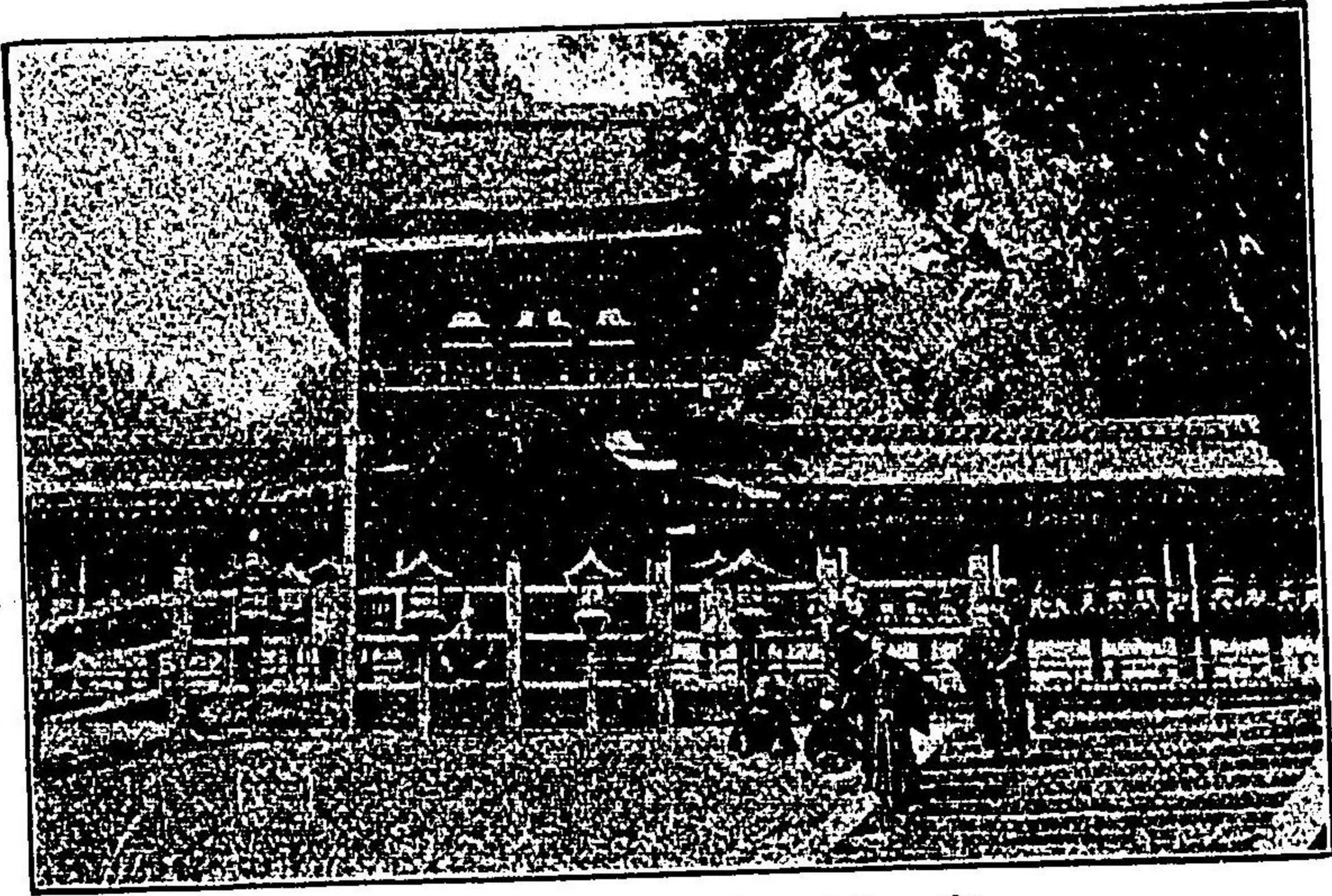
多武峰山神社



吉野山一目千本





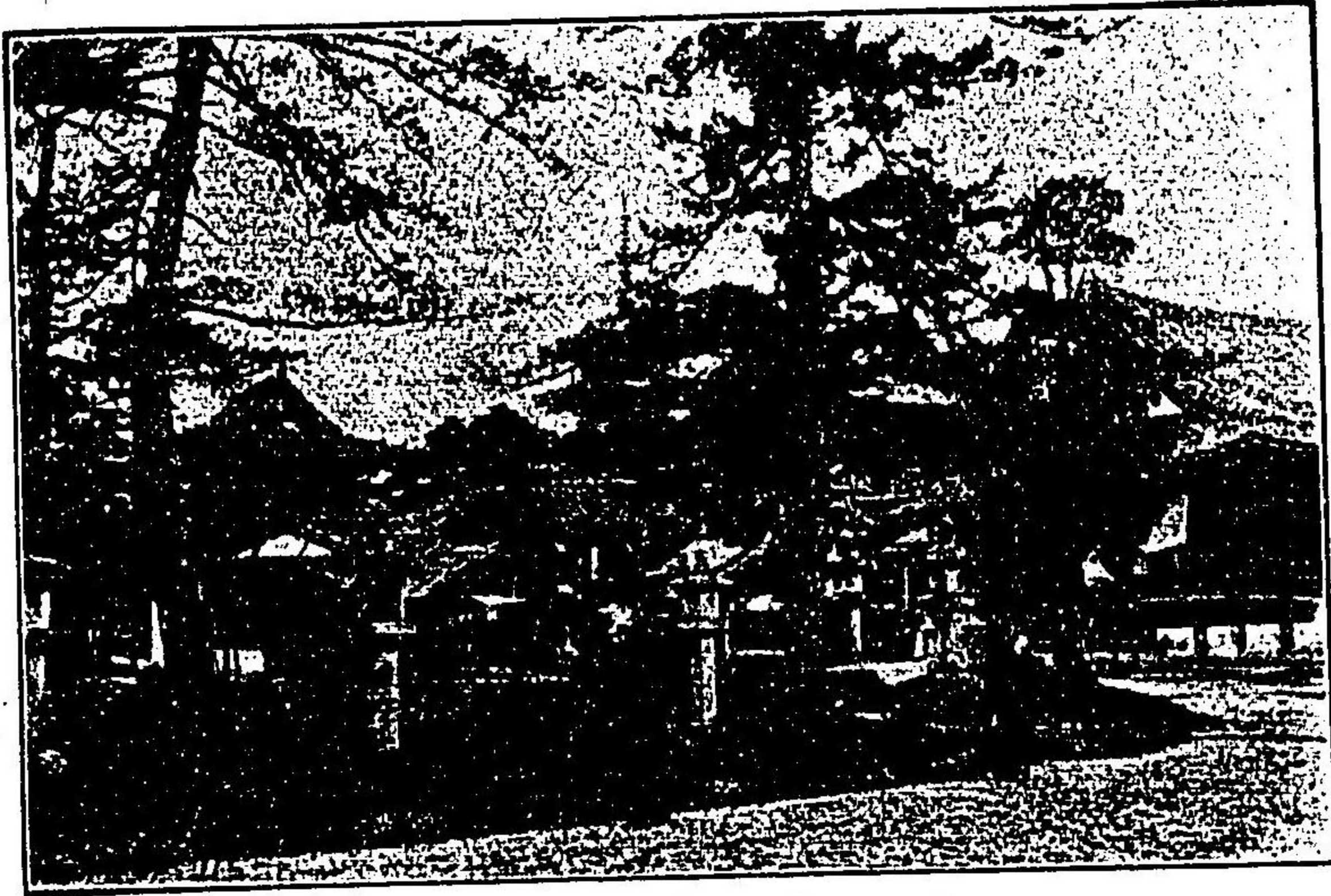


奈 良 春 日 神 社



奈 良 帝 國 博 物 館



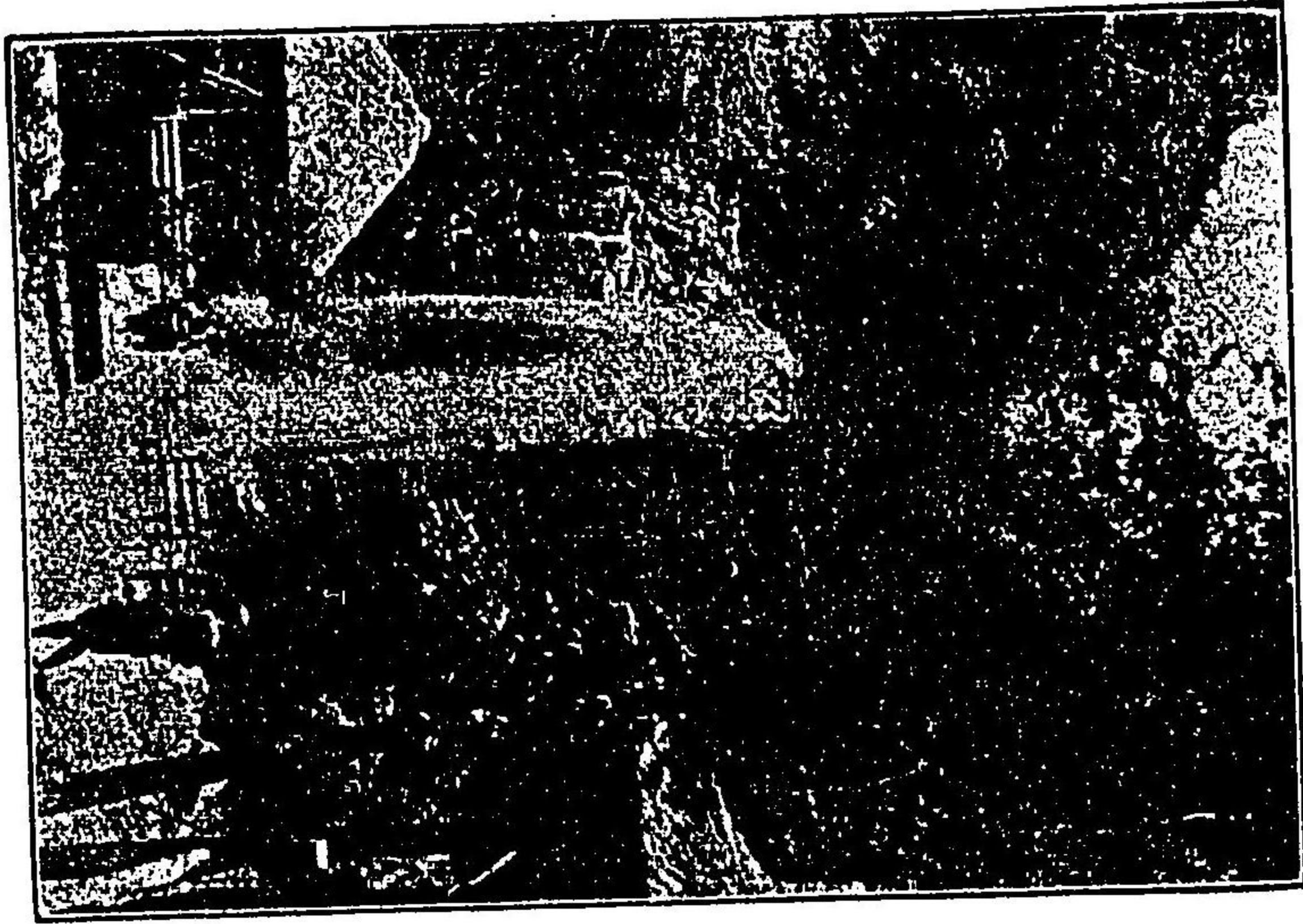


大 和 法 隆 寺

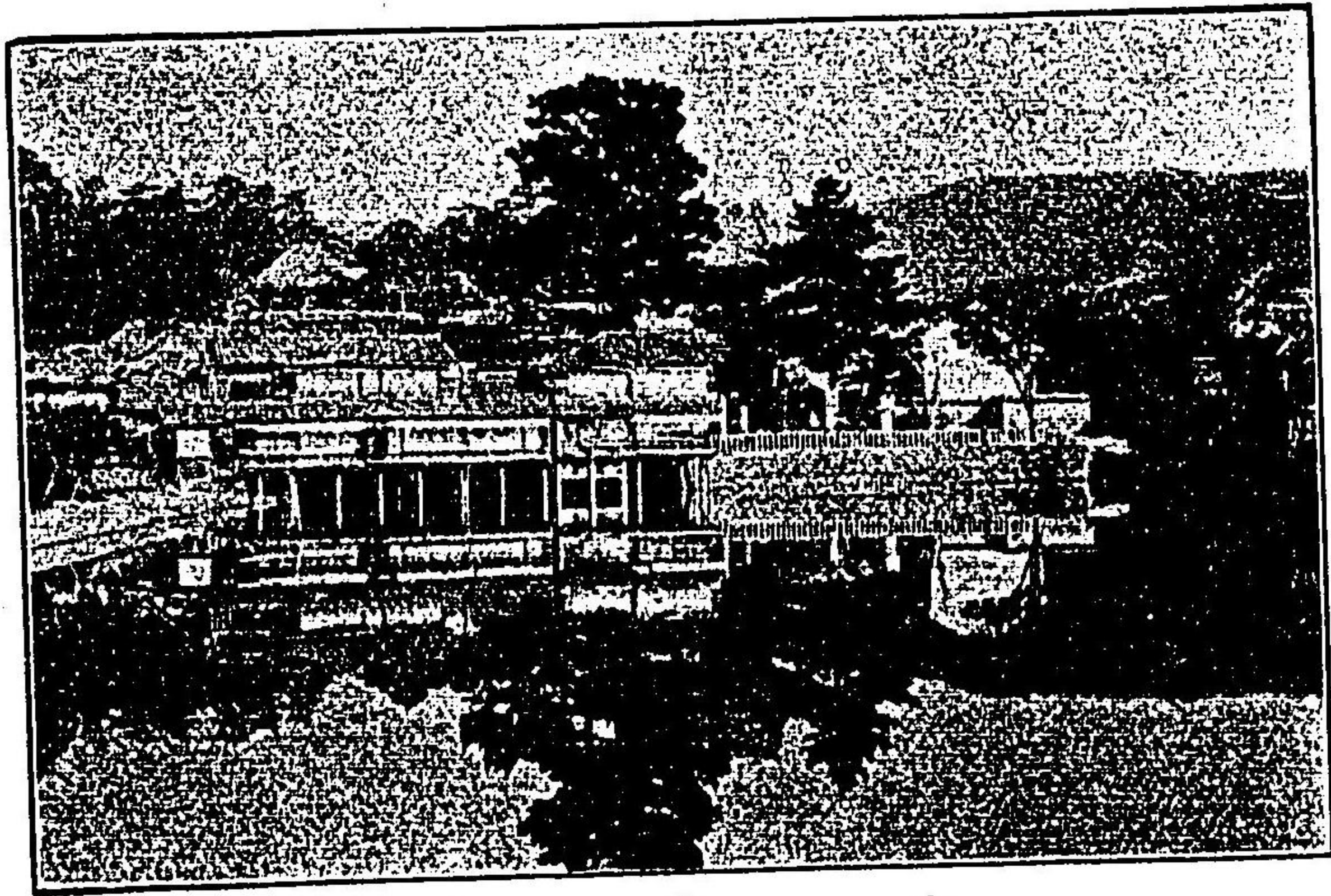


河 内 觀 心 寺





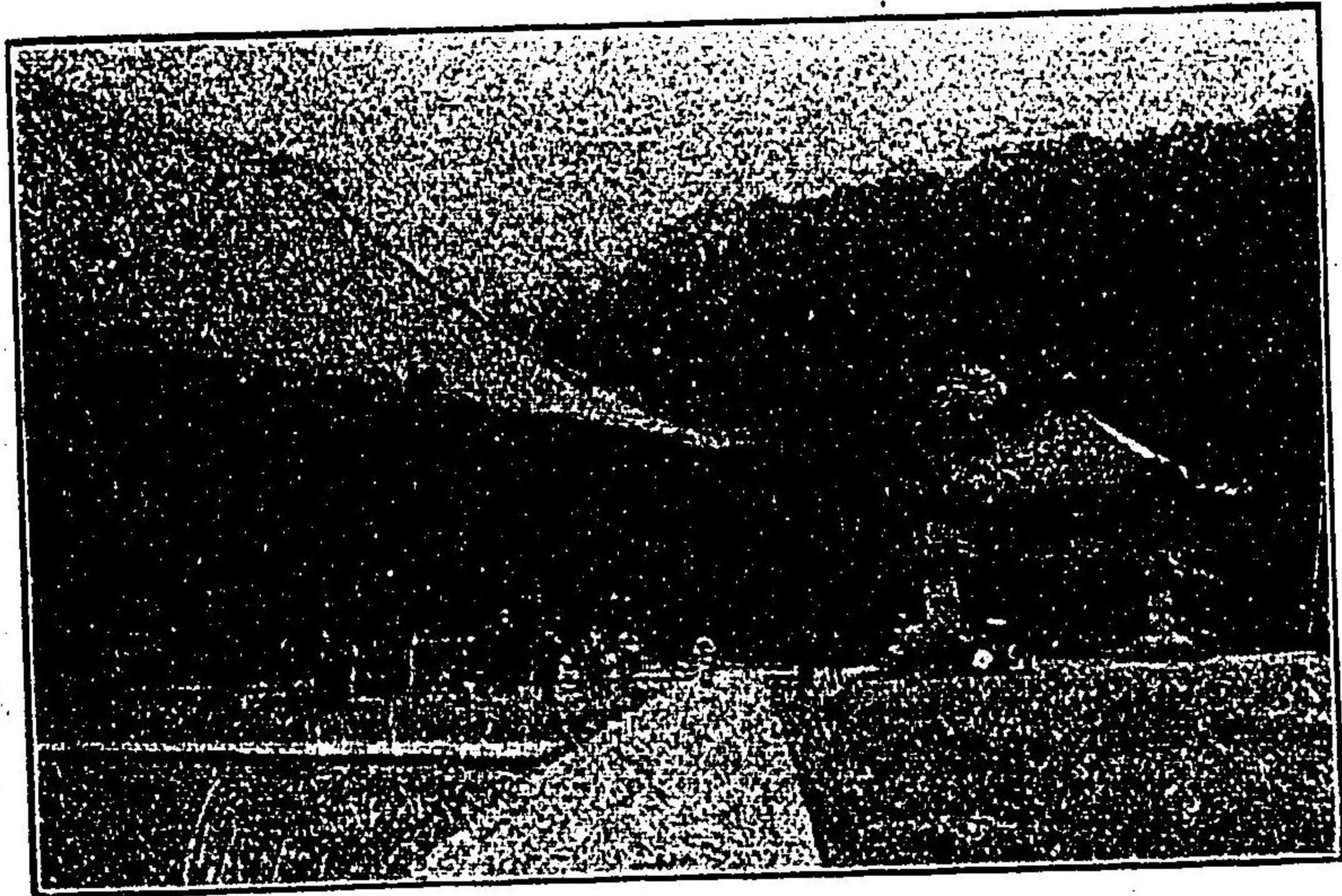
箕面湊布



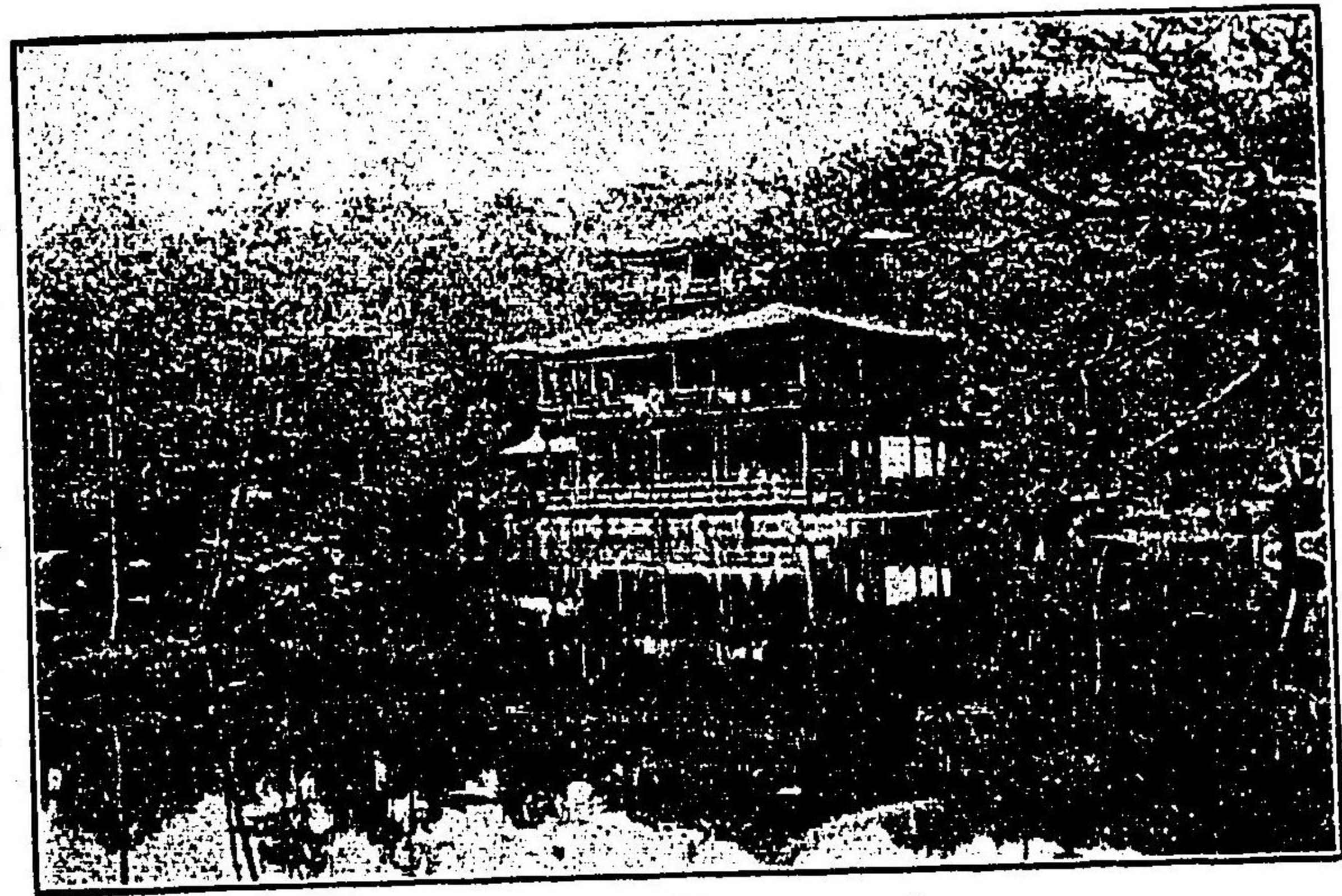
中山寺





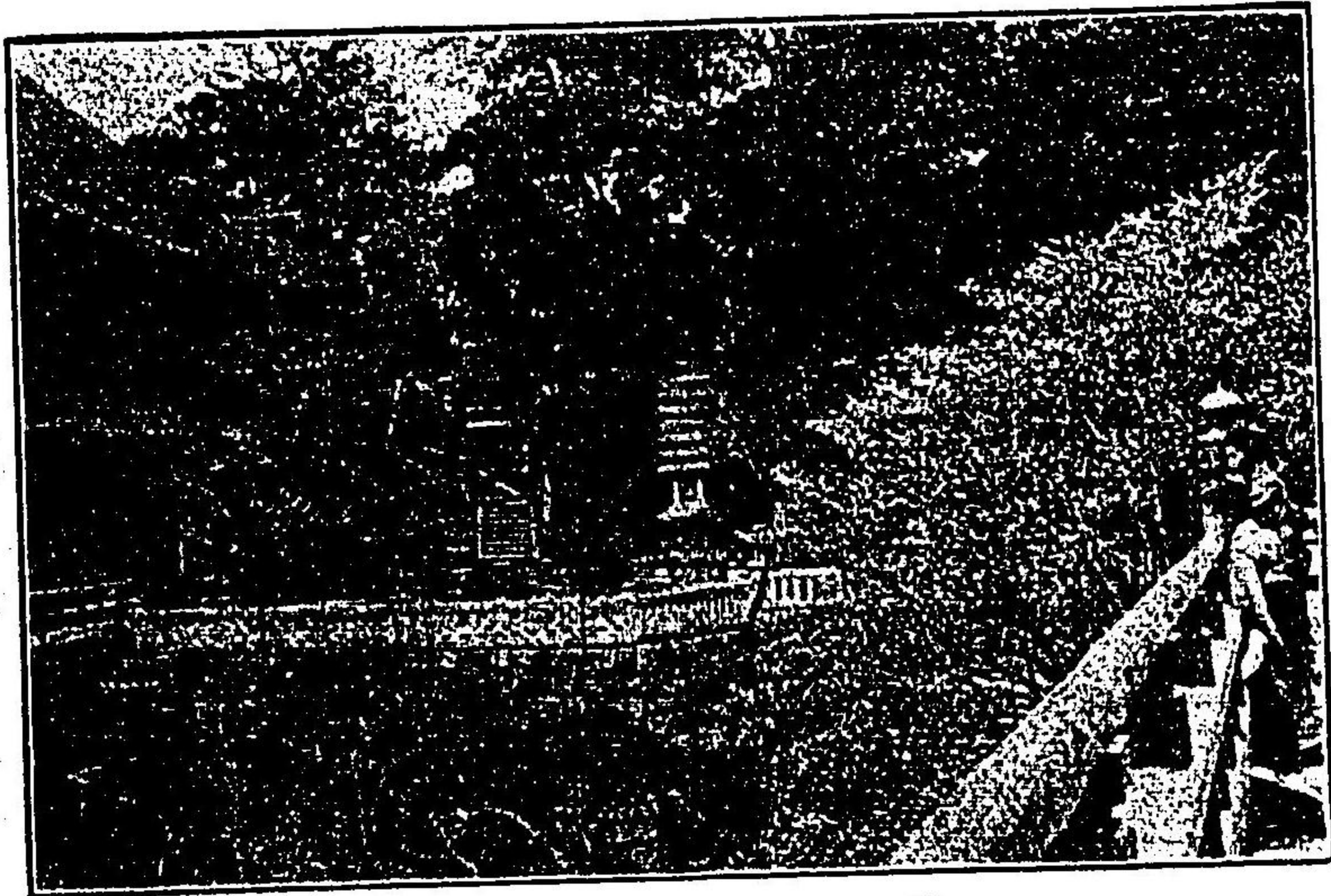


智 恩 院

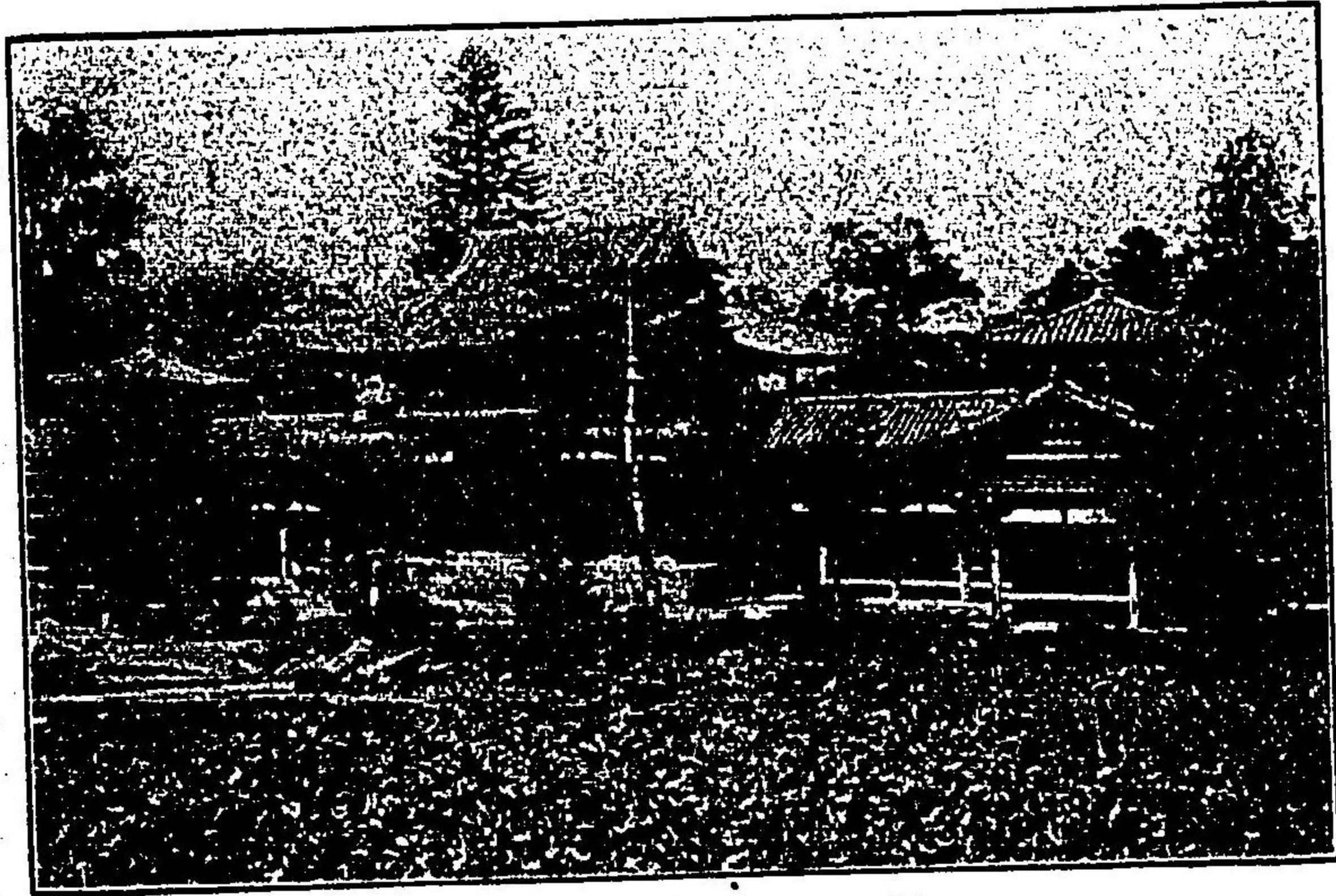


金 閣 寺





清 水 寺



平 等 院





# 大阪名勝



みかしの大阪と今の大阪

秋浦生編

(後京極攝政大政大臣)

みかしは浪速と呼び、また浪華と唱へて、梅花に名高く、蘆葦に名高  
 きところ、今は大阪と稱して、我が國三府の一に數へられつゝ、その  
 管内には、市としこの大阪あり、堺あり、郡としては、攝津の四郡  
 (西成、東成、三島、豊能)、和泉の二郡(泉南、泉北)、これに河内の



三郡(南河内、中河内、北河内)を加へて、以上の二市九郡あり、その境域をいへば、東方は空滿つ大和の奈良縣に隣り、南方は滾々たる紀の川の流れを以て和歌山縣を限り、西南は大坂灣を抱いて通ふ千鳥の淡路嶋を望み、西方は即ち神崎川を隔て、兵庫縣につゞき、北方より北東にかけては京都府と境界を交へ、その面積一百六方里弱、これに住へる人口凡そ一百五十萬と註せらる。

更らに昔時の風俗人情については、「人國記」にいふ、『このあたりの人は、先づ武士は町人百姓のなすところを我が業と覺えて是れを眞似、まかも其の當然を勤むるところは武士の業のやうなれども、武藝を學ぶは渡世のため光陰を送らむ所作なりと覺ゆる風俗にて、更らに武士の武士にはあらずして偽り諂ふ類の人多し、また町人は武士を眞似、おのが實に勤むる身にあらざれば、譬へば座敷の置合に兵具をな

らぐ置いていんけんを吐き、また刀脇指の拵をも異風を作りて金銀を費やし、おのが業をば形の如く大様にもてなし、百貫の財産のものは千貫も持ちたるやうに有徳顔して、おのれも身上を減し人にも損をかゝる風俗なり』と、その當を得たるや否、今更こゝに説くの要はなけれど、そもく浪華の地、我が大阪といふところは、古來、人を作るの地にあらずして富を作るの國と唄はれつゝ、果ては日本國の御臺所と呼ばれしは、全く動かすべからざるの事實なりき。

『心あらむ人に見せばや津の國の難波あたりの春のけしきを』、あゝ是れ過ぎし昔時に於いて能因法師が見たる當時の大阪にあらずや、『わがさぬを人にな着せと綱引する浪華男の手にはふるとも』あゝ是れ萬葉時代に於ける我が祖先の浪華男にあらずや、『なには女の背の玄のやのぎのすゝ』よのふしも忘れやはする』、あゝ是れ一世の歌人俊



成卿が詠じたる我が祖先の浪華女にあらすや、さるにても春花秋月、  
こゝに幾年月を経たる現今の大阪は如何、大阪市は如何、そもく大  
阪の男女は如何、らぞ、つぎくに説かんかな。

攝津の國の南方、大阪灣の邊、こゝに關西の咽喉を扼して、日本第一の  
商業地と呼べるゝところこゝを往昔の難波津にして、いはゆる今日の我  
が大阪市なり、そもく大阪の號はいづれの御時にか始まりて、その當  
時は如何なりけむ、一向宗の聖書なる「御文章」のうらに、「攝津生玉  
の莊内に大阪といふ在所あり」と記されしを見れば、その廣袤の如何な  
りしを思ひやられて、蘆の枯葉を渡る風さへ、いと淋しきところなり  
けむ、されど絶世の英雄豊太閤が、こゝに天下の工を督して、金城湯池

を築きしより、忽ち繁華の巷となりつゝ、果ては瞬くうちに日本全國の  
金力を吸集して、世に徳川幕府の金庫、いな六十餘州の大藏省と許され  
たりき。

さても日本一の大坂城が空に聳えて、城の櫓が雲に隠れしころは、わづ  
かに「北」と「南」と「天満」の三郷なりし我が大阪の地、いつしか三  
百年の太平に肥えて、明治の初年には、畏くも一度大阪を帝都と定めら  
るゝ思召さへ洩れ承りしほど賑ひしかば、明治十一年、「東」「西」  
「南」「北」の四區を置かせ、その三十年には早くも市制を施いて四區  
接近の町村をさへ市に編入せられぬ、されば現今、市の町数は八百五十  
七ヶ町、これを東京の八百八町に比して尙かつ多く、まかも市の東端よ  
り西端まで直徑二里半、南北を一文字に歩めば二里二十四町、すつと一  
周すれば殆んど十有一里、戸数は十九萬に餘り人口八十五萬に近しとぞ



いふ。

こゝに市制實施によりて膨大となりし四區の境域をいへば、

東區、東方は猫間川、西方は西横堀川、北は大川、土佐堀川の河域、南方は博勞町を以て南區と限る、區の周圍、四里二十餘町、これを東區とす。

西區、東方は西横堀川、西方は川北の西端常吉町、南方は恩加島の南端、北方は土佐堀川までとす、その周圍七里二十餘町とぞ聞く。

南區、東南の二面は關西鐵道線路に限られ、西方は西横堀川と木津川とを以て西區と境界を分ち、北方は順慶町を以て東區に隣る、周圍五里十餘町。

北區、南方は寢屋川と大川筋を隔て、東區と西區に接し、西方は安治川の兩岸に沿ふて西方に延長し、東北面は東成郡に續く、その周圍

六里二十餘町といふ。

されば實に六十餘州の商業地として縦に横に市街を縫ふて流るゝ河流は、自然に舟楫の利を助けて交通運輸の便を與之ぬ、見よ山城より落ちて流るゝ淀川は、京橋を過ぎて寢屋川と合し、百有餘間の巨流いよく西方に落つるや、こゝに中之島を作り、餘勢二派に分れて堂島川となり、土佐堀川となり、共に西南に奔りて未また合して安治川となる、これを市内の大河として、木津川あり、尻無川あり、東横堀川あり、西横堀川あり、長堀川あり、道頓堀川あり、東西に、南北に、流るゝ川々に架わたしたる大阪名物の橋梁は、その數にて二百四十有三。

淀の川瀬の水車、小さる三十石の舟中に、静けき夢を載せて寢ながら伏見に着くを無上の利便と考へしは、髻ある老人の昔話となりつゝ、さらでも流るゝ川によりて交通運輸を助けられたる橋の都の我が大阪は、今



や蜘蛛の巢の如き無数の鐵道に依りて、また一入の利便を占むることゝなりぬ、曰く官設鐵道、曰く關西鐵道、曰く南海鐵道、曰く高野鐵道、曰く西成鐵道、曰く阪鶴鐵道これを市外にしては、河南鐵道あり。官設鐵道の大阪驛は梅田にあり、その結構の壯大なる、その規模の整頓せる、推して以て我國第一の停車場と稱するに足るべし、篠笛一聲こゝより西方に向へば、阪鶴線によりて北に、又神戸驛より山陽線に連絡すべし。もしそれ東方を指せば、一時半にして京都の花に遊ぶべく、山河はるく百五十里の行程、むかしの五十三驛も僅か十六時間にして馳せ去り、忽ち新橋の月に嘯くを得べし。關西鐵道は、もとの關西鐵道と大阪鐵道の聯合せしもの、されば市内に二箇處の起點ありて、その湊町驛よりするものは、東北を志して、天王寺驛、八尾驛、柏原驛を経て奈良に達し、折れて名古屋に赴く、その網嶋驛よりするもの

は、北東に向ふて、四條驛、津田驛、長尾驛を經、加茂驛を過ぎ、同じく名古屋に入るべく、伊勢なる參宮鐵道にも連絡す、また湊町驛より發して天王寺驛より分れ、北方に向ふて桃山驛、玉造驛、京橋驛、櫻の宮驛、天滿驛を經て、梅田に連なる一線路あり、これを城東線とす、この城東線は天王寺驛より西南に走り、天下茶屋驛を經て住吉驛に到り、こゝに南海鐵道と連絡す。南海鐵道は、難波驛を起立として南方に向ひ、天下茶屋驛、住吉驛、堺驛、濱寺驛、岸和田驛、貝塚驛等を経て、和歌山(北口)に達す、こゝに紀和鐵道の待受くるありて、直に南紀の靈場高野山を指して發車す。また汐見橋驛を起點として、東南を指しつゝ、斜に南海鐵道を横切る一線路あり、これを高野鐵道とす、木津川驛、勝間驛、住吉驛、堺驛



等を経て、長野驛に到る。

こゝに西成鐵道は、大阪驛を起點として、西南に走り、福島驛、野田驛、西九條驛を経て、安治川口に達す、その他、阪鶴鐵道の神崎、池田、伊丹を過ぎて丹波の福知山に赴くあり。市外にては關西鐵道の柏原驛より分岐して、道明寺驛、富田林を経て長野に通するあり、これを河内鐵道と名づく。

ひかしは河流に依つて四通八達の利を得し大阪、今は鐵道の便に依りて一入の繁華を招きぬ、もしそれ明年(明治三十七年)を以て竣功すべき近來の大事事たる彼の安治川口の築港、見事に落成し、巨船大船港内に幅濶したる曉は、正しく是れ日本第一の大貿易港、その繁華や蓋しまた今日に倍蓰せむ。

そもく大阪灣の築港は、我が大阪市が、未來の繁榮を期して待つべき

一大事業にして、明治三十年十月、その起工式當日には、畏くも小松大宮殿下の御親臨を仰ぎ奉りぬ、爾來こゝに七星霜、西村所長が管理の下、沖野工學博士が督工の下に、幾千の力を役し、孜孜營々として、工事は日に月に進捗しつゝあるなり、その設計の概略をいへば、安治川口より、南方は八幡屋町、新池田町を抱いて、木津川口の千本松までを埋立てつゝ、築港全部を内港外港の二區に分ち、その外港は南北の突堤に圍繞さるべきものにて、北突堤は天保山の燈臺より、西南凡そ六百五十間のところを基點とし、西南に向つて突出すること殆んど一千五百間、その末に至つて灣形を畫かく、また其の南突堤は天保山の燈臺を距る東南凡そ一千百五十間のところを基點とし、北西に進むこと四百二十間、更らに稍々西方に轉じて一直線に進むこと一千八百五十五間、その末また灣曲して北突堤に對す、その間、水面百間、これを港口に入るの航路とす、



また内港は、木津川尻の北岸、舊砲臺跡の附邊に起り、北西に進むこと三百三十間、さらに稍々西すること五百八十間、南突堤の基點に達する船渠底によりて擁護せらる、かく抱かれし水面のうち一百九十萬坪を埋めて、こゝに新港市街を立て、また別に天保山の西南に當り、幅十五間、長さ二百五十間の棧橋を作るべき計畫にて、工を起してより落成まで、その日數八ヶ年の豫定、經費豫算約二千三百萬圓とを聞く、微風快晴の日、木津川口を逍遙して白銅幾片を投せよ、そこに築港 觀覽船の意の如く走せ來るあつて、櫓拍子軽く漕出づべし、半日の清遊、以て此の大工事の面影を見るによろしく。さつと吹き來る潮風は、平生の鬱を散ずるに足らむ。

さらに又た樂しき明治三十六年は、正に是れ我が大阪市のために空前の事業たる第五回内國 勸業博覽會の開かるべき時、總裁、副總裁をはじめ

め、それらの事務官既に任命なりつ、即ち總裁には大勳位功四級閣院宮載仁親王殿下、を推戴して副總裁は平田農商務大臣、事務官長には安廣農商務總務長官、事務官には、織田農商務秘書官、磯部農商務書記官、松田農商務書記官、審査長には大鳥樞密院顧問官、第一審査部長には田中芳男氏、第二部長には原保太郎氏、第三部長には村田保氏、第四部長には和田維四郎氏、第五部長には中澤岩太氏、第六部長には平賀義美氏、第七部長には手島精一氏、第八部長には古市公威氏、第九部長には辻新次氏、第十部長には平山成信氏なりとを聞く。

- 第一部は農業及び園藝、第二部は林業、第三部は水産、第四部は採鐵及び冶金、第五部は化學工業、第六部は染織工業、第七部は製作工業
- 第八部は機械、第九部は教育、學術、衛生及び經濟、第十部は美術及び美術工藝とす。



東は茶臼山の麓より、西は舊の商業俱樂部の庭園を抱いて惠美須町まで、南は逢坂に迫り、而して北は關西鐵道の線路を限る、この間の總坪數十萬八百餘坪の地面、これを今回開かるべき第五回内國勸業博覽會の敷地にして、一昨年十月、盛大なる地鎮祭は行なはれ、その十一月二十五日、はじめて工事の請負は定まりぬ、爾來拮据經營こゝに二年、昨今に至つて工事成りぬ、今その概略を圖によりて説明せんに、

- 一は即ち農業館、二は即ち工業館、三は水産館、四は通運館、五は機械館、六は参考館にして七は即ち動物館、八は植物室、九は家禽室、十は牧夫舎、十一は即ち餌焚所なり、ちよいと離れし十二は教育館、十三なるは美術館、十四は式場にて、十五は臺灣館、十六は體育會、十七は事務所、十八は審査室、十九は荷解所、二十は即ち諸員詰所、二十一は分柙室なり、二十二は供待、二十三は見張所、二十四、沸湯

所、さらに再び二十五は荷解所、最後の二十六は場内のプラットホームとす、

また賣店、アは大阪にして、イは京都なりウは宮崎、エは大分、オは佐賀、カは長崎、キは兵庫、クは福岡、ケは鹿児島、コは即ち愛媛なり、さらにサは福井にして、高知はシ、香川はス、そのセの字に當れるは徳島、ソの字は山口なり、廣嶋はマ、沖繩はチ、熊本はツ、島根はテ、トは即ち鳥取なり、富山はナ、石川はニ、北海道はヌ、岡山はキ、而して和歌山はノの字なり、ハの字即ち岐阜にして、ヒは秋田、フは興羽、ヘは靜岡、ホは山梨とす、また茨城はマ、埼玉はミ、栃木はム、千葉はメ、群馬は即ちモの字なり、ヤは三重、ユは神奈川、ヨは滋賀、而して奈良はヲの字にして、東京はリ、愛知は即ちルの字とす。



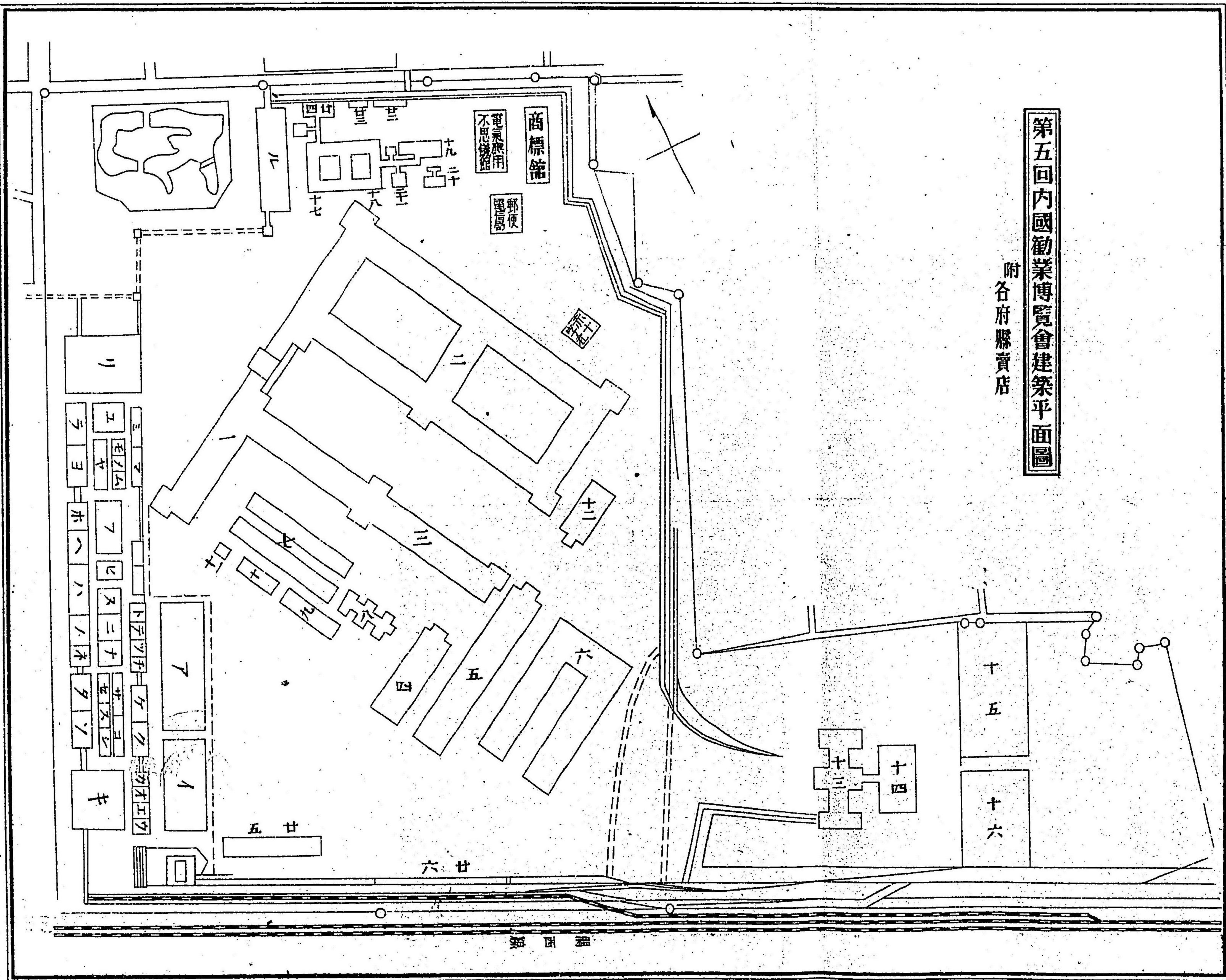
その噴水の設計に就ては、「鐵蹄子」かつて余に其の概略を筆記して送れるあり、曰く。

美術館前のは、直徑六十尺の池の中央に設置すべきもので、一丈六尺の楊柳觀音が丈餘の巖頭に踞まつて、左の手に柳の枝、右の手に水瓶を持てゐられる、その水瓶の口から無量功德水が噴き出るといふ仕掛だ、それから三人の童子が居る、丈は何れも五尺で、一人は起て水盤を手にして水瓶の無量功德水を受けてゐる、一人は寝轉んで巖から出る噴水に戯れてゐる、一人は三羽の鶯鳥を逐ふて戯れ遊んでゐる、總高さが水面から二十尺、幅もまた二十尺ださうな、圖案製作家は美術學校の助教河邊正夫氏、製作主任は高村光雲氏、助手として黒岩淡省氏、渡邊長男氏、青木外吉氏、山崎和治氏、水の谷鐵也氏である。機械館と教育館との中央のは、四方面で、凡てがクラシック式によ



第五回内國勸業博覽會建築平面圖

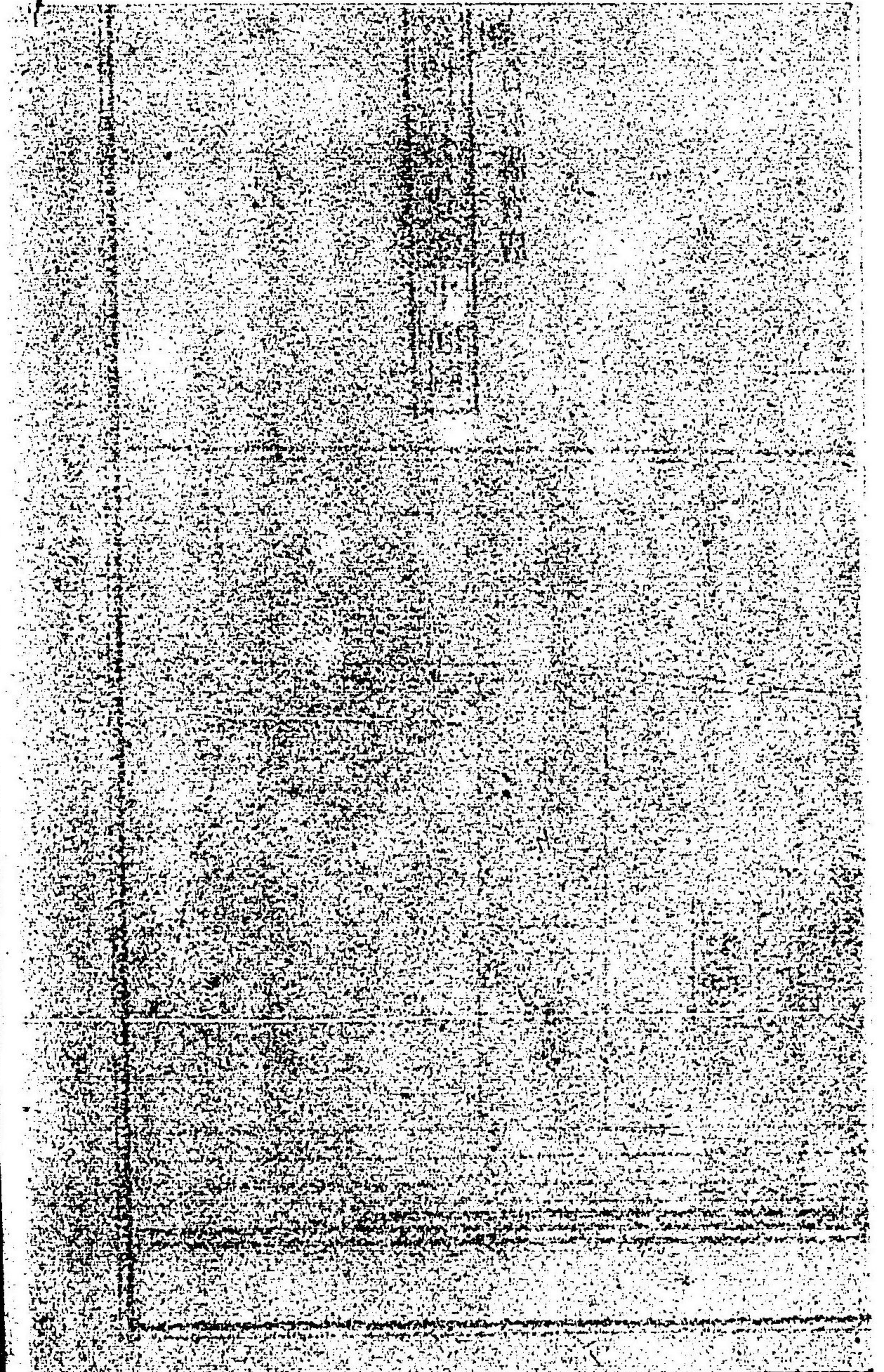
附 各府縣賣店





つたもので、輪奐の美、裝飾の美を盡したものである。どういふ考案かといふに高塔の絶頂から水面までの高さ七丈五尺で、正面の幅が三丈八尺として其中央に、幅一間二尺高さ一丈八尺の瀧が落ちる、それから其内部に七色の電氣を仕掛けて、廻轉機で其色を變化させる仕掛なんだ、で、その色の變化と共に噴水へ反射して、天から七色の虹が落ちるやうに見えるだらうと想像される、否、その美麗さは、殆んど豫想外だらうと思はれる、尚塔の絶頂から下部まで、すべて裝飾する部分といふ部分は、悉く電燈を設けて、おなじく色の變化を見せやうといふ仕掛である、そしてこの噴水は直径十八間の池の中央に建設されて、その周囲には更らに八個の噴水を設ける計畫で、設計者は千頭庸哉氏である。

因にいふ、博覽會及び附屬水族館は明治三十六年三月一日より七月





三十一日まで開會し、動物館の開期は同年五月一日より同月十五日まで及び同月二十六日より六月九日までなりとす。

あゝ是れ新らしき今日の大阪なり、新らしき今日の大阪市なり、その新たなると共に、純粹の大阪辯は次第に薄れゆきて、九十萬の人間今やいづれも江戸兒辯に近づきつゝあるなり、既に言語の上に江戸化しつゝある大阪人は、必ずや近き將來に於て、氣質の上に江戸化する日のなしとせんや。

土地新らしくなりぬ、人新らしくなりつゝある今日、故を温て新しさをしるること豈些少の裨益なからでやは、こゝに當地不案内の方々のため、いざや大阪の各勝古跡を巡覽せむ。

「押照や浪華の國に夏の來て度の夜みは行く船もなし」

### 南區と上町

(但し上町は桃山以南とす)

- 合邦ヶ辻……………逢坂の清水……………安井天神……………一心寺……………本多忠朝の墓……………茶
- 白山……………泰清寺……………雲水……………天王寺停車場……………大阪鐵道馬車會社……………阿部
- 野街道……………天王寺……………倭橋街道……………庚申堂……………土塔の古蹟……………竹本義太夫
- 墓……………崇峻天皇の社……………大阪府立師範學校……………見性寺……………舍利寺……………御勝
- 山……………農學校……………國分寺……………關帝廟……………毘沙門池……………大阪女子師範學校……………
- ……………高橋病院……………小笠原病院……………桃山英學校……………紅葉寺……………六萬體……………秋
- 野坊……………新清水寺……………真柳の碑……………増井の清水……………遊行寺……………芭蕉翁の碑
- ……………大江神社……………勝曼院……………夕陽ヶ岡……………鳳林寺……………萬松山……………月江寺
- ……………駒ヶ池……………天王寺中學校……………隆喜寺……………西照館……………生國魂神社……………
- 高津神社……………高倉稻荷……………吉助……………二つ井戸……………道頓堀……………辨天座……………
- 朝日座……………角座……………中座……………浪花座……………日本橋……………戎橋……………九郎右衛門
- 町……………難波新地……………阪町……………櫓町……………宗右衛門町……………千日前……………自安寺
- ……………榎神社……………法善寺……………竹林寺……………三勝半七の墓……………水族館……………演舞
- 場……………難波停車場……………新金刀比羅神社……………舊御藏……………眺望閣……………パノラマ



錦……………廣田神社……………萩の茶屋……………星ヶ池……………今宮神社……………十萬堂……………宗  
 了庵……………名呉の波……………唯傳寺……………奴の小萬の墓……………大黒神社……………木津市場  
 八阪神社……………難波市場……………赤手拭稻荷……………孫津紡績會社……………汐見橋停車場…  
 大阪紡績會社……………鐵眼寺……………電燈會社發電所……………半時菴淡々の墓……………お多福  
 茶屋……………湊町停車場



合邦ヶ辻 (がつばうがつじ)

第五博覽會場を前面に扣えて、逢阪の下にあり、昔時は此處に天王寺附屬の學校院ありしかば、俗に學校ヶ辻といひ傳へしを、いつしか訛りて合邦ヶ辻となりしとぞ、この辻を守らせたまふ名高き閻魔王も、幾年の雨と風とに壁落ちて、あはれ淋しき御姿のまゝ形ばかりの堂に安坐ましくぬ。

逢阪の清水 (あふさかのしみづ)

合邦ヶ辻を東に上る一丁ばかり、一心寺に出る手前のところにあり、ひかしは相坂と書さしとかや、滾々として湧き出づる水は、石槽に充ちて、清冽茶を煮るに可。

「道の邊に清水流るゝ柳陰まばしとてこそ立とまりけれ」

安井の天神 (やすみのてんじん)

逢坂の清水について小高き丘あり、世俗これを天神山といふ、少彦名命を祭る。

一心寺 (しつしんじ)

坂松山高岳院といふ、逢坂の清水を稍上りたるところにあり、淨土宗、鎮西派にして京都知恩院に屬す、本尊の阿彌陀佛は三尺の立像にして、天竺なる毘首羯摩天の作とぞ、また方丈には信州善光寺の如來を撰して、光三尊の金像佛を安置せり、そもく當山は圓光大師の開基にし



て、宗祖法然上人が日想觀を修したるの靈場なり、上人かつて詠じて曰く、

『阿彌陀佛といふより外は津の國のなにはのこともあしかりぬべし』と。

正面の額なる『坂松山』の三字は、征夷大將軍源家康が筆、數寄屋の襖は、音に聞えし狩野常信が山水、まかも縁側の杉戸は、狩野永徳が一世の筆を揮ふて、表は梅に錦鶏鳥、裏には蘆鴈を畫さしものとす。

書院の庭に今も榮ふる『駒繫ぎの松』は、これを大阪合戦の砌、徳川家康が茶臼山の陣營より、こゝに立寄りつゝ、まばし憩ひしところ、また累々たる古墳のうちに、本多出雲守忠朝の墓あり、忠朝は、家康が股肱の寵臣本多平八郎忠勝が舍弟にして、打物とつては當代無類の力

自慢なりしが、頃しも元和元年五月七日、天王寺表の合戦に、敵味方を驚かして手痛く戦ふて其處に討死したるの人、法號は三光院殿岸譽良玄居士、相並びて其の郎黨九人の卵塔あり。

●茶臼山 (ちやうすやま)

一心寺の裏門を出でたるところ、そこに河底の池に臨みて、鬱蒼たる小高き丘あり、これを茶臼山とす、もと荒陵と呼びぬ、こゝを大阪陣に徳川家康が天下を覗ふて野心の陣を布いたるところ、いな、その家康が膽を挫いて大阪一の花と呼ばれし木村長門守が血判いかにと叫びしところ、あゝその奸雄も、あゝその忠臣も、敵も、味方も、靜かに苔の下に眠りて、今は住友家の所有となりつ颯々たる松風、それを千軍萬馬の紀念とぞ聞くのみ。

●泰清寺 (たいせいじ)



茶臼山の麓、閑雅の一境地を占めたるものを泰清寺とす、本堂に隣れる僧房に坐し、薄茶一服、晴れたる日は遠く茅渚の海原を望むを得べし、境内紅葉あり、葉鶏頭あり。

雲水 (うんすゐ)

寺號を邦福寺といふ、河底の池を隔て、茶臼山の南方にあり、禪宗黄檗派にして、本尊は彌勒佛、雲水比丘の中興なればとて、俗に雲水と呼ぶ、寺内に湯屋井あり、いにしへ温泉の湧き出でし跡とぞ、境内幽邃にして、まかも閑雅、花鳥風月いづれにして佳ならざるはなし、普茶料理に名あり

天王寺停車場 (てんのうじすてらしよん)

雲水より二丁ばかりの東南にあり、關西鐵道は此處より東方を指して奈良より名古屋にゆく、その北方に分れし一線は即ち城東線にして梅

田に連絡す。

大阪鐵道馬車會社 (おはさかてつたうばしやぐわらしや)

天王寺停車場と並び立つ、馬車鐵道の線路は、一直線の街道を南方に走せて住吉に達す、この街道は平治の昔日、悪源太義平が清盛入道を要撃せしといひ傳ふる阿部野街道にこそ。

天王寺 (てんのうじ)

『昔とよぐまはせの涙のうつまをか浮世の中にうかび渡らむ』

(行基菩薩)

逢坂を東方に上りて、一心寺より三町ばかり、雲水よりは三町あまり北方に當る、荒陵山四天王寺といふ、そもく當寺は聖德太子の建立なり、傳に曰ふ、太子、守屋と戦ふて勝たず、即ち白膠木を削り、四天王の像となし、これを髻に收め祝して曰く、もし我をして敵に勝



たしめたまはり、必ず當に四天王の寺塔を建立しまるらすべしと、いひ終つて軍を進め、終に守屋を殲しぬと、されば凱陣の後、太子まつ地を玉造の岸に相し、こゝに四天王寺の伽藍を立つ、たまく風浪大に起り、樓閣ために破れ、堂塔ために壞る、太子曰く、これ經典に縁なき地なりと、遂に荒陵の地を撰びて再び建つ、これを荒陵山四天王寺とす。

もとは八宗兼學なりしが、今は天台派となれり、石の華表の西門を正門として四方に門あり、境内は東西八町、南北六町、内に金堂あり、青龍池あり、講堂あり、鐘樓あり、鼓樓あり、大寺池には蓮花咲いて群龜遊び、六時堂には傳教大師が稱定ありし座席の蹟を留む、また食堂あり、寶藏あり、龜井水あり、三昧堂あり、經堂あり、聖靈院(俗に太子堂といふ)には太子自作の尊像あり、その他、繪堂あり、萬塔

院あり、五智光院あり、親鸞上人が垂跡の蹟こゝに存じ、楠公正成が未來記の計略こゝに成りしとをいふ。

有名なる五重塔は、和州の額安寺より此處に引移したるものにて、層ごとに雲と水との彫刻その巧を極む、その五層の上に見れば一眸十里、遙かに淡路島を見るべし、また太子殿の傍なる猫の門には、木彫の猫あり、これを名匠左甚五郎が遺物なり、さて又た東西の引導鐘は、春夏秋冬、諸行無常の樂を奏して、さながら十萬億土、寂滅爲樂と響きゆくとして、もしこれ二月廿二日、聖靈會の日に詣れば、舞樂の伶人、今日をいのちと奏づる妙曲、殆んど神に入りて、鸞鳳の聲千本の花に通ふの心地やせむ、げにや二千年來我が國稀有の靈地、慈鎮和尚かつて詠じていはく、『十あまり七つのちかひせし人の、あとふむみよをみるよしもがな』と、これ太子が制定せられたる十七箇條の憲法に思ひよ



せての歌なるべし。

境内の公園には、萩あり、櫻あり、春にもよし、秋にもよし、本年鑄造せしかの紀念の大梵鐘は、高さ二丈六尺、重さ四萬餘貫目と聞く、日本一の巨鐘、いかなる音にや響くらむ。

俊徳街道 (しゆんとくかいだう)

四天王寺南大門の外を、東方に通る細路なり、これを俊徳丸が河内の高安より、この天王寺に詣でし路筋とぞ、(芝居でする玉手御前も定めし俊徳様の跡を慕ふて、この道を徒歩はたしにて入らせられたるものなるべきか、呵々)、俊徳丸が父通俊といへる人が奉納せしとぞいふ「唯桑の琵琶」は、今も尚ほ四天王寺の寶藏にありと聞く。

庚申堂 (かうしんだう)

天王寺の南大門を出で、南方に志すこと一丁ほどの處にあり、これ

日本最初の庚申にして、文武天皇の大寶元年、毫範僧都の開基なりとぞ、堂中には、青面金剛、梵天帝釋、藥師如來、如意輪觀世音、地藏菩薩を安置す、側の護摩堂には、不動明王十二天の畫像を收む。

「遠近のたれも願望をかのへざる多くの人をよぶことりかな」

土塔の古蹟 (どたふのこせき)

南大門を出でたる土塔町超願寺のうちにあり、こゝは昔時聖徳太子が、渡來の經典を地中に埋め、そこに一基の土塔を築かれしところ、後世南岡山土塔寺と呼びしを、いつしか改めて今の超願寺と稱しぬ、俗に土塔御坊といふ、寺内に竹本義太夫の墓あり、義太夫は即ち義太夫節の祖なり、「南水漫遊」に曰ふ。

「淨るりといふものゝ數種あるがうちに義太夫節は浪花を根元として此地の名物とす、竹本義太夫は攝州天王寺村の農夫にて五郎兵衛と



いひし人なり、生得聲から世人に勝れ大丈夫にして爽かなり、貞享二年閏二月より道頓堀にて「世話會我」、「藍染川」、「いろは物語」、井上播磨様の古もの「賢女手習鑑」、「頼朝七騎落」以上五替り、同三年寅の春より近松門左衛門京都より新物を作り越され、第一は「出世景清」、これを松氏（近松氏の事なり）義太夫座の淨瑠璃作の始とす、

元禄十四年己五月、勅許受領して竹本筑後、椋藤原博教と號す、貞享の初めより古物五十番餘、新地百番餘を操にかけて相つとめ、正徳四年午九月十日、行年六十四歳にて没す、法號は釋「道善」と、されば、この義太夫は、天性斯道堪能の人なりけむ、はじめ京都の宇治加賀椋を師として、淨瑠璃を學びしが、忽ち出藍の譽れ四方に高く、果ては自ら悟るところありけむ、多年の苦心つひに師の流に井

上播磨の古流を併せて、こゝに破天荒なる義太夫節を工夫したりき、かの竹本流の定紋、鞠袂、中に笹の丸は、この人が襦袢に用ひしものなりとぞ。

●●●崇峻天皇の社（すしゆんでんのうのやしろ）

天王寺南大門を東南に去る四丁ばかり、いはゆる河堀口にあり世俗これを河堀の宮とす。

●●●見性寺（げんしやうじ）

河堀口より十丁あまりの東南、桑津村にあり、行基菩薩の建立にして、治承年間小松内府重盛が再建せしところ、宗祖源空上人こゝに水想觀を修したる遺跡とぞ。

●●●舍利寺（しやうじ）

天王寺東門より七八丁の東方にあり禪宗黃檗派にして聖徳太子の開基



木菴和尚の中興にかゝる、縁起に曰く、むかし此の里なる生野長者、  
 兒を生む、三歳物言はず、太子これを聞いて、憐れ不憫のものかなと  
 その兒を膝に招いて、我かつて前生に於て汝に三願の佛舍利を預け置  
 きぬ、いざらば今日それを予に返せと宣ふ、この時、歴見、忽然と  
 して口を開き、三願の佛舍利を吐き能く物言ふことを得たり、太子と  
 の二願を四天王寺に藏め、一願の舍利を長者に與へ、その地に一字を  
 建立せしむ、即ち南岳山舍利寺なり。  
 境内に胎内くいらあり、書院の庭には、むかし和泉式部の腰掛松あり  
 しといふ、今は亡し。

『かくばかりうきを忍ひてながらへばこれよりまさる物をこそおも

へ』

(和泉式部)

御勝山 (おかつやま)

舍利寺より東北三丁ばかりにあり、この丘一帯を岡山といふ、大阪陣  
 の砌、家康が駒をとりめて戦鬪勝ちしところ、されば俗に御勝山とぞ  
 呼ぶ、こゝに大阪府立農學校あり。

國分寺 (こくぶんじ)

御勝山より西に去ること二丁あまり、これを往昔聖武天皇の建立にし  
 て、日本六十餘州に於ける國分寺の一つなり。

關帝廟 (くわんでん)

四天王寺の東門を出で、一丁ばかり南方に立つ、清國人の詣づるもの  
 多く、普茶の料理あり。

毘沙門池 (びしゃもんいけ)

四天王寺の東北にあり、むかしは蘆間の池といひしを、いつの頃より  
 毘沙門池と呼びなしけむ、古歌あり。



『蒲ちかきあしまの池の水の色は淺みどりにな春は見えける』

(伊勢)

この池のちかくに、大阪女子師範學校あり、高橋病院あり、小笠原病院あり、少し離れて桃山英學校あり。

紅葉寺 (もみぢでら)

里沙門池のほとりにあり、壽法寺といふ、俗に紅葉寺の名あり、秋との紅葉は、坐ろに「紅葉紅於二月花」の一句を誦せしむるに足る。

六萬體 (ろくまんたい)

今日里沙門池にちかきところを六萬體町といふ、そもく六萬體といふは、聖德太子が生前問暇あるごとに石の地藏六萬體を彫んで、この邊りに置きたまひしより起りし名なりとぞ、『攝津名所圖繪』に

『ある人問ふて云、六萬體の石佛、皇太子の御作とかや、然れば降誕の日より四十九年の覺御の日まで、これのみにかゝらせたまひても、一日に三體半ばかりに當るといふを答へて』 (斑竹)

『觀音の一矢が千の矢ささなり六十體が六萬となる』 (斑竹)

秋野坊 (あきのぼ)

六萬體より天王寺西門に出づる半丁ばかり手前にあり、史に曰ふ秋野坊は四天王寺一山護衛の家にして、その先遠く小野妹子に出づ、妹子は隋に使用して國威を彼の土に發揚したるの功臣なり、その子孫相傳えて六十何代の今日に至るといふ、かの大鹽願助の時、父子の浪人こゝに落延びしが、捕手來りしといふや、おのゝ物の見事に割腹して相果てし遺物もあつたらん。



新清水寺 (志んきよみづでら)

秋野坊より西方二丁にあり、はじめ有栖川寺と號せしかば、今に山號を有栖山といふ、むかし齋宮の女御が修したるところ、本尊十一面觀世音は聖德太子の作、脇に地藏菩薩と毘沙門天王立たせたまふ、寛永十七年、延海阿闍梨、京都の清水より、この本尊を此地に移し、享保中、新清水寺と名づく、石階の側に由縁齋貞柳の碑あり。

『耳は遠く死るは近く成にけり夢させとや曉の鐘』

(貞柳)

この近くに増井の清水あり、また昔時は此寺に隣りて『浮む瀬』といふ料亭あり、主人の名を四郎右衛門といひぬ、この男、一ふし面白き性質なりけむ、いざや方々、雪は舊より、花の朝も月の夕も、これこそしめし酔はせたまへとて、鮑の貝の、穴十一あるを鑿ぎ、こ

れに『浮む瀬』と銘せし盃に、袋は長曾我部元親が千軍萬馬を往來せしといふ唐織の陣羽織を裁ちて作りし由緒の一品を添えて、客を饗せしかば、花に月に、好事の士はこゝに集まりつゝ、絃聲常に絶えざりといふ。

遊行寺 (ゆきやうでら)

清水寺より西北二丁あまり、勝曼坂の下にあり、時宗にして佛智山圓成院と號す、こゝは聖德太子が勝曼經を講せられたる靈場にして、まかも時宗の祖一遍上人が天王寺參籠の砌、こゝを寓舎に當てたまひし遺跡なりしを、遊行上人より五十一世の繼承上人、こゝに薬師堂を營みたまひしかば、いつしか遊行寺と呼びならはしぬ。

寺の向ひに俳聖芭蕉翁の墓碑あり、高さ九尺、表題は黄檗伏山の筆にして、裏面は滋野井中納言が墨跡、銘は豊前の醫師香月牛山が撰なり



とらふ。

大江神社 (おほえじんしゃ)

遊行寺の東方、勝曼坂の上にある、豊受皇大神を祀る、境内眺望よく、梅樹多し。

勝曼院 (しようまんゐん)

大江神社の東方に隣り、愛染明王を安置す、俗に愛染様といふ、境内の多宝塔は、珍らしき建築法に依りて成りたるもの、尤も奇巧を究む。

夕陽ヶ岡 (ゆふひがをか)

勝曼院の背後、一帯の地を夕陽ヶ岡といふ、丘を廻りて悉く梅樹なり、この地は昔時正三位家隆卿が隠遁したまひしところ、享保年間、秋野坊が建てたる家隆塚あり、碑銘は時の安井門跡大僧正道恕が撰なり、當時は塚の上に一本の松あり名もなつかしき舊接の松と呼びしが、

今は枯れて根のみ残りぬ、家隆卿が最後の詠と傳ふる七首の和歌のうち、

「契りあれば難波の里にやどりきて涙の入日を拜みつる哉」

この和歌より難波夕陽岡といひしならむ、卿が舊趾も是れに因みて夕陽庵といふ。

鳳林寺 (ほうりんじ)

夕陽岡の東北四丁ばかりにあり、禪宗曹洞派にして最乗山と號す、本尊は釋迦牟尼佛、寺内に黄金の塔あり、塔中には「干」、「満」と稱する二個の寶珠を藏む、また光殿司の筆に成りたる十六羅漢ありとぞ。

萬松山 (ばんしようざん)

鳳林寺より東方一丁ばかりにして、「萬松山」の額を見る、文字は播州赤穂の城主淺野内匠頭が眞筆なりといふ、その因縁にや寺内に義士



の木像を藏む。

●●● 月江寺 (げつこうじ)

萬松山に近く、俗に眞田の抜道の傍にあり、淨土宗の尼寺にして永祿十年東印比丘尼の建立にかゝる、本尊の阿彌陀佛は三尺の坐像にして、恵心僧都の作なりと傳ふ、境内櫻樹多し。

この月江寺は、その以前天王寺の城趾にして、鬼玄蕃盛政が顯如上人を石山城(今の大阪城)に攻めたる古跡なりとぞ。かの奴の小萬(木津屋雪女)が、緑の黒髪を斷ち、三好正慶尼となりのりつゝ、まばし愛身を逃れしは、この月江寺なりしといふ。

●●● 駒ヶ池 (こまがいけ)

むかしは萬松山の東北三丁ばかりにありしとかや、今は亡し、たゞ一基の石碑に、駒ヶ池の舊蹟を知るのみ、近傍に天王寺中學校あり。

●●● 隆專寺 (りゅうせんじ)

月江寺の西北三丁あまりにして、『名所圖繪』に出されし櫻樹の名所なり、境内に川上音次郎が建てたる二世曾呂利の碑あり。

●●● 西照館 (さいしょうくわん)

隆專寺より一丁ばかりにあり、もと西照菴といひぬ、『浮世瀨』と共に名高き料亭なりといふ、眺望よし。

●●● 生國魂神社 (いくたまじんじや)

西照館の北方三丁にあり、官幣大社にして祭神は生國魂命と大國主命、ともく當社は遠く神武天皇の時、今の大阪城の地を相して鎮坐まし、を、石山合戦の砌、兵燹にかゝりて神靈わづかに全たかりしを、慶長年中、片桐且元奉行として今の社地に移したりとぞ聞く、境内の蓮池は夏の朝の風趣を添え、社前の櫻樹は春の夜の風情を畫く、まか



も本社ほんしやの背後せきごには、崖がきにかゝりて舞臺まいたいあり、こゝに上りて眼めを放はなてば、  
炊烟炊煙盛さかなる大阪おほしや二十萬まんの市街しがい、その一半はんを足下あしごに望のぞみ、遠とほくは淡路島あはぢしま  
山やま、茅渚ちやうの海原うみはら、悉ことごとくく眼界がんがいのものとなる。

高津神社 (かうづじんしや)

生國魂神社いくなたまじんしやの北方きた一丁ちやうぢやうにして府社ふしやあり、これを高津神社かうづじんしやといふ、もと  
は聖德太子しやうとくたいしが建て給たまひし神廟しんべうにして、仁德にんとく、仲哀ちやうあい、應神おつじん、履仲りちやうの四帝しひてい  
と、神功皇后じんぐうこうごうとを合祀がうしせられし古跡こせきなりとぞ、境内けいだいの末社まつしやに高倉稻荷たかくらいなひ  
あり、いつの頃ころより祭りまつりこめて、誰たが靈験れいけんを受けたりけむ、川竹かわたけの俳はい  
優い、花街はながいの藝妓げいぎ、こゝに賽さいするの多おほし、本社ほんしやの西方せいほうに崖がきにかゝりし繪え  
馬堂まだうは、こゝを浪花八景なはなはっけいの一つにして、雪ゆきの朝あしたの絶景ぜつけいは口くちまぐち以もつて語るべ  
からず、筆ふで以もつて描えがくべからず、この繪馬堂えまだうより三段半さんだんはんの西坂にしさかを下くだれば、  
有名いふめいなる黒燒店くろやきせあり、また社前しやぜんの石壇いしだんを下くだれば、名なに高たかき湯豆腐店ゆとうふせの

り、梅うめの橋はしあり。

「吹ふく風かぜも薫かほるはずなり梅うめの橋はし」

(幸) (運)

吉助 (きちすけ)

高津社内繪馬堂かうづしやうちやまだうの下したに、名高なだかき藥師やくしの庭園ていおんあり、吉助きちすけといふ、姓せいは  
松井氏まついし、園主おんしゆの丹精たんせいは四時じよいづれの花卉はなに富とめるうちにも、わけて牡おし  
丹たんに名高なだかし。

三つ井戸 (ふたつゐ)

吉助きちすけの表門おもてもんより西方せいほうへ一丁ちやうぢやう、今いまの高津郵便局かうづゆうびんきょくを北方きたへ曲まりしところに  
十年じゆんねん以前いぜんまでは、石いしの井筒いづつを構かまへ中央ちやうしやうを隔へだて、湧わき出いづる清泉せいせんあり、  
これこれを二つ井戸ふたつゐと呼よびしが、今いまは埋立うみたてられて亡なし、たゞその面影おもかげを傳つた  
へたるもの、かの名高なだかき粟あはおこし屋や「津つの清せい」の門前もんぜんにあり。

道頓堀 (たうとんぼり)



吉助の門より西方に向ふて繁華なる一條の道路、これを道頓堀とす、  
 即ち東横堀川より西方は木津川に至る、一帶の堀川に沿ひし南岸の地  
 にして、徳川治世の始め、大阪の人安井道頓、みづから工を督して穿  
 らしかば、道頓堀と呼びしとかや、『攝津名所圖繪』にいふ、

「道頓堀島の内の夕景氣は、都に劣らぬ難波女の色白く清らかに出立  
 て錦鋪をまといひ、珠の髪指露らるばかり、女伶あり、男娼あり、送  
 るあり、迎ひあり、芝居側の囂しきは四時九へまなし、まづ初春  
 の十日蛭子より、梅匂ひ初花ひらくころ、天王寺の聖靈會、彼岸  
 まわり、寺社の開帳、住吉の沙干、五月の御田植、みな月の夏祭、  
 船遊びの花火、難波の夕涼、名月、後の月、魃魚つり、煙とり、十  
 夜講、蛭子講、雪の曙に夜の顔見世、あるは月毎の大師巡、宵薬  
 師、宵庚申、勳進能、大相撲まで、みな此里の賑ひにして、下風の

聲色、法師の琴の音、常にして、難波江の流絶すして、もとの流に  
 あらず、其流の身のきはし止りて、堰に花の散かゝる、佛なるべし。

『夕暮に難波わたりをきてみればたゞ薄墨のあしでなりけり』

(行 慶)

實にや大阪の繁華を、こゝ一條の道路に集めて、往來織るがごとく、  
 その戎橋より日本橋(この日本橋は、むかし御用橋と稱へて橋の袂に  
 高札場を設け、こゝに晒し首を晒せしとぞ)に至る間は、いはゆる櫓  
 町にて、川竹五座の芝居、こゝに櫓を並べて大入の札高く空中に懸り  
 つゝ、新舊俳優、おのゝ鏡を削りて伎藝を戦はすあり、勝負々々の  
 紋處を染出したる幟は、これや太平國の旗さしものと思はれて、轉た  
 一種の壯觀を極む、その最も東にあるは辨天座にして、これを往昔の  
 竹田の芝居、次は朝日座、次は角座、またその次は中座にして、最も



西にあるは浪花座とす、いはゆる舊の天西なり。  
 さてまた戎橋より西は九郎右衛門町とて、難波新地、  
 右門衛町と相接す、この五個處を總稱して南地五花街といふ、こゝぞ  
 歌舞の菩薩が夜を晝なる極樂世界にして、即ち色餓鬼の亡者が魂ふ  
 らくと駈來りつゝ、とけてながるゝ坩堝のうちに井手の山吹惜氣も  
 なく投去るの魔窟なり。

九郎右衛門町は、芝居裏の北より道頓堀にかけ、これに戎橋南詰  
 より西方、新蛭子橋を経て大黒橋に至る、「大七」、「墨馬」などいふ  
 青樓軒を並べて、絃歌の聲いつも春めく、この間また旅館多し。  
 難波新地は法善寺の西方にあり、今の三番町、四番町は、所謂元  
 相生町にして、その北の筋は相生町、その北は中筋、またその北を  
 芝居裏とし、芝居裏の北通りは即ち道頓堀なり、名ある貸坐敷は、

「紀の庄」、「葵」、「山下」など。

阪町は道頓堀より二筋南方、即ち芝居裏の南通りにして、法善寺の  
 表門に當る、その北通りなる阪町天満宮は參詣常に多し、鰻屋にて  
 「伊勢萬」あり、むかしより「東吳」と並び稱せらる。

橋町は、即ち道頓堀の通りにして、「大吉」、「守井」などいふ芝居  
 茶屋軒をつらねて賑はし、また貸坐敷あり、「得田屋」を第一として  
 「松緑」、「小川傳」、「靜」など。

宗右衛門町は、道頓堀川の北岸、戎橋の北詰を東方に向ひ、太左衛  
 門橋、相合橋を経て、日本橋に至る間を總稱したるものにて、この  
 間には、有名なる「富田屋」あり、「伊丹幸」あり、「見山屋」あり、い  
 つれも當地屈指の貸坐敷とす、また旅舎としては、「末廣」あり、  
 「天定」あり、料亭には「重亭」あり。



道頓堀川の夏の夜景は、眞に是れ詩的の景なり、樓々櫺比せる間より、燈火明滅、水に映ずるところ、幽かに低唱微吟の絃聲を聞く、不言の畫、無韻の詩、殆んど大阪を詩化せしむ。

●千日前 (せんいちまへ)

角座の前を南方に曲りて數町の間は、こゝぞ即ち千日前にて、兩側に寄席あり、觀世場あり、小劇場あり、義太夫席あり、飲食店あり、その繁華は道頓堀に劣らず、朝は八時を期して夜の十二時まで車馬の往來停止されたるはと成れば、往くもの、返るもの、絡繹として絶ゆる時なし、この地もと茶屋所千日寺内にして、墓碑累々たりしのみか、物凄き獄門首の晒らし場なりしが、明治の初年、難波新地溝の側なる觀世物小屋を此地に移されてより、むかしは草茫々として白晝なほ人影の淋しかりしところ、今は夜更くるまでも肩摩熱鬧の巷となりぬ。

こゝに觀世物および寄席のあらましをいへば、先づ娘義太夫の定席としては、三階づくりの美を盡したる播重席あり、春木亭あり、小劇場としては、南座あり、彌生座あり、金澤座あり、その他二〇加の定席として子寶座あり、輕業の寄席あり、新内源氏節あり、浮れ節あり、貝祭文あり、活人形、劍舞、猿芝居、奇形兒、江州音頭、いづれも趣向を凝して客の足を止めつゝあり。

●自安寺 (じあんじ)

千日前の通りを、やゝ東方に入るところにあり、本尊は妙見大菩薩、靈驗いやちこなりとて、午の日の參詣ことに多し。

●覆神社 (えのきじんじや)

自安寺より一丁あまり東方、おなじく千日前の通りを、やゝ東方に入りたるところにあり、大なる覆樹の幹に、注連繩ゆひ廻らして、神と



し祭る。

法善寺 (ほうぜんじ)

千日前の通り、播重席の前を、西方に曲れば法善寺に入る、浄土宗にして、本尊は阿彌陀如来とぞ、本堂の西方に金毘羅神社あり、こゝも靈驗あらたかなりとて、香華平生に絶えず、わけて月の九日十日に、御縁日とて詣でくるもの多し、境内に落語の寄席あり、一を金澤といひ、一を紅梅と名づく、また講談の席あり、浪花名物の笹巻館あり、割烹店として、「みどり」あり、「入船」あり、境内を西方に出づれば、「丸萬」あり、「東吳」あり、「ふた熊」あり、「市山」あり、「日柄喜」あり東方に出づれば、「あづま」あり、「京興」あり、いづれも舌鼓を打つに足るべし。

竹林寺 (ちくりんじ)

おなじく千日前の通りにして、法善寺の南方に隣る、こゝも浄土宗にして大師堂あり、毎月二十一日には大師巡りの善男善女こゝに群集す、境内には、かの淨瑠璃に浮名を唄はるゝ「三勝半七」の墓あり、三勝は大阪長町四丁目目の屋平左衛門の娘にして、本名を「おさん」と呼び、半七は大和五條の生れ、屋號を赤根屋と稱しぬ。

水族館 (すゐぞくくわん)

我橋より南方へ三丁ばかり、千日前とは脊中合せのところ、西洋づくりの建物、これを水族館とす、その設計成つて工を竣りしは明治三十四年一月なり、水槽を作りて河海の魚類を放養す、その川魚を入るゝ水槽には、蛇籠を据ゑ、杭を建て、海魚を入るゝ槽底には岩石を配置せるなど、なかく趣向を凝しぬ、こゝに北海の鰻膺が嬉々として泳げるあれば、かしこに南洋の鱈魚が蠢爾として眠れるあり、い



は、殆んど水族動物か内地雑居の奇観にして、當地教育的觀世物として、これを第一位に推さるべからず。

●演舞場 (あんぶじやう)

水族館に向ふて御殿作りの一構は、これ南地五花街の藝妓が、歌舞練習の舞臺にて、年ごとに春の彌生を期し花に戯るゝ胡蝶の袖に翻へるところ、京の祇園は都踊と呼べど、これは浪花の芦邊踊といふ。

●難波停車場 (なんばすていしよん)

演舞場を南方へ半丁、そこを難波停車場とす、南海鐵道の起點、朝は五時三十分より夜十一時までを期して、堺へは半時間毎、和歌山へは一時半ごとに發車す。

●新金刀比羅 (きんこんびら)

千日前の南端にあり、賓客常に絶へず

●舊御藏 (おくらあと)

難波停車場より南方三丁あまり、南海鐵道第一の踏切際であり、青き松、白き壁、こゝに建列ねたる倉庫はむかし、舊幕府の租米を藏めたる所、今は葉烟草專賣所となる、俗語に曰く『わしとお前はおくらの米よ、いつか世に出てまゝとなる』

●眺望園 (てうばうかく)

舊御藏の東方半丁ばかり、こゝに五層の建ものあり、高さ十七間三尺壁間に懸れる額は、大阪名家の題字を集めたるものとぞ、このあたりに第五回内國勸業博覽會餘興見世物開設せらる、近傍に又たパノラマ館あり。

●廣田神社 (ひろたじんしゃ)

舊御藏より南方へ四丁ばかり、舊の今宮村にあり、天照皇太神の荒魂



を祀る、社地につらいて稻荷の祠あり、赤土大明神といふ。

星ヶ池 (はしがらけ)

廣田神社につらいて、すぐ南方に星ヶ池あり、むかし聖徳太子の時、こゝに天降りし星ありとぞいふ。

今宮神社 (いまみやじんしゃ)

この神社の裏門を出れば、星ヶ池の初なり、俗に蛭子神社といへど、祭りこめたる神々は、天照皇太神、蛭子尊、大日貴命、素盞鳥命、月讀命の五座なりといふ、平生は閉古鳥の鳴くばかりなる淋しき境内なれど、毎年正月九日十日は、福徳を授けたまはる蛭子神の縁日なればとて、こゝに群集するもの無慮幾十萬、いづれも社殿の背後なる羽目板うち叩きつゝ、聲を限りに「蛭子様、参詣りました」す叫ぶ、社頭より舊御藏までは、「吉兆」を商賣ふ店立ちならびて客を招く、吉兆

とは笹の葉に目出たさもの(米苞、小判、白銀包など)を結びつけたるものにして、これを祀れば富貴繁昌の吉兆なりと、いつの頃より誰か言ひ初めけむ、参詣の面々我一にと購ふて歸る、また社前より舊御藏に到る往來には、その中央に綱を張りて、往く人、歸る人と道路を分てど、時に押し合ふて人なだれを打つほどの賑ひは、江戸の神田祭も及ばじと思はる、かつ年によりて、五花街屈指の藝妓舞妓の粉装を凝して前後左右を廓の帯間に護らせ、駕を打たせて詣でくるあり、これを寶惠駕と呼ぶ、上方の俗謡に、「十日戎」の一曲(本調子)あり、曰く、十日戎の賣物は、はせ袋に、とりばら、せにかます、小判に金箱、立烏帽子、いさばす、さうらうち、たばねのし、小笹をかたげて千鳥足」

十萬堂 (じゅうまんどう)



蛭子神社より東南二丁あまりにありしが、あはれ今はむかしの面影を失ひぬ、十萬堂は、かの『今宮は虫ごころなり蟬なり』と詠じて時の有司の無能を罵倒したる、浪花の奇人小西來山翁が住み馴れし庵なり、翁が愛玩の女人形は、目下は河内八尾なる豪農西尾氏の秘藏なりといふ、來山は承應三年に生れ、享保元年十月三日に歿す、享年六十又三、妻なし、子なし、その辭世に曰ふ、

『來山は生れた所で死ぬるなり夫で根みも何もかもなし』

名吳の濱 (なごのはま)

蛭子神社より東方へ二丁、博覽會敷地の前を日本橋に出づる一直線の街道は、即ち古昔の名吳の濱なり、むかし應神天皇の御宇、吳人の船こゝに着きしかば、それに因みて名吳と命じたりとかいふ、されば其當時、このあたりより木津難波にかけて、一帯の海濱なりしなるべし

のちあつてまほ 後世名吳町を訛りて長町と呼びしかば、名吳の文字、今はわづかに街道の橋に残りぬ、かの芝居に演ずる『夏祭浪花鑑』の義兵衛ころしは、この邊の田圃なりしならむ。

唯専寺 (ういせんじ)

むかしは幽泉寺と書きしとぞ、蛭子神社より西方へ七丁ばかり、舊木津村の中央にあり、かの木津屋お雪(奴の小萬)が墓は、この寺内にもりしといふが、今は亡し。

大黒神社 (だいこくじんしゃ)

唯専寺の西方三丁あまりの社頭に、大國主神を祀る、俗に大黒様といふ、縁日なる甲子の日は、境内より東方二丁ばかりの間、種々の露店立並びて賑はし、こゝより北方は所謂る木津の青物市場とす、講談師の扇子よりたゞき出さるゝ木津の勘助は、この邊に住みたり



けむ、勘助町あり、勘助橋あり、またこの木津の町はづれより西方に、西濱町あり、即ち古昔の渡邊村にて、今も皮革製造の業盛に行はる。

八阪神社 (やさかじんしゃ)

大黒天を去ること西北に五丁、木津につらさし難波にあり、祭神は多門天、むかしはこの境内に綱曳の神事ありしが、今は廢れたり、月の四日、十四日、二十四日は縁日なれば、境内に夜店多く、参詣の人群集す、社前の通りは難波の市場にして、朝ごとの雑踏いはれ方なし、今に残れる子守唄に、木津と難波と天満との市場を歌へるあり、曰く、『ねんくころいち、天満の市よ、大根そろへて舟に積む、舟に積んだら、何處まで行きやる、木津や難波の橋の下』

赤手拭稻荷 (あかてぬぐひのいなり)

八阪神社を西方に出で、六丁あまりに、名高き赤手拭の稻荷あり、御手洗に赤き手拭を掛くるより名に呼びしといふ、境内の藤の棚あり、春の名残を惜しむに足る、この邊、むかしは草の野原なりしが、今は難波の網干場につらさて、近きところに赤手拭の病院へ建築されぬ。

攝津紡績會社 (せつぽうせんぎあひしゃ)

赤手拭の稻荷より三丁ばかりの西方に、煉瓦づくりの一構、烟突高く空中に聳えて、間断なく煤烟を吐くもの、これを攝津紡績會社とす、川を隔て、相見ゆるは大阪紡績會社なり。

汐見橋停車場 (しほみばしすていしゃ)

赤手拭より西北二丁あまり、汐見橋の南詰にあり、高野鐵道の起點にして、堺驛へ一時間ごと、長野へ三時間毎に發車す。この停車場より東方へ四丁あまりにして電燈會社發電所あり。



鐵眼寺 (てつげんじ)

沙見橋の停車場より田甫道を傳ふて、東方に展ること八丁にして鐵眼寺の裏門に出づ、禪宗黃檗派にして、山號を慈雲山瑞龍禪寺といふ、本尊は藥師佛にして十二神將を安置す、鐵眼和尚の開基にかゝる、鐵眼は肥後の人、黃檗なる木庵和尚に従遊すること年あり、延寶四年に至り、地を難波に相して、この瑞龍寺を建つ、鐵眼かつて一切經を刻せんとし、櫛風沐雨、海内を巡錫すること數年、淨財やうやく定額に充つに及び、天下の飢饉に遭ひ、その財を散すること二度、三度海内を周遊して、志はじめて遂ぐ、その堅忍不拔なる概ね斯の如し、鐵眼は寛永七年庚午の歲に生れ、天和二年壬戌三月二十二日寂す、年五十又三、今、鐵眼寺の表門にかゝれる「慈雲山」の額は、鐵眼が遺筆なりといふ。

この鐵眼寺の境内に半時菴淡々翁の墳あり、淡々は松木氏、其角門下の俊才なりしが、後に貞徳の流派を汲み、當時浪花の俳壇を代表したる一人なり、延寶二年甲寅に生れ、寶曆十一年辛巳十一月二日没す、年八十有八、辭世に曰ふ。

『朝霜や杖で畫さし富士の山』

お多福茶屋 (おたふくぢやや)

鐵眼寺の表門を東方に出で、一丁あまり、名に高きお多福茶屋あり、店頭飾れるお多福人形は、いつも盛裝して右手に客を招きつゝあり、相傳ふ、この人形には、年來老き狸の憑きて、古き衣裳を嫌ひ、その新らしき衣裳に更へし日に限りて、終日客足の絶ゆることなるとは、狸の仕業なりなど不思議に物語る人、今も少なからず。

この近傍に叶橋あり、俗に難波の土橋といふ



●●●●● 湊町停車場 (みなとまちすてーしよん)

お多福茶屋より西北二丁足らず、前に道頓堀川を扣えて、湊町の停車場あり、關西鐵道の起點にして、奈良へも行くべく、名古屋へも往くべし、遠く新橋への切符も買ふべく、近く梅田への切符も得べし、舊は大阪鐵道と呼びぬ、明治二十二年の施設とす。

「難波瀧をはちるかに見渡せば霞に浮ぶ沖の釣船」

西區と北區 (但し北區は梅田停車場より西部)

- 堀江遊廓……堀江座……阿彌陀池……土佐稻荷……新町遊廓……新町橋……
- ……瀬戸物町……陶器神社……永代濱……初……願教寺……松島遊廓……
- ……千代崎橋……木津川……尻無川……茨住吉神社……九島院……市岡中學校……
- ……天保山……瑞軒山……築港事務所……みつづくし……櫻鳴……
- ……水上警察署……大阪鐵工所……本田……川口町……大阪府廳……
- ……警察本部……府會議事堂……西區役所……大阪市役所……川口郵便電信支

●●●●● 堀江遊廓 (はりえのいうくわく)

湊町停車場前に架したる浪芳橋を東方に渡りつ、大黒橋を北方に越え、直ちに折れて西方に向へば金屋橋なり、橋の西詰なる建物は、加賀藩の屋敷跡にて、かつて久しく府會議事堂となりし跡、この屋敷に沿ふて北方へ四丁あまり、御池橋の袂を西方に、堀江座の前を過ぐれば、こゝを堀江の遊廓にして、花ふりかゝる別天地なり。

「武藏野に草はまな多けれを摘菜にすれば扱もすくなし」

- 局……雜喉場……日本倉庫會社……大阪區裁判所……青年會館……野田の藤……
- ……浦江の聖天……五百羅漢……福嶋天神社……逆櫓松……大阪商品陳列所……
- ……堂島中學校……大阪高等女學校……商業會議所……市立高等商業學校……
- ……大阪測候所……大阪工業學校……大阪病院……大阪醫學校……住友伸銅場……
- ……嶋の松……電燈會社……大阪郵便電信局……堂島米穀取引所……大阪控訴院……
- ……回生會社……北警察署……北區役所……中之嶋公園地……豊國神社……
- ……大阪公會堂……大阪圖書館……大阪俱樂部ホテル……日本銀行……
- ……堀川……曾根崎新地……露天神……永樂館……福井座……梅田停車場



この遊廓の真中に明樂座あり、デジ界の巨人大隅太夫の定席なり、また落語の定席として賑江亭あり。

●●● 阿彌陀池 (のみだいけ)

堀江遊廓の西方についで、名高き阿彌陀池あり、山號に蓮池山和光寺といふ、寺内に池あり阿彌陀池と名づく、むかし欽明天皇の御宇、彌陀三尊の佛像を此の池中に投じたるは、歴史に名高き事實なるが、さて其後、その佛像は、本田善光の手に拾はれ、信州善光寺の本尊となりぬ。

さるを此處には、たゞ其池のみ昔時のまゝに残りしが、元祿十一年、智善上人この地に和光寺を開いて、善光寺同體の本尊を安置せられしかば、こゝに始めて佛像由緒の靈地となりぬ、池中に寶塔あり、蓮花また高し、佛涅槃に入らせられたりといふ四月八日には、この邊りに

●●● 植木市賑ふ。

この近傍、長堀川に沿ふて材木屋多し。

●●● 土佐稻荷 (とさのいなり)

阿彌陀池より長堀川に沿て四丁あまり西北、玉造橋の袂にあり、この社地は舊土佐藩の藏邸なりしが、今は豪商岩崎家の所有となりぬ、靈驗あらたかなりとて參詣うねに絶えず、境内には櫻樹多し。

今は三十餘年の夢となりしが、かの堺に於て佛國人を砲撃し、果は國際談判の末、屠腹と事極まりし箕浦西村等の面々、明白を最期と聞きや、その夜一同こゝの社前に會し、圍を捻りて死にゆく身の順序を定めつ、まづかに社前を辭して、東隣の御殿に入り、こゝに袂別の盃を廻らしつゝ、さてその曉を以て、從容として堺に赴きしとぞ。



新町 (きんまち)

玉造橋を北方に渡つて往くこと二丁、こゝは賑はしき新町通りにして  
それより東方に上れば、足おのづから新町遊廓に入る、そもく新町  
は、大阪最古の遊廓にして、寛永年中、伏見の浪人木村亦次郎とい  
ふもの、みづから願ひ出で、花巻の長となり、こゝに新町の遊廓を開  
きしとぞいふ、この地もと野原なりしを新たに遊廓を置かれて、繁花  
の町となりしかば、只いつとなく新町といひ習はし、以て今日に及び  
ぬ、またその當時をいへば、新町橋以西わづかに四町たりしものが、  
いつしか南北に其區域は廣がりつゝ、むかし多くの行燈を見たりし新  
町の通りはいよく減りて、その南北は驚くばかり多くの貸座敷とな  
りぬ。

新町通りの南方は、即ち越後町の通りにして、(この通りには南地と色

を競へる小演舞場あり)、その又た南通りを吉原町といふ、むかし天満  
の吉原より此處に移りしものゆゑ然いふとぞ、また新町通りの北方は  
佐渡屋町の通りにして、その北通りは名に高き九軒なり、九軒の夜櫻  
はいはゆる、浪花八景の一にして、櫻樹の下に千代女が一句を刻した  
る碑あり、

『たまされて来てまことなり初ざくら』

おはれ年月のうつりかはりに、おもはぬ變遷は、この浮世の外なる遊  
廓をも襲ふて、扇屋は絶え、毬屋は失せ、折屋、高島屋も如何なりけ  
む、今はたゞ吉田屋と茨木屋のみ、むかしのまゝの面影に残りて、妓  
に夕霧なく、總角なく、吾妻なく、松山なし。

新町橋 (きんまちばし)

西横堀川に架る、これより東方は順慶町、西方は即ち新町にしていは



遊廓の大口口なり、この橋は淨瑠璃に芝居に幾度か仕組まれて、むかしより往來繁きところ。

『乾凍の道をしやらく男伊達』

(湘 夕)

この橋より西方へ四町、遊廓ちかきところに落語の定席あり、『歌亭』といふ。

瀬戸物町 (せとものちやう)

新町橋の西詰より北方、筋違橋の間は陶器問屋軒を並べぬ、されば俗に瀬戸物町といふ、毎年七月二十三日の祭禮には、町毎に意匠を凝し、陶器一式を以て巧に「つくりもの」を成し縦覽せしむ、この組合一同が尊崇せる陶器神社は、信濃橋の西詰を西方に入りたるるところにあり。

永代濱 (えいたいはま)

陶器神社より西方、三丁めまりにして永代濱に出づ、こゝに干鰯問屋あり、乾魚問屋あり、鹽魚問屋あり。

鞆 (うつば)

永代濱につゞける通りを鞆本通りとして、北なるを上通、南なるを下通とす、こゝも鹽魚、乾魚、干鰯などを商賈ふ家到るところに立並ぶ、いはゆる江戸の『魚がし』にして、『うつば』の三字を染出したる柿色の引幕は、梨園社會に珍重せらる、年の七月三十日より三日間は、商賈もの鹽魚、干魚にて『つくりもの』を成し、以て瀬戸物町と巧を争ふ、傍に鞆館あり、落語の定席なり。

廣教寺 (くわうきやうじ)

鞆の西方にあたりて五丁、薩摩堀にあり、山號を祝松山といふ、俗に願教寺と稱す、本願寺(本派)第三代覺如上人の季子善宗上人の開



基にして、代々の住職いづれも門跡の蓮枝なり、本尊の阿彌陀佛は、  
青蓮院尊純法親王が御念持佛なりとぞ。

●松島遊廓 (まつしまのうらくわく)

願教寺より西南十町ばかりにして、松島の遊廓あり、その區域をいへば、  
東方は千代崎橋、松島橋まで、南方は天神の御旅所、西方は即ち花園橋、  
常盤橋、梅本橋、北方は名に負ふ松ヶ鼻をかぎりとして取圍まれし中は、  
所謂る飲めよ歌への喜見城なり、この地は明治三年(?)遊廓と定められたる  
ところにして、その仲の町なる櫻筋の如きは、往來の中央に幾十株の櫻樹を  
植ゑ、花の全盛は燈を點じて美觀を究むるなど、すべてを江戸の吉原に習ひ  
しかば、その體裁に於ては當市第一等の花柳巷なるべし、  
そは兎も角、松島の名を生みたる松ヶ鼻の古松は、千年の綠色に榮え、  
垂れたる枝は川に臨みて得もいへぬ風致なり

しを今は四邊に立詰りたる軒に隠れて、あたら眺望をなくなしたり、  
松島橋の詰には鶏肉店「現長」あり、花園橋の袂には劇場「八千代座」あり。

その松島橋の南に架れる千代崎橋は、松島遊廓へ流れ込むべき第一の  
大門口にして、西方、花園橋に至る二丁ばかりの間は飲食店軒を並べ  
て往來絡繹たり、橋下の流れは有名の木津川なれば、船舶こゝに幅漕  
す、この流れに沿ふて西南に下れば、千本松に出づ、千本松は即ち木  
津川の河口にして、有名なる蜆茶屋あり、東岸には煉瓦石造圓形の燈  
臺あり、不動赤色の光達八溼といふ。

またその花園橋に沿ふて、同じく西南に下れば、尻無川の河口に出づ、  
そこに名高き甚平の小屋あり、春は蛤を取るによろしく、秋は殊更  
ら鰯魚を釣るによろし、まかも兩岸の櫓は、秋ととの紅葉、また捨て



難き風情ありとて杖を曳く人多し。

茨住吉神社 (いばらすみよしじんしゃ)

花園橋の西北一町足らずにあり、この邊もとは淋しき田圃なりしを開墾して、こゝに攝津菟原郡より住吉宮を勧請し、菟原住吉と呼びしを、いつか茨住吉と訛りしものといふ、祭神は、底筒男、中筒男、表筒男の神々と、神功皇后の五柱なりとぞ。

九島院 (きゅうとういん)

茨住吉の社頭より西方へ四丁にして九島院あり、山號を無龜山といふ、龍溪禪師開居の古蹟にして、本尊は觀世音菩薩

こゝより西南、天保山に至る間に、尻無川より安治川筋へ新らに開鑿したる新運河あり、その運河に沿ふて市岡中學校あり。

天保山 (てんぱうざん)

こゝは即ち安治川口の南岸なり、この邊、そのむかしは春と秋との遊び場にして、風ぎたる海原に蛤を拾ひ、まづけき波に鯨魚を釣りつゝ、わけて月の夕を賞したりしが、過る天保二年の春、幕府の命によりて、浪華の大川を浚へし土砂を此處に運びしかば、その遊び場は潰れて、新たに天保山の丘は築かれぬ。

むかし砲臺ありし跡に、高く聳ゆる燈臺は、明治十一年五月の建設にして、木造四角形なり、その高さ水面より四十尺、四等不動白色の光線遠く十二裡に達す。

瑞軒山 (すゐけんざん)

安治川口の東方にあり、俗に波除山といふ、これ貞享年中、川村瑞軒安治が、この川筋を穿ちし時、その土砂を集めて、此の丘を築きしものとぞ。



築港事務所 (ちくこうじむしょ)

天保山の東南にあり、築港の一斑に就ては、既に前に説きつ。

濤標 (みをつくし)

ひかしより歌に入り、畫に上りて、大阪といへば思ひ出さるゝ濤標は瑞軒山に近く一の洲にあり、水の深さを示すために建てしものにて、ひかし此の修繕は廻船問屋船持仲間が年々の課役として引受けしものとぞ

『難波がた何にもあらず濤標ふかき心の老るしばかりぞ』

(大江玉洲朝臣女)

櫻島 (さくらじま)

天保山に向ふて安治川口の北岸にあり、近年こゝに梅と櫻を植ゑて新たに遊園地を開かれ、海濱には海水浴場を設けられぬ、旅舎あり、割

烹店あり、以て一日の消遊を貪るに足る。

富島 (とみじま)

天保山より安治川の岸に沿ふて上れば富島に出づ、こゝには税關あり商船會社あり、諸國各港への汽船こゝより發し、此處に入る、帆檣林立以て大阪の繁榮を下するに足る、俗に川口波止場といふ。

この附近には、芦分橋の詰に水上警察署あり、少し離れて大阪鐵工所あり。

本田 (ほんでん)

富島より東北につゞける市街を本田といふ、こゝは海に航する人が川口波止場へ往くの要路なれば、旅立つ人、見送る人、往來殊に賑はし汽船問屋は兩側に軒を並べて巧に客を引きつゝあり、また清國人の寓居多く、支那料理に有名なる「豊樂園」あり。



川口町 (かはぐちちやう)

本町の東方に、川口町あり、こゝは外國人の居留地にして、街衢の整頓、遊園の鹽梅、自然に西洋的なり。區城内に三一神學校あり、プール女學校あり。

大阪府廳 (おほさかふちやう)

川口町を東方に、木津川橋を渡れば、江之子島に入る、こゝに壯麗なる洋館あり、大阪府廳是れなり、明治七年七月、時の權知事渡邊昇氏によりて建築せられたるもの、その北に並びて警察本部あり、南に隣りて府會議事堂あり、またこの江之子島の南端には西區役所あり、木津川橋の詰には大阪市役所あり、川口郵便電信支局あり。

雑俎 (ざこば)

府廳の裏門を京町堀に渡りて、それより東方、茂左衛門橋附近に出づ

れば、こゝ三四丁の間は、鮮魚漁刺として店頭に躍り、群集譬ふるにものなし、これを雑俎の魚市とす、近海の魚類にして一たび漁網に入りたるもの、その大部分は此處に集まり、去かる後、八方に散す、吾人が膳に上る小魚も、一度はこの關門を通りしものなり、此處と觀は所謂る江戸の『魚がし』ぞかし。

雑俎を北方に向ふて土佐堀川に出で、それより東方、弓形の岸に沿ふて筑前橋に至る間に、日本倉庫會社あり、大阪區裁判所あり、大阪唯一の基督教會堂としての青年會館あり、むかしよりの豪商加島屋廣岡氏の加島銀行あり。

野田の藤 (のたのふぢ)

土佐堀川を北に渡りて下福島に入れば、數丁にして野田の藤あり、芳野の花と並べ稱せられたる名譽の藤なりしが、天文年中兵燹にかゝり



て半焼失せたりとかや、今も尙「かげふち」として、その名遠國に聞ゆ。

『難波がた野田の細江を見渡せば藤浪かゝる花のうきはし』

(西園寺中將公廣卿)

●●●●● 浦江の聖天 (うらえのしやうでん)

野田より東北十丁ばかりにあり、寺號を了徳院と呼び、俗に浦江の聖天といふ、歡喜天を祀る、境内の池には蓮あり、燕子花あり、このあたり春は菜種畑に圍まれて、その眺望殊によし、國文の大家萩原廣道が碑あり。

●●●●● 五百羅漢 (ごひやくらかん)

野田より南方へ五六丁、下福島にあり、禪宗黃檗派にして、山號を龍

王山妙徳寺といふ、鐵梅和尚の開基なり、俗に五百羅漢の寺といふ。

●●●●● 福島天神社 (ふくしまてんじんしゃ)

三社に分る、その上の天神と中の天神とは上福島に、下の天神は下福島にあり、いづれも菅公を祀る、土地の口碑にいふ、延喜のむかし菅公左遷の途次、この地に船がよりして、土地の名を問はせたまひし時、餓鬼島なりと答へしかば、开は不祥の名よ、目出たう福島と呼び替へしと仰せられたる由緒の地なりとぞ。

●●●●● 逆櫓松 (さかのまつ)

上の天神に近く上福島にあり、元暦のむかし九郎判官義経、梶原景時と逆櫓の論ありしところをといふ。

●●●●● 大阪商品陳列所 (おほさかしょうひんちんれつしよ)

上福島の浄正橋を南方に渡りて一丁、堂島川に架れる田箕橋の北詰にあり、明治二十三年の設立にして、製産品参考館あり、賣品室あり、圖書館あり、工業試験部あり、西方に並びて堂島中學校あり、大阪高



等女學校あり、また東方に隣りて壯麗なる商業會議所あり、北方に曲れば、大阪市立高等商業學校あり、それと並びて大阪測候所あり、高く掲げられたる旗は、風に靡きて其日々々の晴雨を報じつゝあり。さて又た玉江橋を南方に渡れば、高等工業學校あり、大阪醫學校及び病院あり、その堂島川に沿ふては、住友伸銅場あり、過ぎしむかしは名所の一に數へられたる蛸の松あり、その土佐堀川に沿ふては、倉庫會社あり、電燈會社あり、稅務管理局あり、大阪朝日新聞社あり、肥後橋の際には、宏壯なる大阪郵便電信局あり、その筋向ふに旅館「花屋」あり。

●堂嶋米穀取引所 (とうじまぐらいこくとりひきしよ)

大阪郵便局を北方へ一丁、渡邊橋の北詰を東方へ折れて大江橋に至る間は、こゝぞ堂嶋の世界にして、米穀の仲買店軒を並べ、屋上の物見

臺には旗を振りつゝ相場の高下を報じつゝあり、火事が江戸の勇みなれば、指ささで百萬石を動かす是れや大阪の花なるべし。

ともく堂嶋が米穀の市場となりしは、いつの頃なりけむ、相傳えて曰ふ、天正年中、今の淀屋橋の袂に、淀屋巨菴と呼べる豪商あり、豊公のために軍糧を運漕すること多年一日の如し、後天下太平となるに及び、諸國よりの米粟を自己が一手に買集めつゝ、朝ごとに橋に出でゝは市を立て、以て諸人に鬻ぎしが年移り、世變りて、淀屋闕所に遇ひ、その家亡びし後、地を今の堂嶋に定め、淀屋の遺風を繼いで、こゝに米市場を開きしものなりとぞ。

この淀屋巨菴は世に傳ふる淀屋辰五郎の祖先にして、代々巨菴と呼びしや否、定かならず、上方唄に淀屋巨菴が作なりといふ

「はなのか」の一曲(二上り)あり。



『ながみれと何おもひけむ世の中のうきを見するはいのちなりおもへば夢の世を知らで甲斐なく澄む月のうつみのやみに見る花のおぼろくと見もわかぬあけて散りなむ暮れて散りなむ散ればど花の色も香もいづれはかなきはるのかせ吹かぬそのまのひとさかり惜しや暫しの花のえん名残を雲に吹とちよとめてかひなき花の香を袖につゝめど小笹のあられこぼれやすさよ我が涙ともになきつれ歸る鴈よそに見なしておもひこそやれなぞや心のなかるらむ』

●●●大阪控訴院 (おほさかこうそゐん)

大江橋より東方一丁あまり、堂嶋川を前に扣へて巍然たる洋館、これを大阪控訴院及び地方裁判所とす、その西方に並びて回生病院あり東方に續きて北警察署あり、北方に隣りて北區役所あり。

●●●中之嶋公園地 (なかのしまこうえんち)

控訴院を東方に往きて、堂嶋川に架れる浪花橋を南方に渡れば、こゝを大阪一の公園中之嶋にして、東方は浪花橋より、西方は大江橋に至り、北に堂嶋川は流れ、南は土佐堀川に望む、浪花橋の詰には石の華表あり、題して豊國神社といふ、即ち豊太閤を祀れるところ、明治十三年の建立にして別格官幣社なり、傍には豊家の忠臣木村重成の碑あり、その堂嶋川に沿へる建物には、森吉樓あり、大阪俱樂部ホテルあり、かの明治十年西南役の記念碑は近ごろ大阪城外に移されつゝ、その跡に大阪公會堂を建設せられたり、豪商住友家が寄附にかゝる大阪圖書館もすでに落成せり、また園池あり、中央に噴水器を設く、石造にして高さ丈餘、これに水道を利用したれば、噴泉球形を爲しつゝ遙かに上遊に向つて濃霧を吐く、夜間電燈の光これに映じて虹の如く



五彩燦爛として美觀譽ふるにものなし、まかも此のあたり垂柳の川風に梳らるゝあり、その間を點綴して梅、櫻、榊松の立並ぶあり、こゝに四阿の設けあり、かしてに床几あり、遠く東方を望めば、老松莖牙たる間、大阪城の礎の儼然たるあり、西方は澗江の巨流二派に別れて安治川に走る、春によろしく、秋によろしけれども、わけて夏の夕を、こゝに散歩せよ、輕き浴衣をもるゝ涼風まさに、羽化登仙のおもひあるべく、もしそれ一盞を傾けて興を添えんとならば、朝日ヒイヤホールあり、淀川の鮮魚に舌鼓うたんとならば銀水樓のあるあり、げにや夏の一刻千金は、この公園の夕なるべし、又此公園の東に架橋を設けて川中に突出せる大阪納涼臺あり。

●日本銀行支店 (にはんぎんこうしてん)

日本銀行の支店にして中の島公園の西にあり其構造壯嚴偉大關西隨一

の建築物と稱するに足る

●蜺川 (まいみがは)

堂島川の北方を流るゝ名ばかりの小川なれど、近松巢林子の詩材に入りて『時雨の炬燵』となりしかば、その名は高くなりぬ。

『治兵衛は傍に有合す定木を枕うたゝねのあたる炬燵の小春時また曾根崎を忘れずかと退る蒲團の内さへも涙にまめる其風情……いえく憎いさうな憎ましやんすが嘘かいなア一昨年(おととし)の十月(じゅうがつ)中の亥の子に火燵あけて……女房の懷中には鬼が住か蛇が住むか夫れはど心のこりなら泣かしやんせくその涙が蜺川へ流れたら小春が汲んで呑みやらうぞ』

●曾根崎新地 (そねざきしんち)

蜺川を北方に渡れば、柳は緑、花は紅の曾根崎新地なり、俗に南地



に對して北の新地といふ、寶永五年、この遊廓の開かれしころは、新町と並び稱せられて、町はづれに編笠茶屋といふがありしとぞ。近松が「お初徳兵衛」の心中も、この廓の事なり、「小春治兵衛」も、この廓の事なり、「五大力」亦然り、されば往時全盛なり、この廓も今はむかし繁昌を南地に奪はれて、「菊野」なく「小春」なし、たゞ「傳法屋」の女將が俠名、ところの名物女として唄はるゝのみ。

●露天神 (つゆのてんじん)

俗にお初天神といふ、曾根崎新地にあり、傳に曰ふ、むかし菅公左遷の砌、福島に舟泊りして、太融寺に詣でんと、船頭茂太夫といふに道案内させ、このあたりを過ぎたまひし時、露いと滋かりしかば、

『露と散る涙に袖は袴にけり都のことを思ひいづれば』  
 の一首を詠じたまひぬ、これより露の天神と名に呼びしとかや。

この近傍に永樂館あり、落語の定席なり、西方に二丁あまり櫻橋際には劇場「福井座」あり、この「福井座」より今の梅田の停車場への曲り角に、大阪一の劇場たる「歌舞伎座」の櫓、美々しく立つたりしに興行わづかに五六度にして、明治三十二年一月、火を失して灰燼となりぬ。

●梅田停車場 (うめだすていしやん)

大阪一の停車場、否、本邦一の梅田停車場は、去る明治三十四年夏、竣工せしもの、その規模の宏壯なる、その輪奐の美麗なる、以て日本第一と誇るに足る、そもく大阪の地は關西の咽喉にして、四通八達の要路なれば、鐵路縱横に通ふて、市内の停車場また頗る多しといへども、皆この停車場に集まり来る、されば官設東海道線の大驛として、東は京都、名古屋、濱松、静岡を経て、東京新橋に達するのみな



らず、西は官線の終點神戸より山陽鐵道に聯絡し、瀧笛一聲山陽道を横斷して、岡山、廣島、下關に達す、さらに阪鶴線に乗れば、神崎より有馬、三田を経て、丹波の篠山、福知山に往くことを得べし、もしそれ關西鐵道の城東線に乗れば、櫻の宮よりは網島に聯絡すべく、天王寺より、湊町へ、奈良へ、將た難波へ、堺へ、和歌山へも行くを得べし、さらにまた西成鐵道に投せば、忽ちにして安治川口に到る。便利は是れのみにあらず、構外に出づれば梅田電信局あり、以て火急の用を報すべく、通運會社あり、以て荷物を托すべし、その他飲食店あり、旅館あり、この地に來れば、殆んど物に不自由なきの感あるべし。

「頭がせく苗代水の流れまで離波わたりは心ありけり」

### 天満と上町

但し上町は桃山以北とす

- 凌雲閣……鶴の茶屋……車茶屋……朝妻……網敷天神……梅塚……鬼儀野……大融寺……淀君之墓……寒山寺……西福寺……西山宗因墓……成正寺……大鹽平八郎父子之墓……堀川監獄署……天満神社……天満座……興照寺……關西法律學校……天満市場……天神橋……天満橋……造幣局……大阪製煉所……源八渡……櫻の宮停車場……水道水源地……櫻の宮……網島停車場……網島……大長寺……和左正幾利……鯉塚……小春治兵衛墓……京橋……砲兵工廠……大阪城……新練兵場……八聯隊……陸軍地方幼年學校……偕行社……玉造……森の宮……玉造稻荷……真田山……陸軍共同墓地……騎兵第四聯隊兵營……とんとろ大師……圓珠菴……高津宮址……小橋里……産湯稻荷……桃山……百濟野……上の宮……夜梅屋敷……新梅屋敷……桃山中學校……菟菴菴……誓願寺……井原西龜之墓……中井鬘菴……履軒……竹山三氏之墓……法妙寺……近松門左衛門之墓……瓦屋橋……大阪博物館……平林座……高麗橋……高麗橋電信局……八軒家

### 凌雲閣 (りやううんかく)

梅田停車場より東北三丁ばかり、北野茶屋町にあり、俗に九階と呼ぶ



九層の高閣にして、頂上まで二十七間といふ、その尤も上層に登れば、大阪二十萬の人家は一眸の中にあり、閭を廻りて庭園あり、いづれも花卉に富む、近傍に鶴の茶屋あり、車茶屋あり、すこし離れて朝妻あり。

●網敷天神 (つなしきてんじん)

凌雲閣より少し隔て、網敷天神あり、むかし菅公左遷の砌、福島より大融寺に詣でんとて、こゝに少らく憩はせ給ひしが、その時綱を敷かせて、この邊りの風景を愛てられし由緒のところなれば、その勸請の年歴いと古し、俗に北野天神といふ。

この近くに行基菩薩が開基といふ常安寺の境内に、梅塚あり、これ菅公遺愛の梅樹を埋めたることをぞ。

●兔餓野 (とがの)

北野より西天満にかけて總稱したるもの、今もその一部に兔餓野町といふ名は残りぬ、このあたりは舊史にいふ兔餓野なるべし。

『月かげをおく霜かと思ふらむ兔餓野の鹿の聲を恨むる』

(源 師 光)

●大融寺 (たいゆうじ)

凌雲閣より東南四丁ばかりにあり、山號を桂木山といふ、古義眞言宗にして高野の四善港に屬す、本尊は千手觀音、脇に弘法大師自作の地藏尊、毘沙門天の像を安置す、ともく當寺は弘法大師が開基にして、浪華における古き寺院の一なり、相傳ふ、弘仁年中、大師こゝに來りたまひしに、折から松柏の深く茂れる木下閣に靈光赫々として、まかも異香あたりに薫せる不思議の靈木あり、大師この靈木を以て地藏、毘沙門の尊像を刻み、こゝに寺堂を建立したまひしといふ、後、融の



左大臣之ばく此處に遊び、終に一大寺院を造營したまひしかば、こゝに大融寺と稱す、その桂木山といふは、靈樹の出でたるより起りし山號なりといふ、寺内には、むかしながらの藤の棚あり、春ごとにゆかりの色に咲出で、遊覽するもの多し、月ととの二十一日は、大師の縁日なれば、信仰の老若男女終日門に絶えず。

この境内に「淀君」の墓あり、九重の塔にして高さ一間あまり、もと鴨野にありしをこゝに移せしものといふ、石ものいはねば昔むして昔時の夢も語らず。

兎餓野より西寺町に入れば、寒山寺あり、西福寺あり。

寒山寺は、吳の姑蘇なる寒山寺を我國に移したるもの、本堂に額あり、「姑蘇名利」といふ、禪宗にして天龍寺に屬す。

西福寺には「西山宗因」の墓あり、宗因は肥後の人、延寶のころは浪

華に住みて俳壇に一流を創め、名づけて談林風といふ、當時江戸には芭蕉翁あり、洛陽に言水あり、浪花に宗因ありとまで稱せられぬ宗因は應長十年乙巳に生れ、天和二年壬戌三月二十八日歿す、年七十八、その妻女は畫伯孫幽翁の女なりといふ。

『白露や無分別なる置きどころ』

(宗 因)

また寺町橋を渡りて東寺町に入れば、成正寺あり、こゝに「大鹽平八郎」父子の墓あり。

平八郎は天滿與力の家を生れ、幼にして穎悟、長じては陽明派の學者として聞えしが、時しも天保の飢饉に際し、大阪町奉行が處置に不平を抱き、同士相率ゐて、城代に迫り其罪を鳴らさんとして素志を誤られしかば、終に當時の「御尋ねもの」となり、その身は自刃して斃れぬ、當時の御觸書に曰く。



「此度於大阪不易儀相企ひ、東與力大鹽格之助父大鹽平八郎へ致徒黨い悴格之助、同與力瀬田濟之助、東同心渡邊良左衛門、與力近藤梶五郎、同心庄司儀左衛門、其外名前不知者共行衛不相知船にて逃去る程も難斗、怪敷者より廻船は勿論、小船端船等にて他國へ便船相頼ひ共、決して貸申間敷ひ、如何體にも致手當、不逃様其所へ留置、早々大阪町奉行所へ訴ひはり、爲褒美其者へ銀百枚、手傳之者共へ相應に褒美可差遣ひ條、此旨相心得、津々浦々へ不洩様早々可相觸もの也

西二月

大阪町奉行

伊賀印  
山城印  
浦々中

堀川監獄署 (ほりかはかんごくじよ)

太融寺の東方、堀川に沿ふて、方數丁の煉瓦塙を廻らし、別に一廓を作りしうちは、即ち堀川監獄署なり。

天満神社 (てんましんじや)

堀川より四丁あまり、天満大工町にあり、舊は此處より北方明星ヶ池の邊りに鎮坐せしませしといひ傳ふ、天満大自在威徳天神(菅公)を祀る、境内廣くして社殿の背後には神苑あり、こゝに丹頂の鶴遊ぶ、北には龜の池あり、池の砌に藤の棚あり、朝に夕に來り賽する人絶えず、わけて月ごとの二十五日は、この神の縁日にて、境内には露店充ち、參詣の人群集す、年ごとの夏祭りは七月二十五日にして、神輿は此處より松島なる御旅所まで船渡御の式あり、この式は所謂關西の二大祭禮として、京都の祇園祭りと並べ稱せらるるものにして、漫々



たる淀川の流れには、氏子の面々御迎ひ船を飾り踊り狂ふて是れを迎ふるあり、陸には家ごとに幕引廻して軒には定紋の提灯を點し、節いさましく地車を引き出す盛観に至つては、殆んど他國に類なきところなり。

北門には「天満座」の劇場あり、淨瑠璃の定席あり、落語の定席あり、新内の席あり、その北通り大工町は古着商軒を並べて賑はしく、西の通りは即ち天神橋を経て松屋町に達するの道路なれば、往來織るが如し。

この社頭より東北なる河内町の興照寺には、司法省認定の關西法律學校あり。

●●●天満市場 (てんまいちば)

天満神社の表門より半丁ばかり西の通にを南方に出で、天神橋の北

詰を東方に向へば、こゝ三丁あまりは、所謂天満の市場にして、青物問屋軒を並べ、朝ごとの繁昌いはん方なし、大阪附近の畑に植ゑる室に育て、つくり上たる初物は、先づこの市場に上りて後、難波に落ち、木津に送らる、また天神の表門筋には、魚類の市場あり、これ亦た繁昌を極む、清少納言が枕の草紙に、市の事を書きて、こゝの市を洩らしたるは残念なりと、古人の恨みしも宜なるかな。

●●●天神橋 (てんじんばし)

淀川に架る、長さ百三十餘間、幅六間の大鐵橋にして、その構造、願る巧を極む、橋上より東方を望めば、天満橋より大阪城あり、西方を望めば、浪花橋より中之嶋あり、夏の夕、月明の夜には、こゝより浪花橋の間に、納涼の舟舳を並べて絃歌湧く、實に大阪市人が熱鬧の巷を出で、暑氣わする、倔強の場所なり、むかしはこの橋、木橋に



て百二十二間半なりしが、去る明治十八年の大洪水に流失せしかば、

天満橋 (てんまばし)

天神橋の川上に架る、この橋も舊は長さ百十餘間の木橋なりしが、かの十八年の洪水に押流されて、今は方形欄の鐵橋となりぬ、長さ百十七間、幅六間、その中央を車馬道とし、左右を人道とせるなど、凡て天神橋と同じ、橋の中程より東方に出づる一筋の堤防あり、これを行けば備前島に出で、網島に出づ、橋上より望めば、東北斜めに造幣局あり、橋下には昔日の三十石は絶えて、伏見通ひの瀧船、時を定めて往來しつゝあり。

造幣局 (ぞうへいきょく)

天満橋の北詰を東方に上れば、造幣局あり。このあたり川崎といふ。

淀川を隔て、櫻の宮を望む、こゝに南北二十餘丁の間、石を疊みて鐵柵を廻らしたる大洋館は、造幣局にして、即ち我國唯一の貨幣鑄造所なり、岸に沿ふて櫻樹の花の咲揃ふころ、毎年三日を期して衆庶に縦覽せしむ。

淀川橋 (よどがはし)

この橋は泉布觀の傍より櫻の宮に架せるものにして三十五年の秋新に架せられし日本式擬寶珠ある大阪第一の長橋なり。

泉布觀 (せんぷくわん)

造幣局の北方に隣りし泉布觀は、宮内省の御用邸にて、天皇、皇后兩陛下の、かつて行幸啓あらせられしところ、地は淀川を枕として尤も景勝の位置を占む、現今は大阪美術協會に貸與されて、時に展覽會を開かれ、時に能樂を催ふる。



北方に隣りて大阪製煉所あり、三菱會社の所有にして、金石の分拆に従事しつゝあり。

●源八渡 (げんばちのわたし)

製煉所の北方は即ち昔時より名高き源八の渡し場なり、こゝを渡れば櫻の宮停車場あり。

●水道水源地 (すゐたうすゐげんち)

櫻の宮停車場の北方にあり、この邊すべて都島村といふ、そもく大阪の水道は、その設計遠く二十餘年の昔時にあり、爾來年を閲して、漸く明治二十八年十一月十三日その進水式を擧げたりき、さても此處より送らるゝ水は、大阪城内に入りて天主臺下の貯水池に溜り、さらに再び多大の高壓力によりて市中に送水するの大仕掛にして、大手門外には水量を加減すべき瓣室の設けあり、工事成功して以來、我が大

阪市が衛生に、火防に、その功益を得たる、蓋し鮮少にあらす。

●櫻の宮 (さくらのみや)

水源地の南方淀川に沿ふて少祠あり、これを櫻の宮とす、名にしあふ櫻花の名所にして、江戸の向島と其美を争ふ、去る十八年の洪水に遇ふて、可憐ら名木その半分は枯れ果て、今は舊時の美觀なけれど、近年又大に櫻を植へたればなほ一名區たるを失はず。

●網島停車場 (あみじま)

四條畷、新木津、加茂を経て名古屋に達する關西鐵道の支起點なり、此近傍の片町停車場は貨物のみを扱ふ所なり。

●網島 (あみじま)

櫻の宮より淀川に沿ふて西南に往けば、網島に入る、こゝには藥商藤田氏の邸宅あり、有名なる料亭「鮎字樓」あり、この邊り閑雅にして住



むによろし。

●大長寺 (だいぢやうじ)

淀川堤に沿ふて網島の入口、「和左正義利」の碑ちかくにあり、浄土宗にして京都黒谷に属す、本尊の阿彌陀佛は惠心僧都が作なり、境内には鯉塚あり、小春治兵衛が墓あり。

●京橋 (きやうばし)

大長寺より備前島橋を渡れば、京橋に出づ、川下に架れるは即ち天満橋なり、こゝは舊大和川と猫間川との落合ふて淀川に入るところなり、附近に砲兵工廠あり、昨年八月、砲弾破裂して近き田舎を驚かしぬ。この京橋口は、むかし大阪城の外曲輪四門の中の一門にして、いはば藏と呼びける當城用意の米庫は、四十八戸前立並び、徳川幕府の世には、こゝに城番屋敷を置かれぬ、浪六子の著、「大阪城」の中

に曰く。

『傳へていふ、この京橋口城番屋敷には豊家の怨靈悪氣あつたりて、さまざまの怪異ありしかば、いづれの諸侯も始終これを守るこゝと能はず、事に托し半途に棄て、江戸に遁歸り、おして踏止まるものは忽ち重病亂心にかゝりしかば、享保十三年、戸田大隅守といへる大剛の士を選んで城番とせり、大隅守は世に聞えある無双の勇者にて、猿面冠者が作りし城跡に何程の事かあらむ、さるを年々城番の女童に似たる不覺の振舞、徳川家末代までの恥辱なりと、命を受けて着するや否や、其夜の更深るを待て唯ひとり城中を見廻り、翌日たゞちに庭前の稻荷神社を毀たんとす、諸士おどろき諫めていふ、これを淀君が勸修せし信仰の遺跡にして、當城鎮護のため今に至るも年々の祭祀奉納を怠らず、もしこれを怠れば必らず不思



職の變ありと、大隅守笑ふていふ、我こそ江戸將軍の命をうけて  
 當城の鎮護たり、なんぞ淫婦の祭りし稻荷をたのみむやと直ちに取  
 毀ちて之を焼捨てしが數日を経て家臣に大熱を發するものあり、そ  
 の病勢次第に諸士を惱まし、後には數十人一時に枕を並べて苦惱反  
 亂するのみか、積年閉ぢて不開室と稱せる三番の奥書院に、何者と  
 も知れず夜なく悲鳴をあぐる怪物の聲物凄く、終には書院口より  
 廊下に現はれいで、人を驚かし、家老用人の徒輩までも深夜面上に  
 爪もて引搔れし疵を負ひぬ、大隅守ひやゝかに笑ふて、さらばその  
 不開室こそ面白けれ、我これを掃清めて寢室にせむ、呵しや何程の  
 事あらむと、元和落城の後は多年四方を釘附にして晝なほ闇く人を  
 襲ふの鬼氣陰々たる怪異の大廣間に、固より聞えし大剛の男なれば  
 無刀のまゝ押入つて座の中央に端坐し、磨澄したる陣鏢を右の膝下

に敷き一穗の燈火に向ひつゝ、さゝおよぶ怪物ごさんなれ、機會よ  
 くば手捕にせむ、事むづかしからば鎌もて搔切り呉れむと待てども  
 く更に音なく、其夜はほのくくと曉方近く書院口板戸の隙間より  
 曉白の漏るゝころ、鞆室の大襖すつと開いて臙闌けたる女房の半面  
 おぼろに現はしぬ、大隅守おろりと見遣りて少しも動せず、左手を  
 あげて靜に差招けば、その女房はと笑ふて入來りつゝ、まばし座  
 中を彼方此方に歩みしが、果は床の間の柱に倚りて憩らふところを  
 大隅守やつと聲かけて飛掛りざま、不群の大力むづと引組みし甲斐  
 もなく忽ち撞と抛出されぬ、抛られながら再び飛掛つて首筋引搦め  
 ば、怪物も今は叶はじとて美人の面相惡鬼と化して、肩先に爪を立  
 て頬骨に噛付かむとするを、引放して喉笛に陣鏢うち込み、ゑいと  
 叫んで一文字に引下すや否や、其まゝ押伏せて見れば轍に等しき老



狐にて、これより城番屋敷の怪異その痕跡を絶ち、また老狐の皮は剣で永く戸田家に傳へしといふ』

●大阪城 (おほさかじやう)

ひかし石山本願寺の城さしところなりしが、天正十一年、豊太閤こゝに三十萬人の工を督して、日本無双の金城は雲に聳へぬ、慶長年間古圖を見るに、北方は天満川を越えて出丸を築き、馬出を延き、帶曲輪をめぐらし、西方は高麗橋の川筋に沿ふて櫓を建て砦を組み、南方は天王寺口より舍利寺に渡りつ、東方は玉造口より鳴野、今福、若江、深江を取圍み、別に京橋口の一廓、博労が淵の固めあり、大櫓は四十八箇所、小櫓七十六箇所、大事の持口二十二箇所、その追手の中央は本町筋にあり、搦手は玉造口また青屋口あり、京橋口あり、これを外曲輪として、内曲輪の本丸には櫻の門あり、この門の左右は空

濠にして、こゝに生ずる片葉の蘆は城中名物の一つと呼ばれぬ、櫻の門より同朋口を過ぎて堀門より向ひしところは、こゝを豊家二代の御殿にして、その建坪四千六百餘坪、室数は六百三室、臺は一千九百餘疊、襖は三千八百五十八本、障子は二千九百二十八枚、さすがに古今の豪者を極めたる豊公が遺物、また本丸の中央に聳えし天主臺は、太閤みづから奉行して築きしところ、臺の高さ地盤より一百二尺、地盤に入ること七十五尺にして、五層の樓閣雲に秀で、臺の鯨は常に雲煙に隠れて見えざりといふ、かゝる金城鐵壁なりしが、權花一朝の夢、たちまち元和の落城となりて、無双の名城兵燹に壞たれ、たゞ牙城のみ取残されしといへども、猶當時の總坪数は三十三萬五千餘坪、内曲輪は三萬八千五百餘坪、外曲輪は二十九萬六千五百餘坪、御殿の残りし建物坪は四千六百餘坪にして、この御殿内の間敷六百三室、櫓數



三十六箇所、御門三十五箇所、黄銅の水溜三十六、井戸十八箇所、内曲輪の矢倉窓五百十八、同石窓五百十七、外曲輪の弓鐵間九百四十八石窓六百三十九なりしとぞいふ。

爾來、春花秋月幾多の變遷に伴ふて、規模漸く縮少し、明治二年には兵部出張所を城内に設けられ、その四年には大阪鎮臺を置いて第四軍管を統轄され、後第四師團本營となりぬ、今は第四師團司令部あり、軍樂部あり、水道貯水池あり、中之島なる紀念碑もこの城外に移され、午時の發砲は天主臺の跡に据られぬ。

城の東には新練兵場あり、城外に第八聯隊及第三十七聯隊の兵營あり、陸軍地方幼年學校あり、城の西には借行社あり。

●玉造 (たまつくり)

城の東方一帯を總稱して玉造といふ。

芝居に上り淨瑠璃に語らるゝ「傾城阿波鳴戸」には、十郎兵衛はこの邊りにや住みたりけむ、「父母の恵みも深き」順禮歌を唄ふて、はる

く阿波を出で、父母を尋ねしお鶴が、父ゆる非業に斃れしも此邊りなるべし。

●森の宮 (もりのみや)

城を出で、東方玉造にあり、こゝは聖徳太子が一度四天王寺を建立したまひし遺蹟にして、舊は鶴の宮といひ、用明天皇を祀る、この邊り、春は摘草によるし

●玉造稻荷 (たまつくりのいなり)

豊津稻生大明神といふ、祭神は倉稻魂命にして、人皇十一代垂仁天皇の御宇、こゝに勸請ありしものとぞ、祠後の舞臺に上れば、平野三里を眼下に見て、暗峠、信貴、生駒の山々、いづれも指呼の間に



あり、かの名に高き昔日の二軒茶屋の跡は、このあたりなるべし。  
『ひとつとして萬代てらす月なれば底も見えけり玉造川』

(讀入知らず)

●●● 眞田山 (さなだやま)

玉造の南方に小高き丘あり、舊嶺山と呼び、こゝに稻荷の祠ありしが  
元和の役、大阪の軍師眞田幸村こゝに陣屋を構へしより、眞田山とぞ  
呼び傳へぬ。

このあたり近くに陸軍の墓地あり、騎兵第四聯隊の兵營あり、西に  
どんどろ大師あり。

●●● 圓珠菴 (えんじゆあん)

どんどろ大師の近くにあり、こゝは契沖阿闍梨が老後の閑居なり、契  
沖は攝津尼崎の人、國學に精通して二代の著書頗る多し、寛政十七

年庚午に生れ、元祿十四年辛巳正月二十五日、この菴にて歿す、年  
六十二、碑文は水戸の儒者安藤爲明の撰なり。

『梅の花おぼる月夜に匂ふなり常にもがもな此頃にして』

(契 沖)

●●● 高津宮趾 (かうづのみやうし)

圓珠菴より南方五丁ばかり、味原池の畔は、むかし仁徳天皇、皇居  
の御趾なりとて、學者の考證それと定まりしかば、明治三十二年、こ  
ゝに石標を建設せり。

『荒にける高津の宮のほととぎす誰になにはのこと語るらむ』

(楳中納言長方)

このあたりは名に高き小橋の里にして、史に曰ふ、こゝは藤原鎌足  
の遠祖、大小橋命が館の跡なり、故に後世小橋の里と呼ぶとぞ。



●●●●● 産湯稻荷 (うぶゆいなり)

高津の宮趾より一丁あまり南方に産湯稻荷あり、その丘を法藏山といふ、土地閑雅にして水清し、料亭には産湯樓あり。

●●●●● 桃山 (もみやま)

産湯より南方の地を總稱して桃山といふ、名に負ふ桃の名所にして、

春は三月、桃花の全盛には、滿地桃ならざるはなし、されば年ごとに

花の候となれば、到るところ掛茶屋を設け、争ふて客を招く、雑沓

甚し。桃山より東方は、いにしへの百濟野にして、上の宮あり。

●●●●● 梅屋敷 (うめやしき)

新梅屋敷は桃山の西方、舊梅屋敷はそれより南方にあり、新梅屋敷は

地に高低あれど花いまた新らしく、舊梅屋敷は花に趣味あれど、土地

俗なり、いづれも花の時には、雅俗群集す。

この附近に桃山中學校あり。

●●●●● 翫菊庵 (くわんきくあん)

新梅屋敷の西方に翫菊庵あり、秋ごとに菊の花壇を作つて、やゝ東京

の團子坂の趣あり、こゝを梅が辻といふ。

このあたり寺院多く立並ぶ、即ち小橋寺町、上寺町、生玉寺町、中

寺町、下寺町など、その區域なかくに廣し。

●●●●● 誓願寺 (せいがんじ)

八丁目寺町にあり、浄土宗にして、境内に二萬堂井原西鶴の墓あり、

また碩儒、中井翁菴、履軒、竹山三氏の墓あり。

西鶴は浮世草紙の開山にして、俳句を西山宗因に學び、みづから談

林二世西鶴といひ、また松壽軒と號す、延寶年間住吉の社頭に一日



獨吟二萬三千句を吐き、戯れに二萬堂と號しぬ、一代の著者頗る多し、就中「五人女」「一代男」尤も世に行はる、寛文十九年壬午に生れ、元禄六年癸酉八月十日没す、享年五十二、辭世あり。

『浮世の月見過しにけり末二年』

門人下山鶴水、北條團水、碑をこの境内に立つ、また江戸日暮里なる養福寺に梅翁宗因が花樽の碑あり、その裏面に談林二世西鶴として一句を刻せり、曰く。

『我妻のまつ島もさを初がすみ』

法妙寺 (はうめうじ)

谷町寺町にあり、日蓮宗にして、この境内には近松門左衛門の墓あり。

近松巢林子の事蹟には諸説異同あり、『南水漫遊』に曰ふ、

『淨瑠璃の作文、歌舞伎狂言作者の名人と世に聞えたる近松門左衛門は、姓は杉森、名は信盛、平安堂巢林子と號す、越前の人、一説に三州の人ともいふ) 少して肥前唐津近松禪寺に遊學し、義門と改め、僧侶と□□人となせしが、所詮一寺の主となりて□□□□の利益薄しと大悟を開き、雲水に出しが、内縁の舍弟岡本一抱子といふ大儒の醫師京師にあれば、これに寄宿して還俗なし、堂上方へ勤仕する間、有職を記臆し、そのころ京師都萬太夫の歌舞伎芝居、また淨瑠璃芝居、宇治加賀縁、井上播磨縁、岡本文彌、山本角太夫などの淨瑠璃狂言を著作せしが、貞享三年大阪竹本義太夫座より頼まれ、『出世景清』といふ新作を出しが竹本の戯文の書初にて、それより生涯數百番の出作ありて、美名を海内に發し、看板または板本に作者の名を記す元祖とす、近松氏は元來衆生を濟度せんため



の應念より出作する戯文ゆる。平常の脚紙ものとは替り、俗談平話を鍛鍊して愚痴闊味の俗中の人情を貫き、神儒佛の奥儀も残るところなく著はする俗文は、古今の名人、通れ一派の文者ともいひつべし、俚俗いふ、近松の浄瑠璃本を百冊讀めば、學ばずして三教の道を悟り、上より下萬民に到るまで人情に通じ、乾坤の間に森羅萬儀あらゆる事辨へざるといふ事なし、實に人中の龍なるべし、年耳順を過て享保九辰年十一月二十二日歿す、墳墓は八町寺町法妙寺にあり、また久々廣濟寺の過去帳にも法名あり、『阿耨院穆矣一具足居士』、この戒名は近松氏在世より設けおきたることを辭世『それ辭世去はと扱も其後に殘る櫻の花し句は』

瓦屋橋 (かはらやばし)

墓を廻りて、菟菊菴より西方に高津の表門を下れば、松屋町に出づ

北方に向へば、即ち天神橋に往くべき一筋道なり、往くこと三丁あまりにして、西方に瓦屋橋を見る、こゝは『新版歌祭文』の浄瑠璃によりてお染久松が浮名を流せしところ、橋の袂には、むかしまゝの油屋ありといへど知らず。

大阪博物館 (おはさかはくぶつぢやう)

本町橋の東詰、東横堀川に面して大阪博物館あり、こゝは舊大阪西町奉行所のありしところにて、その博物館となりしは明治七年なり、正面の美術館は巧妙なる接木細工により洋風に建築されたるものにして、その天井は社寺秘藏の古畫を摸したる美麗の貼天井なり、こゝに新古の美術品を陳列す、書畫あり、彫刻物あり、美術館の周圍には各種の賣店あり、その他、場内には動物園あり、茶店あり、能樂堂あり、僅に二錢の入場料を拂へば、終日こゝに遊ぶを得、その裏門は即



ち松屋町通りなり。

高麗橋 (かうららばし)

博物館の裏門の松屋町に出で、尙も一直線に北方に向へば、四丁ばかりにして、西方に高麗橋を見る、所謂徳川時代の御用橋にて、當時刑人を晒せしところ、されば明治維新までは橋の袂に高札場ありしとぞ、舊は木橋なりしが、明治三年九月、今の鐵橋は架せられぬ、長さ四十間、幅四間、これを當市最初の鐵橋とす、東詰には里程元標あり各所への里程を算するに、此處を起點とすること、京の三條大橋、東京の日本橋と同じ、元標の東方に高麗橋郵便電信分局あり。

八軒家 (はちけんや)

かくて松屋町筋をまたも、北方に進めば天神橋に出づ、橋の南詰より東方に曲れば、即ち八軒家なり、むかしは伏見がよひの三十石こよ

り上り、こゝに着きたるところ、今は川蒸氣船の漣笛に曉方の夢を破らる、このあたり漣船問屋あり、運漕店あり、旅館あり、飲食店あり、往來殊に賑はし。

『霧がれの浪花の蘆のはのくどむくる渡に千鳥啼く也』

船 場

長堀川より北方、大川筋より南方、東方は東横堀川まで、西方は西横堀川までを限りて、此ところ角形を成したる市街、これを浪華の目貫、總稱して船場といふ。

その東西に通ずる町名を北より南に順擧すれば、曰く大川町、北濱、今橋通、高麗橋通、伏見町、道修町、平野町、淡路町、瓦町、備後町、安土町、本町、南本町、唐物町、北久太郎町、南久太郎町



北久寶寺町、南久寶寺町、博勞町、順慶町、安堂寺町、鹽町、末吉橋通とし、さらに又た南北に通ずる筋を東より順次に西方に繰れば曰く東横掘濱筋、板屋橋筋、八百屋町筋、堺筋、浪花橋筋、中橋筋三休橋筋、井池筋、心齋橋筋、御堂筋、御麩筋、佐野屋橋筋、坐摩前筋、西横堀濱筋とす。

さすがに三百年來大阪の目貫といはれしだけ、その風俗といひ、その家並といひ劃然として一種質實の氣風を隱約の間に見ることを得るあはれその質實は、實に我等祖先の遺風、脈々として今に存するものならむかし

- 築地……大川町通……浪花橋……淀屋橋……毎日新聞社……北濱通……株式取引所……北濱銀行……今橋通……住友銀行……鴻池銀行……高麗

築地 (つぎまち)

橋通……三井銀行……三井呉服店……三十四銀行……百三十三銀行……伏見町……道修町……平野町……電話交換局……此花館……御靈神社……文樂座……淡路町……泊園書院……機代亭……浪速銀行……北御堂……本町……東區役所……東警察署……南御堂……貞柳の宅……芭蕉翁終焉の地……座摩神社……難波神社……稻荷文樂座……順慶町……第四憲兵隊本部……心齋橋……電信局……佐野屋橋……四ッ橋

八軒家を西方に下ること二丁、今橋の西詰を北方に入りしところ、北方は淀川の流に面し、東南は東横堀川に臨みて四季の眺望に富める弓形の市街あり、これを築地とす、此處は北濱の東端にして、旅舎あり料亭あり、「多景色樓」尤も著はる。

大川町通 (おほかはちやうどほり)  
土佐堀川に沿ひし東西の通りは大川町にして、名高と「灘萬」の蒲鉾店



あり、淀屋橋の西方には大阪毎日新聞社あり。

浪花橋は即ち天神橋の西方に架りて、天満、天神、浪花、三大橋と

唄はれし有名の橋なるが、明治の初年、中之島を東方に突出したる

ため其處の中央の橋臺として、橋は自然に二つに分れぬ。

淀屋橋は、浪花橋の西方に架る、むかし天正年間、時の豪商淀屋

巨菴が今の渡邊橋附近に架したるを、名をそのままに此處に移せし

ものとぞ、南詰には名物煙草入を商賣ふ家多し。

北濱通 (またばまどほり)

この通りには北濱銀行あり、株式取引所あり、株式仲買店、兩側に軒

を連ぬ。

今橋通 (いまばしどほり)

こゝには日本生命保險會社あり、大阪新報社あり、住友銀行あり、累

代の富豪鴻池氏の邸宅あり、鴻池銀行あり、この通りを心齋橋に曲れ

ば旅館「紫雲樓」あり。

高麗橋通 (かうらいましどほり)

むかしは日本一の大坂城の外曲輪なりしたけ、さすがに今もその餘波

を存じて、橋の西詰なる角屋敷は、屋上に城の櫓の形を残す、これを

櫓屋敷と呼ぶ、橋の袂より西横堀にいつる間に第三十四銀行あり、第

百三十銀行あり、第一銀行大阪支店あり、三井銀行大阪支店あり、朝

日ビル會社あり、菓子店には「鶴屋」「風月堂」あり、呉服店には、今

もむかしのまゝに榮ふる三井呉服店あり。

この通りには、津々浦々の果まで歌はれし名物「虎屋饅頭」の店あり

しとぞ、今はその跡いかなりけむ、この虎屋饅頭が軒に掲げし看板

に曰く「御菓子所、虎屋大和太極藤原伊織製」



伏見町 (ふしみまち)

この通りは、船場に於ける一閑境とす、大阪貯蓄銀行あり、むかしは、この伏見町に「異國新渡奇品陳物類、蝙蝠堂」といふ大看板を店頭に掲げて、支那の物産を商賣ひし匹田といへる家ありしといふが、今は亡し。

道修町 (どしゅうまち)

この邊り悉く和漢洋の藥種店充つ。立派たる建物は明治生命保險會社の大阪支店なり

平野町 (ひらのまち)

こゝは又た賑はしき往來にて、電話交換局あり、料亭には「堺卵樓」あり、寄席には落語の定席として「此花館」あり。むかし赤穂の義臣、大石良雄に頼まれし、俠男兒天野屋利兵衛は、

このあたりに住みしといふ、一説には内平野町ともいふ、今詳かならざるを惜しむ。

御靈神社 (ごりやうじんしゃ)

平野町の通りを御靈筋に曲りしところであり、天照皇太神、八幡大菩薩を祀る、別に鎌倉權五郎を祭る、境内は一六の縁日ごとに夜店に充つ、

この境内に、「文樂座」あり、これは義太夫界に於て日本一の春太夫と人形遣ひの名人桐竹紋十郎が年中の興行に大入を取りつゝあるところなり、社頭の御靈筋は呉服商軒を並べて往來賑はしく、五二館と呼ぶ勸商場あり、大阪一の天獄羅として、東京人を驚かすべき「梅月」もあり。

淡路町 (あはぢまち)



東横堀近く、この通りに碩儒藤澤南岳翁が帷を下されし泊園書院あり  
 定席には落語の定席「幾代亭」あり、銀行は日本貯金銀行、浪速銀行、  
 會社は東京ビル會社の支店など。

●北御堂 (きたのみだう)

備後町より本町にかけ、御堂筋より座摩前筋に到る間を一廓として、  
 こゝに津村御堂あり、俗に北御堂といふ、京都西本願寺門跡の御坊な  
 り、本尊の阿彌陀佛は、長三尺五寸にして名工安阿彌作とぞ、その津  
 村といふは、本願寺八代蓮如上人、こゝに北攝津の村人を集めて教化  
 されしより始まる、規模の宏壯は市中第一の佛園とす。  
 表門を御堂筋といふ、念珠屋多し。

『西風に何を自力の扇づれ』

(宗 因)

●本町 (ほんまち)

むかしは大阪城の追手門に當りしところにして、慶長の古圖を見れば  
 この追手に雲を凌ぐの四重櫓と板鐵の多門ありしを、惜しや元和の戦  
 に焼落されしとかや、今は此の通りに大阪生命保險會社あり、第三銀  
 行の支店あり、東區役所あり、東警察署あり。

●南御堂 (みなみのみだう)

北久太郎町より北久寶寺町にかけ、御堂筋より座摩前筋に到る一廓を  
 難波御堂とす、俗に南御堂といふ、東本願寺門跡が御坊にして、本  
 尊は安阿彌作の阿彌陀佛なり、こゝは教如上人、台命によりて、この  
 地に建てられしものとぞ。

また南御堂の傍に伊聖芭蕉翁が終焉の地といふ、花屋仁兵衛が家あ  
 りしと、芭蕉翁は伊賀の人、姓を松尾氏、俗稱を甚七郎と呼び、遠  
 く祖先は平氏の功臣彌平兵衛宗清にして、家は世々鐵砲鍛冶を以て



城主藤堂家に仕へしとぞ、翁は學識宏博氣象飄逸、かつ禪機に熟す、その俳諧に於ける正風を唱導して天下を周遊す、及門の子弟二千人、元祿七年甲戌十月十二日、痢を病みて浪華の客舎の歿す年五十一、翁が病の床につくや、洛西の去來、湖南の西秀を始め、木節、乙州、丈草、李由、いづれも報を聞いて至る、其角亦た臨終の一日前に着して、翁が枕に侍せしとかや、越て十四日、翁が柩はこの人々に依りて江州に送られ其屍骸は栗津なる義仲寺に葬られぬ翁、歿する前三日、句あり、

『白菊や目にたてゝ見る塵もなし』

座摩神社 (なんばじんしゃ)

南御堂の裏にあり、鎮坐の神々は、生井神、福井神、外二柱の神にて例年七月二十一日は、盛なる夏祭を執行する、表門の通りは座摩前

筋にて古着商多し。

難波神社 (なんばじんしゃ)

博労町にあり、俗に博労町の稻荷といふ、仁徳天皇を祀る、稻荷の祠は、その末社にあり、境内に神苑あつて鶴を放てり、例年の夏祭は七月二十一日。

この社内に「稻荷文樂座」ありしが、今は御靈に移りて跡は劇場となりぬ、書肆嵩山堂は此の東、心齋橋筋の角屋敷なり。

順慶町 (じゆんけいまち)

この通りは西方新町の遊廓に續きて、往來殊に賑はし、第四憲兵隊本部あり。

心齋橋 (きんさいばし)

平野町の通りより、南方、心齋橋を過ぎて戎橋に到る間、これ大阪市



中の大阪にして最も繁華なる所、立並ぶ商店は、看板に、陳列に、見本函に、あらゆる意匠を凝して店頭を飾りつゝあり、わけて日西天に發して、軒端はの暗ふなりたる時、戸毎の電燈パツと輝やき、流行の美術品に映じたる壯觀は、都會馴れざる人の目を驚かしやせむ、この筋に架れる心齋橋は、明治五年、この長堀川に架設せられたるもの、長さ二十餘間、幅二間餘、所謂鐵の釣橋にして、橋下さら一柱を用ゐず、半月形の鐵桁を以て其重量を支ふ、北詰に電信支局あり料亭「はり半」あり。

佐野屋橋 (このやばし)

心齋橋の西に架りし木橋、橋の南北を通じて、佐野屋橋筋といふ東京の照降町か、柳原か、兎に角、兩側の家は、古着商のみに満たさる、四つ橋 (よつばし)

佐野屋橋の西方、長堀川と西横堀川との交叉點は、こゝに十字形を畫て、東西南北おのゝ一橋を架す、長堀川に架するもの、曰く上繫橋、曰く下繫橋、西横堀川に架するもの、曰く吉野屋橋、曰く炭屋橋、以上の四橋、これを總稱して四つ橋といふ、橋の袂に碑あり、小西來山が句を刻す。

『涼しさに四つ橋を四つ渡りけり』

その西横堀川の東岸を船場に渡れば材木商多く、その西岸を堀江に渡れば名物の烟管店立並ぶ。

『浪花がた入江をめぐる蘆鴨の玉藻の舟に浮腫すらしむ』

島之内

船場より橋一重隔て、北方は長堀川、西方は西横堀川、東方は東



横堀川、南方は道頓堀川、東西南北いづくを向いても川に包まれたるところ、これを島の内とす。

その長堀川に架れる橋は入り、开を西より東に向ふて列挙すれば  
曰く炭屋橋、曰く佐野屋橋、曰く心齋橋、曰く三休橋、曰く中橋、  
曰く長堀橋、曰く板屋橋、曰く安綿橋

その西横堀に架れるを北より南に繰れば、曰く下繫橋、曰く御池橋  
曰く清水橋、曰く木綿橋、曰く金屋橋

また東横堀を南より北に擧ぐれば、初めに上大和橋、次に瓦屋橋、  
最後は九之助橋

さらにまた道頓堀を西より東に溯れば、大黒橋、新蛭子橋、惠美  
須橋、太左衛門橋、相合橋、日本橋、下大和橋とす。

以上の廿三橋に取圍まれし島之内の市街、その東西の通を北より南

にいへば、炭屋町、鰻谷、大寶寺町、清水町、八幡町、三津寺町、

及び濱筋とし、さらに南北に通せる筋を東より順に擧ぐれば、大和

町、問屋町、竹屋町、南綿屋町、鍛冶屋町、長堀橋筋、千歳町、玉

屋町、笠屋町、疊屋町、心齋橋筋、御堂筋、佐野屋橋筋、舊大國橋

筋、および濱筋とす。

船場は大阪の目貫なり、然り、その實質に於てたしかに大阪の目貫

なり、とすれば島の内は今日以後の大阪の標準なり、まかり、その

華奢なる點に於て、たしかに新大阪人士の標準區域なるべし、乞ふ

船場を見よ、父祖代々同じ名を嗣ぎて、その家憲を破らず、過去に

於て、現在に於て、將た近き將來に於て、更に累代の家業を改めず

百年墳墓の地を動かす、まかも旦那衆といふ一種の氣風は、その家

長の頭腦を支配し、今なほ船場辯もて人に接するところあり、さら



に眼を轉じて島の内を見よ、角引廻したるは俳優何がしの住居なり、數寄を盡した小意氣な構へは藝妓何がしの屋形なり、まかも西には堀江の遊廓を扣えて、南は川竹五花街に隣り、衣裳の撰擇、髪、結方、一種の風に流れつゝある、これ豈島之内にあらずや、これを妙齡の女子もて對比せば、低聲三弦を弄して玉山まさに崩れんとするが如きは島之内なる婀娜女の標本なるべく、從容琴を弾じて嬌羞坐に堪へざるが如きは船場に於ける阿嬾の面影なるべし。

- 安綿橋……………高橋病院……………心齋橋筋……………大丸呉服店……………高島屋呉服店……………
- 南警察署……………商品館……………日本貯蓄銀行……………御津八幡宮……………御津寺……………
- 橋……………南區役所……………日本橋



安綿橋 (やすわたばし)

長堀川の北端に架る、橋の袂に富業住友氏が邸宅あり、數寄を凝せる庭園あり、こゝより西方へ二丁あまりに高橋病院あり。

心齋橋筋 (きんさいばしすじ)

こゝは島の内の中心にして、終夜人車の響を絶たざるほどの繁華は、たしかに東京の銀座通りに勝る賑ひなり、鰻谷には「十合呉服店」あり、八幡町には「高島屋呉服店」あり、清水町の角引き廻して「大丸呉服店」あり。

清水町——即ち大丸の向ひ角を東方に曲れば、三丁ばかりにして南警察署あり。

周防町には大阪第一の勸商場あり、商品館といふ、建築壯麗を極む、館の中央には築山あり。

八幡町の角には日本貯蓄銀行あり。



その向ふ角を西方に行けば、御津八幡宮あり。

御津八幡宮は、人皇十六代應神天皇を勧請したるところ、むかし

は味原池に近き八幡山にありしを、此處に移しまゐらせしとぞ、例

年の夏祭は、七月十六日。

この邊り骨董店あり、道具店多し。

御津寺町を西に曲れば御津寺あり。

御津寺は古義真宗派にして、山號を大福院といふ、行基菩薩の開基

にして、本尊の十一面觀世音は長五尺八寸の立像にて行基の作とい

ふ、そのいにしへは此處に周圍三十尺と稱する巨大の樟樹ありしが

いつの火事にか焼け亡せたりとぞ。

戎橋の詰には、飲食店「丸萬」あり、それより西方には旅館あり、

東方は即ち宗右衛門町の歌吹海なり

長堀橋 (ながほりばし)

紀州に達する官道にして、即ち堺筋なり、橋より二丁南、鰻谷に

出づるところに南區役所あり。

長堀橋より一直線に南方、道頓堀川に出づれば、日本橋なり、日本橋

より一直線に南方すれば、僅かに十二丁にして第五回内國勸業博覽

會の門前に達す



鐵道名勝案内

一名近畿名勝



目次

關西鐵道大阪梅田	關西鐵道奈良	關西鐵道長柏	關西鐵道王機	南和鐵道高	南和鐵道五	紀和鐵道和	紀和鐵道五	南海鐵道和	南海鐵道和	高野鐵道長	西成鐵道大	西成鐵道大	東海道線大	東海道線大	尾西鐵道新	尾西鐵道新	關西鐵道淡
寺間	町間	原間	寺間	田間	田間	波間	波間	橋間	橋間	橋間	阪間	阪間	阪間	阪間	宮間	宮間	古宮間
百三十九頁	百四十頁	百四十九頁	百五十三頁	百五十六頁	百五十九頁	百六十三頁	百七十四頁	百七十七頁	百八十五頁	二百零八頁	二百九頁	二百九頁	二百九頁	二百九頁	二百九頁	二百九頁	二百九頁
關西鐵道總	關西鐵道津	關西鐵道山	關西鐵道草	關西鐵道加	關西鐵道網	奈良鐵道京	京都鐵道京	東海鐵道大	東海鐵道大	近江鐵道貴	近江鐵道貴	山陽鐵道神	山陽鐵道神	播但鐵道姫	播但鐵道姫	中國鐵道津	中國鐵道津
山間	田間	津間	田間	津間	井奈間	井奈間	井奈間	部間	部間	部間	部間	部間	部間	部間	部間	部間	部間
二百二十二頁	二百二十五頁	二百三十頁	二百三十二頁	二百三十八頁	二百四十二頁	二百四十七頁	二百五十一頁	二百五十四頁	二百七十四頁	二百七十四頁	二百七十八頁	二百七十八頁	二百七十八頁	二百七十八頁	二百七十八頁	二百七十八頁	二百七十八頁

關西鐵道 城東線 (天王寺 大阪梅田間)

〔天王寺〕	〔桃山〕	〔天王寺〕	〔玉造〕	〔玉造〕	〔玉造〕
關西鐵道天王寺	關西鐵道天王寺	關西鐵道天王寺	關西鐵道天王寺	關西鐵道天王寺	關西鐵道天王寺
天王寺	天王寺	天王寺	天王寺	天王寺	天王寺
百三十九頁	百四十頁	百四十九頁	百五十三頁	百五十六頁	百五十九頁
百六十三頁	百七十四頁	百七十七頁	百八十五頁	二百零八頁	二百九頁

〔天王寺〕 關西鐵道天王寺驛より、北に折れて大阪驛に達する支線あり

これを城東線とす、桃山驛へは一哩三十鎖

〔桃山〕 名高き桃山の遊園に近く、附近には産湯稻荷、梅屋敷、舍利寺など、いづれも遊覧するに足る、驛より玉造停車場へ一哩

〔玉造〕 眞田山稻荷へ僅かに一丁、大阪城へは十丁ばかり。この遊眺望殊に佳、むかしの二軒茶屋は驛近くのところにあり、京橋驛へは一哩五十二鎖

〔天王寺〕 産湯稻荷……梅屋敷……舍利寺……

〔玉造〕 眞田山……大阪城……二軒茶屋……〔京橋〕……〔櫻の宮〕……

櫻の宮……大長寺……母恩寺……水道水源地……〔天満〕……造幣局……

泉布観……天満天神……〔梅田〕



目次

關西鐵道大阪梅田	關西鐵道奈良	河南鐵道長柏	關西鐵道王機	南和鐵道高橋	紀和鐵道和五	南海鐵道和難	高野鐵道長沙	西成鐵道安大	東海道線大	尾西鐵道新彌	關西鐵道淡名
寺間	町間	原間	寺間	田間	波間	橋間	橋間	阪間	阪間	宮間	古宮間
百三十九頁	百四十頁	百四十九頁	百五十三頁	百五十六頁	百五十九頁	百六十三頁	百七十四頁	百七十七頁	百八十五頁	二百八頁	二百九頁
關西鐵道總津	關西鐵道山津	關西鐵道草加	關西鐵道網加	奈良鐵道京都	京都鐵道京園	東海鐵道大神	近江鐵道貴生	山陽鐵道宮島	播但鐵道姫路	中國鐵道津岡	
山間	田間	津間	島間	井間	部間	阪間	根間	島間	野新井間	山間	
二百二十二頁	二百二十五頁	二百三十頁	二百三十二頁	二百三十八頁	二百四十二頁	二百四十七頁	二百五十一頁	二百五十四頁	二百七十四頁	二百七十八頁	

關西鐵道 城東線 (天王寺 大阪梅田間)

- 〔天王寺〕……〔桃山〕……産湯稻荷……梅屋敷……舍利寺……
- 〔玉造〕……真田山……大阪城……二軒茶屋……〔京橋〕……〔櫻の宮〕……
- 櫻の宮……大長寺……母恩寺……水道水源地……〔天満〕……造幣局……
- 泉布観……天満天神……〔梅田〕……
- 〔天王寺〕 關西鐵道天王寺驛より、北に折れて大阪驛に達する支線あり
- これを城東線とす、桃山驛へは一哩三十鎖
- 〔桃山〕 名高き桃山の遊園に近く、附近には産湯稻荷、梅屋敷、舍利寺など、いづれも遊覧するに足る、驛より玉造停車場へ一哩
- 〔玉造〕 真田山稻荷へ僅かに一丁、大阪城へは十丁ばかり。この遊眺望殊に佳、むかしの二軒茶屋は驛近くのところにあり、京橋驛へは一哩五十二鎖



〔京橋〕 驛より櫻の宮に至る一哩十鎮。

〔櫻の宮〕 淀河の畔、和左正義利より十丁あまりにあり、春咲く満堤の

櫻樹は東都の向嶋と並べ稱せらる、近傍には大長寺あり、母恩寺あり、

水道水源地亦た遠からず。

〔天満〕 造幣局に近く、泉布觀へも近し、天満天神へは十丁ばかり、

大阪驛に至るその間一哩とす。

〔大坂〕 城東線はこゝに終る、その延長六哩四十七鎮 わづかに一

時間餘にして往復することを得。

### 關西鐵道 (湊町、奈良間)

- 〔湊町〕……〔今宮〕……姪子神社……第五回内國勸業博覽會……天王寺……
- ……馬車鐵道會社……徳水寺……茶白山……一心寺……四天王寺……生
- 國魂神社……高津の宮……〔平野〕……大念佛寺……田村麻呂の舊蹟……

〔湊町〕 驛は道頓堀川の畔、大黒橋南詰の西半丁にあり、關西鐵道

は此處より起り奈良を経て名古屋に達す、その奈良までの延長哩程

二十五哩四十三鎮、汽車この間を往く、たゞ一時四十七分間を要す

るのみ。

〔宮〕 驛は今宮と稱すれども、その實、木津村の西端、西濱町の近

くにあり、有名なる姪子神社へ六丁、第五回内國勸業博覽會場

一今 (續六十七)

二哩九



へは僅かに八町にして達す。

〔天王寺〕 此處より線路三つに分る、その幹線は奈良驛に走せ、支線の南するものは住吉驛に行き、北するものは大阪驛に赴く、驛の西方に隣りて大阪馬車鐵道會社あり、馬車は此處を起點として、阿部野住吉に達す、驛の近傍には精進料理に名を得たる雲水寺あり、徳川家康が陣屋の跡の茶臼山あり。山に隣りて圓光大師の舊蹟なる阪松山一心寺あり。驛より三丁には荒陵山四天王寺あり、聖徳太子の建立に係る、寺域は二萬五千六百餘坪、西門には小野道風が筆に成りたる額を掲ぐ、題して曰く、『釋迦如來、轉法輪所、當極樂土、東門中心』と、境内には公園あり、園中の櫻樹は春ごとの色に匂ふて雅俗の袖を曳くに似たり。その他、生國魂神社、高津の宮、これも十丁あまりに鎮坐したまふ

(二哩三十四)

〔平野〕

(二哩五十六)

こゝは大阪より奈良への街道にして、また堺、高野への街道に當る、人口殆んど一萬、大阪府廳より三里二十丁、融通大念佛派の總本山大念佛寺へは驛より二丁、將軍田村麻呂が舊蹟へは三丁あり。町の四方には今なほ昔日のまゝの門を存す。近郷に於ける名邑とす。

〔八尾〕

(二哩五十五)

驛は八尾町へ半里ばかりの植松村にあり、八尾町は人口八千郡の名邑とす、町内には教如上人が建立に成りたる大信寺あり、俗に八尾御坊といふ。八尾と平野の間なる久寶寺村には顯証寺あり、俗に久寶寺御坊と呼ぶ、むかし蓮如上人が住みたまひしところとて境内には蓮如の松あり、飛彈の内匠が數寄を盡せし合月亭あり、その南十丁を隔てし龍華村には、聖徳太子が自作の像を祀れる勝軍寺あり、この邊りは聖徳太子が守屋と戦ひたまひし古戰場にして、守



(哩三)

屋の塚あり、守屋首洗ひの池あり。また驛より東方三十丁に高安の里あり、恩智村あり。高安は筒井筒の和歌に名高きところ、恩智は楠公が秘蔵の家臣恩智左近滿二が住みしところ、その城趾は今なほ山の半腹に残つて高等小學校となりぬ。

〔柏〕

原 ころより線路は分れて河南鐵道となる。柏原は郡の名邑にして高野街道に當る。附近には道明寺の天神あり。玉手山あり。譽田の八幡あり。萬井寺あり。鐵道線路は是れより東方に走せて三個の壓道を潜る、即ち龜の瀨の壓道なり。このあたり水白うして山縁に、一徑斜に通じて牛車徐に行く、風景絶佳。

〔王〕

寺 線路は是れより分れて南和線に連絡し、また奈良線へも、遠く紀和線へも連続す。驛より一里あまりに信貴の毘沙門天あり。また驛の傍には達磨塚あり。法隆寺に至る間には龍田神社あり。和

(續三十七哩五)

九十哩二)

鎮

歌に詠まれし三室の山あり。官幣大社廣瀨神社あり。

〔法隆寺〕

ころは奈良への通路にして人口三千。村内には有名なる法隆寺あり、舊は斑鳩寺と呼び、推古天皇の御宇、聖德太子の開基とぞその境内には金堂あり、五重の伽藍あり、東隅には八角造りの夢殿あり、結構の莊嚴近國無比と稱す。

〔郡〕

郡山は舊柳澤氏十五萬石の城下にして人口一萬三千と稱す市街稍繁華なり。驛より半里あまり、唐招提寺は聖武天皇の勅願所として世に知られし舊蹟とぞ。また一里半には有名なる西大寺ありその近くに神功皇后の陵あり。

〔奈〕

長 青丹よし平城の京は、元明天皇以來七代七十餘年の舊都にして、山光水色滴るが如く、まかも名勝古跡に富む。徳川氏のところは此處に奉行を置きしが、今は奈良縣廳の所在地となりぬ。市は東

(續六十七哩二)



西二十四丁、南北一里に亘り、人口三萬、商業また盛なり、土佐派の畫伯光長もこゝに生れ、佛像彫刻の名家運慶も此處に生れぬ。もしそれ名勝舊蹟の見るべきものを擧ぐれば、官幣大社春日神社あり。三笠山あり。東大寺あり。正倉院あり。二月堂あり。手向山の八幡宮あり。奈良坂あり。般若寺あり。佐保山あり。多門城趾あり。興福寺あり。南圓堂あり。猿澤池あり。絹懸柳あり。十三鐘あり。春日神社は驛より二十丁、春日山の麓にあり、神護景雲年間建立にして、武甕槌命、經津主命、天兒屋根命姫神の四柱を祀る正殿あり、廻廊あり、外院あり、内院あり、その結構善美を盡せり、境内廣うして路の兩側には誰が施主やらむ幾百基の石灯籠立ならぶ間に雄鹿の群れ遊ぶを見る、その大華表の邊は所謂る古昔の春日野にして雪消の澤の古跡あり。また社殿の後は、むかし安倍仲磨

が袖に血潮の歌を染めたる月の名所の三笠山にて、蜿蜒たる丘陵一帶を總稱して春日山と呼ぶ、春日神社の北方に隣れる東大寺は、即ち奈良の大佛殿にて、堂の高さ十五丈六尺、東西五十四間、南北これに半す、こゝに安置せる金銅の盧舍那佛は巨大の坐像にて、膝より頭上まで五丈三尺五寸、これ實に當時の碩徳行基菩薩が七年の星霜を閲して前後八回その設計を改ためしといふ。殿前には宋の陳和卿が苦心の鑄造に成れる金燈籠あり。大佛殿の北には古來の書畫珍器を収めたる正倉院あり、今は宮内省の寶庫となりぬ。また大佛殿の東方には彼の若狹の水取に名高き二月堂あり、僧良辨が開基せしところ、堂の南には手向山八幡宮あり、古來紅葉の名所として和歌に名高きところ、あはれこの度は幣も取あわずと詠まれたる其楓樹も今は殆んど枯失せしを惜しき心地せらる。また大佛殿の西門を北



に出づれば護良親王の敵を計らせたまひたる般若寺あり。その北を南都八景の一なる奈良坂とす。こゝに松永久秀が築きし多門城の趾あり。この邊りを佐保山といふ、螢の名所なり。さらに又た西方に向へば興福寺なり、南都七大寺の一なりしが、今はたゞその一部なる南圓堂、北圓堂の存するのみ。興福寺の門前には弦月形の池ありこれを猿澤池とす。池の邊には絹懸柳あり。少し離れて十三鐘あり絹懸柳は奈良の御門に仕へまつりし采女が、こゝにその身を投げたる紀念。十三鐘は物の哀れに引かれたる石籠詰の名残とぞ。關西鐵道の幹線はこの奈良驛より名古屋に向ふ。またこの驛より分れて京都の七條、大和の櫻井を往來するもの、これを奈良鐵道とす

### 河南鐵道

(柏原、長野間)

- 〔柏原〕……〔道明寺〕……土師神社……道明尼寺……玉手山……安福寺……
- ……萬井寺……〔古市〕……後藤基次戦死の趾……豊田八幡宮……白鳥陵……
- ……たぐる大黒……駒ヶ谷桃園……〔喜志〕……喜志宮……壺井八幡宮……〔宮田林〕……金剛山……金剛山寺……〔千早城趾〕……〔瀧谷〕……瀧谷不動……
- ……〔長野〕……錦溪温泉……觀心寺……小楠公警塚……後村上天皇陵……
- ……天野金剛寺……瀧畑四十八瀧



〔柏原〕 關西鐵道の此の驛より折れて南方に走るもの、これを河南鐵道とす。その終點長野驛に達する間に五つの停車場あり。曰く道明寺。曰く古市。曰く喜志。曰く富田林。曰く瀧谷不動。延長哩程十哩二十七鎮とす。

〔道明寺〕 驛を出て、西方へ二丁、道明寺村には土師神社あり、昌泰四